324
341

始

324
341

富田敷純僧正著

祕密百話

加持世界社發行

324-341

富田敷純僧正著

祕密百話

加持世界社發行

大正
2. 4. 1
内交

祕密辭林を著して後、簡易で通俗の讀物を著さんと志し、一昨年夏暑い時分に此の祕密百話の稿を起した、所が其年九月新義眞言宗豐山派の宗務長に當選したので、不得止柄にもない方へ手を出した、事務の型に嵌つて見ると、こうてもない、あゝでもないと、整理とか交渉とかで日も暮らせば夜も明す、三十日も四十日も筆を採る暇もなく、偶々筆を呵しても碌なものは出來ない、一年有半で、自身すら滿足の出來ない本が出來た、固よ

り深行の阿闍梨の御覽に供する譯ではない、只密教とはどんなものだか知らぬ素人に、讀んで貰へば夫で著者の望は足りるのである、

大正二年三月五日

乙亥庵　斅純識す

祕密百話目次

一　緒言……一頁
二　祕密……二
三　密教の範圍……三
四　顯教と密教……四
五　密教は釋迦教なりや……六
六　事相と教相……七
七　派と流と方と傳と義と說と……八
八　口傳……九
九　口傳と教權……一〇
一〇　文書記載法……一一
一一　解釋の四階段……一三

一二　密教の起原……一四
一三　八祖相承……一五
一四　金剛界系と胎藏界系……一六
一五　等葉不等葉……一八
一六　印度の密教……一九
一七　支那の密教……二〇
一八　弘法大師傳……二一
一九　世界的偉人……二二
二〇　判　教……二四
二一　十住心……二五
二二　入唐八家……二八
二三　東密と台密……三〇
二四　大師の門下……三一
二五　宮中佛法と平民佛法……三二

二六　野澤十二流……三四
二七　興教大師……三六
二八　新義と古義……三九
二九　分派の根本義……四〇
三〇　流　例……四二
三一　事相三十六流……四三
三二　修驗道……四四
三三　兩部神道……四六
三四　密教の自然主義……四七
三五　古代思想と密教……四八
三六　所依の經典……四九
三七　大日經……五一
三八　金剛頂經……五二
三九　曼荼羅……五三

四〇 萬像網羅……五四
四一 佛菩薩網羅の方法……五五
四二 胎藏界の名稱……五八
四三 金剛界の名稱……五八
四四 金剛界と胎藏界……五九
四五 金剛界曼荼羅……六一
四六 金剛界三十七尊……（圖入）……六四
四七 胎藏界曼荼羅……（圖入）……六八
四八 三部……七一
四九 五部……七二
五〇 大日如來……七四
五一 常恒說法……七五
五二 五智……七六
五三 四種法身……七七

五四 佛身の成立……七九
五五 諸佛の本誓……八〇
五六 佛菩薩の分類……八一
五七 金剛薩埵……八二
五八 如意輪觀音……八四
五九 不動明王……（圖入）……八五
六〇 聖天……八七
六一 仁王尊……八八
六二 十三佛……八九
六三 體相用三大……九一
六四 六大無礙……九二
六五 識大周遍……九六
六六 四曼相大……九七
六七 三密用大……九八

六八　三密加持……九九
六九　即身成佛……一〇〇
七〇　修法の種類…(圖入)……一〇二
七一　四種法……一〇四
七二　修法の組織……一〇五
七三　修法の効果……一〇九
七四　護　摩…(圖入)……一一一
七五　諸尊法……一一三
七六　調伏法…(圖入)……一一四
七七　觀　念……一一六
七八　入我我入……一一七
七九　正念誦……一一九
八〇　字輪觀…(圖入)……一二〇
八一　五相成身觀……一二一

八二　六種供養……一二三
八三　種　字……一二五
八四　眞　言……一二六
八五　印　契……一二七
八六　理印と形印…(圖入)……一二九
八七　密教より見たる各宗の合掌…(圖入)……一三一
八八　淨土宗の彌陀と眞宗の彌陀……一三三
八九　三昧耶形……一三四
九〇　五輪塔の組織…(圖入)……一三五
九一　五輪塔と三大……一三九
九二　身體上の五輪…(圖入)……一三九
九三　如意寶珠……一四一
九四　金剛杵…(圖入)……一四二
九五　蓮　華……一四四

九六　機根……一四四
九七　修行……一四六
九八　灌頂……一四八
九九　五戒十善……一四九
一〇〇　三密雙修……一五一

祕密百話目次 終

祕密百話

一　緒言

富田敦純著

眞言祕密の法とは解らぬとの代名詞となつて居る、此解らぬと相場の極まつた、眞言祕密が、近頃種々の事情で日一日に世の注意を牽くこととなつた時と云ふものは實に妙なものだ、然るに眞言祕密教は矢張眞言祕密教で、今日まで誰も之を全般に亘つて、解釋したものはない、稀に其一端を漏すものがあれば、頑固の阿闍梨は直にやれ越法罪だとか何とか難癖をつける、そこで偶々祕密教のことを書いても理論的方面即ち教相の話丈で、實際的方面即ち事相の祕密は一寸とも漏さない、所が世間の方では加持祈禱は迷信だの、護摩は外道の邪法だのと勝手な熱を吐いて居る、弘法大師は「賢者の説默は時を待ち人を待つ」と仰せられたが、今日の如き文明の進歩

した時代に是も秘密だあれも秘密だと、秘密一點張て立派なお寶を臭いものでも隱すやうに秘密にする必用はない

二　秘密

秘密と云ふことには二通りある、其物自體が秘密でどうしても說くとの出來ないものと、其物自體は秘密ではないが之を說くと害があるから秘密にするのとてある、其物自體が秘密てあると云ふのは醉醒の水の甘さは下戸知らずて、酒を呑まぬものに向つて酒に陶然として醉ふた妙味を談つた所て、只夫は口て云ひ耳て聞くと云ふ丈て實際の妙味が解かるものてはない、此境界は大日經疏に唯獨自明了餘人所不見て飲んて始て解るのてある、是と同いとて如何なる職業にも技術にも、自から熟練して覺るの外決して口て傳授するとの出來ない秘密がある、第二に說けば害があるから秘密にするのは劇藥毒藥は一般の人に賣らぬと同樣て、劇藥毒藥其物自體は秘密てはないが、之を其道にあらざる人に渡すのは實に危險千萬てある、藥種屋が店に有る品を、或人には賣り或人には賣らぬのは不公平の極のやうてあるが、公安と云ふ上から仕方がない、眞言秘密の法も此二方面がある、技術家ても口て傳授するとの出來ぬ妙技を有すれば有する程其技術が進歩して居るので、劇藥毒藥の澤山あればある程其店はヘボ藥種店てはない、顯教が低い密教が高いと云ふは此處てある

三　密教の範圍

密教と云ふ語は最も廣い範圍に涉つて居る、現今ても西藏國、支那國の喇嘛教、尼波羅國の密教、我國にありては修驗道と台密は勿論のこと、日蓮宗の加持祈禱も此中に含まれるべきやうてあるが、西藏や尼波羅の秘密教は原始的のもので發達の程度が頗る低いから、眞言密教とは比較にならない、台密は眞言密教の兄弟分てあるが、空假中の三諦を根抵として居るから三部門の建立て眞言密教の兩部建立とは趣が違ふ、修驗道は眞言密教に從屬しては居るが在家の菩薩を主とするのてある、日蓮宗の加持祈禱は殆ど迷信的てある、要するに以上の諸密教は眞言密教の糟粕てある、著者が說明せんとする眞言密教は醇の醇たるものて其所屬宗派を擧れば、以

派名	寺院數	派名	寺院數
眞言宗東寺派	一七六	同　高野派	二五六七
同　御室派	一一二九	同　大覺寺派	五七九
同　醍醐派	一六四	同　山階派	一四〇
同　小野派	三〇	同　泉涌寺派	三九
新義眞言宗豐山派	三〇二一	同　智山派	三一六三

上の十派で、此等の各派が說く所の敎理である

四　顯敎と密敎

弘法大師は顯敎と密敎の區別を、辯顯密二敎論と云ふ書物を著して說かれて居るが、此卷首に於て「應化の開說を名けて顯敎と曰ふ、言顯略にして機に逗へり、法佛の談話之を密藏と云ふ言秘奧にして實說なり」と仰せられた、顯敎とは讀んで字の如く顯露の略說で、誰にでも說き聞せる事の出來る敎である、否人に說き聞かせる爲めに應化身の釋迦如來が開かれた敎である、故に是を隨他意方便の說法と云ふのである、台密を除くの外小乘敎の俱舍宗成實宗から、大乘の法相宗、三論宗、天台宗、華嚴宗さては淨土宗、眞宗、禪宗、日蓮宗皆是れ顯敎である、然るに密敎は全く之と反對て人に說き聞かせる爲めに說いた敎でなく、自分で得た境界を自分で喜んで居るのである故に隨自意眞實の說法と名くるのである、其敎主は法身佛の大日如來である、顯敎は理論を表とし眞如實相の空寂の理を本源として演繹的に說くから、愈々眞如其物の最極の問題になると不可知と答ふるの外はない、密敎は事實を表とし色(物質)心(精神)即ち六大を本源として歸納的に進むから、顯敎が不可知なりと思ふたことを明に說くことになる、顯敎の空理とは趣が違ふのである之を圖示すれば

佛敎
- 顯敎—應化說—隨他意—方便—不可知界を存す—理論的—演繹的
- 密敎—法身說—隨自意—眞實—不可知界なし——事實的—歸納的

となる、尙顯敎と密敎の區別を悉しく知らんと欲する人は辯顯密二敎論、顯密不同頌等を讀むがよい。

五　密教は釋迦教なりや

釋迦如來の說いた教は顯教で大日如來の說いた教が密教であるから、密教は釋迦如來の說た教でないと威張密教家がある、そうすると釋迦如來が說いた教が佛教であるとせば密教は佛教でないとになる、是は甚だ間違つた考である、云ふまでもなく密教も佛教の一部分であるから、無論釋迦如來の說いた教である、併し其說いた三昧が違ふので、卽ち釋迦如來が大日如來の三昧に住して之を說いたと云ふことになる、而して之を歷史的に云へば密教の建設者たる龍猛菩薩は釋迦教の眞髓を握つて、之に當時に存在する總ての宗教を調和統一せられたのである、其調和統一せられたる程度が大なれば大なる程、舊思想に對して大膽な批評をなすものである、密教は釋迦如來の說いた教でないと喝破せられた龍猛菩薩の識見は實に驚くべき偉大なものである西洋の學者が龍猛菩薩を大乘の釋迦と云ふも御尤である、德川三代將軍家光が我祖父家康は諸君と共に兵馬の街に奔馳したのであるが、我は生れ乍らにして將軍であるから、諸君とは絕對に趣を異にすると宣言したと同一筆法である

六　事相と教相

眞言宗には二つの方面がある卽ち教相と事相である、興教大師樣は教相の花に依りて事相の菓を結ぶと仰せられあるが、教相とは教理的方面で、事相とは實際的方面である、此教相事相は車の兩輪、鳥の雙翼である、凡そ宗教と云ふものは空理空論を尊ぶものでなく實際の事實を主とするものであるが、其中でも密教は特に實際的方面に重きを置くものである、故に教相は分派から云ふても、高野山學派(古義派)、東寺學派(古義派)、根來山學派(新義派)、新古和融學派位のものであるが、事相は小野廣澤の根本十二流を始め其支流の分派が仲々多い、併し事相と云ふたとて教相を離れたるものではなく、教相と云ふたとて事相を離れたものではない、但し教相のとは書物にも載せるから別に秘密のとはないが、事相の事は阿闍梨の口傳に依るので全く秘密である、密教の密教たる所以は此事相の秘密に存するのである

七　派と流と方と傳と義と說と

序に一寸說明して置くが、派と流と方と義と說と傳との區別てある、是に就ては劃然たる別もないが、先づ派と云ふは古では新義派、古義派の二て是は敎相上の別れてある、今は制度上、東寺派、高野派、大覺寺派、御室派醍醐派、山階派、小野派、泉涌寺派、豐山派、智山派の十派に分れて居る、流とは事相上の小野流、廣澤流と云ふが如きもので、方とは事相の小野流の中の憲深方と云ふ如きものてある、併し流と方との用法は一定して居らない、報恩院憲深の流義を報恩院流とも又は憲深方とも云ひ或は幸心方(幸は報、心は恩の略字)とも云ふが如きて、恰も類と種との區別と同じく其標準の立て方て異るのてある、傳は事相上の說明の區別て、報恩院流憲深の傳とか地藏院方深賢の傳とか稱するが如きものてある、義と說とは敎相上の分類て新義と古義、若くは瑜公の義、快師の義と云ふが如きものてある、說もまた古義說新義說等と稱するが如きものてある、丁度敎相上の派が事相上の流や方て、敎相上の義と說が事相上の傳に當るのてある

八　口傳

秘密は如何にして相傳するかと云ふに夫は口傳に依て相承するのてある、口傳とは阿闍梨の口から弟子の耳に秘密に相傳することを云ふのて、是が密敎の最極の大事のことてある、同じ密敎中ても此口傳の取扱方に就て種々ある、即ち本經や儀軌の說に重きを置くと、阿闍梨の口傳に重きを置くとの二種て、東密と台密とを比較すると、東密は口傳爲本て、台密は經軌爲本てある、台密は經軌爲本てあるから、經文儀軌の說に準據して護摩壇等も造るから一般の人にも解り易い、然るに東密は口傳爲本だから餘り經文や儀軌に頓着しない、所て東密中ても小野流と廣澤流と比較すると、小野流は口傳爲本て廣澤流は經軌爲本てある、然らば口傳爲本とすれば經軌と衝突した時にはどうするかと云ふに、本經(大日經金剛頂經)と儀軌(大日經青龍寺儀軌、金剛頂經蓮華部心儀軌)と口傳との三か、若し本經と儀軌と衝突した時には本經を捨て儀軌を採り、若し儀軌と口傳と異つた時には儀軌を捨て口傳を採るのてある、高野山の宥快師が山科安祥寺の興雅阿闍梨に對して、阿闍梨の口傳は

斯く〳〵經軌に異ると詰ると、興雅阿闍梨は我の口傳する所は大日如來より顔〳〵相對して嫡〳〵相承する秘說である、千經萬論何かあらんと威張られたとの話しだが、口傳爲本家は常に此見地に立のてある

口傳
- 東密（口傳爲本）
  - 台密（經軌爲本）
  - 廣澤流（經軌爲本）
- 小野流（口傳爲本）

九　口傳と教權

密教は口傳爲本て口傳を以て教權とするのてある、然らば其口傳なるものは全體何千言何萬言ある乎、教祖の說かれた根本教典すら否定し去る程のものてある以上は隨分多いものてあらうとの質問も出ようが、そんなに千言も萬言もあるものてはない、元來密教は死んだ經文に教權を求めず活きた人間に教權を付するのが根本義てある、換言すれば人本位て法本位てない、醫王の眼には途に觸れて皆藥なり解實の人は礦石を寶と看る」と弘法大師樣は道破せられたが、經典の解釋と云ふものは思想の發達した人が注釋すれば深遠となり、思想の幼稚のものが解釋すれば淺薄となるものてある、併し大體から云ふと以前の注釋よりは後の解釋の方が段々に發達して來る、去り乍ら成文のものは如何に解釋を發達せしめても、曲解若くは逆に解釋する譯には行かない、然るに口傳と云ふものは成形のものてないから、五百年とか千年とか云ふ長い月日の間には、人の思想が非常に發達して來るから、顔〳〵相對し面〳〵相承して居る間に、外延は變りがないが內容は自然に深遠となるのてある、斯く云ふと教權の價値が頗る疑はるゝやうてあるが、深行の阿闍梨が上根上智の受者を見定て口傳相承するのてあるから、決して間違はない此處は禪家の不立文字て以心傳心と能く似て居る、只禪家ては受者の開發を主とするが密教は阿闍梨に口傳を注入するの別があるのみだ

一〇　文書記載法

口傳て何事ても秘密に相承すると共に、假令文書に書いても暗號同樣に更に他人には解らぬやうに書くことが此宗の掟てある、予は秘密辭林の自序に「茲に女去の

字ありとせん是を阿闍梨に問へば如法の略字なりと云ふ、如法を問へば如寶の假字なりと云ふ、如寶を問へば如意寶珠なりと答ふと書いて置いた如く、女去の二字は如意寶珠の略符なることは普通の人に解るものでない、密教文書の記載法は萬事此流義で、文書を見た丈では何のことやら一寸も解らぬ、此の他人の解らぬやうに書く法に大約七種位ある、第一は亂脫である、亂とは句を前後轉亂することで前に置くべき句を後に出したり、後の句を前に引上げて置くのである、脫とは有るべき筈の句や文字を態々削除して解らなくするのである、第二には隱語として二と書くべき字を三と書いたり、前と云ふ所を後としたりして置くのである、又は定慧の二字を男女と改め理智の二字を陰陽とするの類である、第三は合字法で二字三字を一字とすることである、灌頂の二字を扁のみ採り合せて汀となし、上の扁と下の形と合せて須となしたりして居る、顯教にても言緣覺井菩薩等の例はないではないが、彼は單に省略法で書くのであるから一定して居るが、密教は解らぬ爲めに書くのだから更に一定して居らない、第四は離字法で、前と全く反對である、例せば箱の字を竹木目としたり尊を八酉寸とするが如きものである、併し是は餘り多くは用ゐない、第五は省略法で是は非常に行はれて居る、例せば如法尊勝を女去寸月としたり、報恩院を幸心完としたり、範俊を竹人などとして居る、第六は借字法で如寶と書くべきを如法となすが如きものだ、此等の數種が集めて妓愛水など書く妓は如法の合字、水は染の略字で即ち如法愛染のことである、第七は梵書で、愛染法を𑖮法などと書くは原名であるから差支なく解るが、𑖮𑖮法とは聖天二體を實類として修する法、𑖮𑖮法とは聖天の男體は實類、女體は權類として修する法と云ふのだから頗る解らぬこととなる、所で此七法が一定せる規則があるのではなく、阿闍梨が發明して洒落書をするのだから、讀む人は閉口せざるを得ない、こんな符合が能く解るまでには三年や五年の歲月を費しても駄目だ

一一　解釋の四階段

前の文書記載法は有形の文字が解らぬのであるが、此外に何事に就ても密教は必ず四重祕釋と云ふを用ふる、是が又頗る厄介のものだ、第一は淺略釋で、第二は深祕釋第三は祕中の深祕釋、第四は祕々中の深祕釋である、淺略釋とは普通の解釋で、花

字ありとせん是を阿闍梨に問へば如法の略字なりと云ふ、如法を問へば如寶の假字なりと云ふ、如寶を問へば如意寶珠なりと答ふ」と書いて置いた如く、女去の二字は如意寶珠の略符なることは普通の人に解るものでない、密教文書の記載法は萬事此流義で、文書を見た丈では何のことやら一寸も解らぬ、此の他人の解らぬやうに書く法に大約七種位ある、第一は亂脫である、亂とは句を前後轉亂することで前に置くべき句を後に出したり、後の句を前に引上げて置くのである、脫とは有るべき筈の句や文字を態々削除して解らなくするのである、第二には隱語として二と書くべき字を三と書いたり、前と云ふ所を後としたりして置くのである、又は定慧の二字を男女と改め理智の二字を陰陽とするの類である、第三は合字法で二字三字を一字とすることである、灌頂の二字を扁のみ採り合せて汀となし、上の扁と下の形と合せて須となしたりして居る、顯教にても言緣覺井菩薩等の例はないではないが、彼は單に省略法で書くのであるから一定して居るが、密教は解らぬ爲めに書くのだから更に一定して居らない、第四は離字法で、前と全く反對である、例せば箱の字を竹木目としたり尊を八酉寸とするが如きものである、併し是は餘り多くは用ゐない、第五は省略法で是は非常に行はれて居る、例せば如法尊勝を女去寸月としたり、報恩院を幸心完としたり、範俊を竹人などとして居る、第六は借字法で如寶と書くべきを如法となすが如きものだ、此等の數種が集めて妓愛水など書く妓は如法の合字、水は染の略字で即ち如法愛染のことである、第七は梵書で、愛染法を𑖮法などと書くは原名であるから差支なく解るが𑖮𑖮法とは聖天二體を實類として修する法𑖮𑖮法とは聖天の男體は實類、女體は權類として修する法と云ふのだから頗る解らぬこととなる、所で此七法が一定せる規則があるのではなく、阿闍梨が發明して酒落書をするのだから、讀む人は閉口せざるを得ない、こんな符合が能く解るまでには三年や五年の歲月を費しても駄目だ

一一　解釋の四階段

前の文書記載法は有形の文字が解らぬのであるが、此外に何事に就ても密教は必ず四重祕釋と云ふを用ふる、是が又頗る厄介のものだ、第一は淺略釋で、第二は深祕釋、第三は祕中の深祕釋、第四は祕々中の深祕釋である、淺略釋とは普通の解釋で、花

を佛に供養するは佛を歡喜せしむる意であるとするが如きものである、第二の深祕釋になると、花を歡喜の標示とするので、其物が表する意味を主として解釋するのである、然るに是が第三の祕中の深祕釋に進むと、一輪の花も宇宙の實在性の發現に外ならぬとするのである、茲まで來れば花に就ての觀察は其極迄に達したと云はねばならぬ、併し花と宇宙の實在性との關係に就てはまだ未決である、依て第四の祕々中の深祕釋が必用なので、此第四重に來て花が宇宙の實在であるから一輪の花を佛に供ずるは即ち全宇宙の花全體を供ずるに均しく、尙ほ一歩進むれば一輪の花は全宇宙の物體の總てを供ずると同じいことと解釋するのである、經軌論釋は此の四重の祕釋を巧に應用してあるから、此四重の關係を能く見破らないととんだ間違を生ずるのである

一二　密教の起原

序論は此邊て止めて少し歴史に就て話さう、密教は大日如來が秘密法界心殿に於て說法あそばされたのが起原であると、付法傳に說いてある、然らば密教は宇宙の存在と共に存在して居る譯だ、此宇宙と共に存在した教が成立宗教として人間に流布せられたのは大聖釋尊滅後八百年頃に出世せられた龍猛菩薩からである、龍猛菩薩は南天鐵塔から此教を相承せられたのである、南天鐵塔中には大日如來が說法せられたのを、金剛薩埵か結集して之を相承せられてあつたか、龍猛菩薩は此鐵塔の鐵扉を白芥子で打毀つて、其塔内に這入つて金剛薩埵から此密教を相傳せられたのである、南天鐵塔と云ふは事實に存在したやうに說いてあるが、是は龍猛菩薩の理想上に構成したものである、つまり鐵塔開扉は龍猛菩薩の覺悟の境界を形容したものに過ぎないのである、故に古來の實義は南天鐵塔とは龍猛菩薩の本有心源の一大塔であると云ふことになつて居る、併し鐵塔か理想塔であるか事實塔であるかの爭は古來一箇の論題である丈は斷つて置く

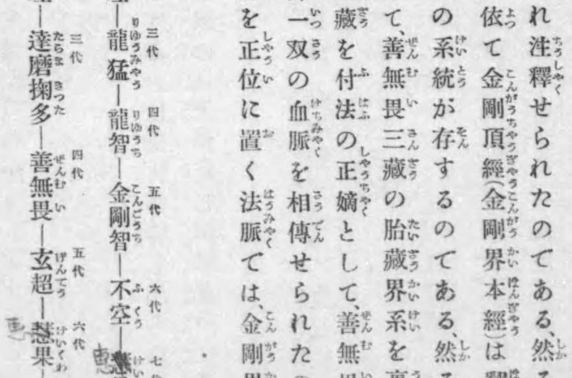
一三　八祖相承

龍猛菩薩が密教を南天鐵塔より相承せられて大に五天に說法せられ後に、此密教の印璽を龍智菩薩(第四祖)に附屬せられた、此龍智菩薩の弟子に金剛智三藏(第五祖)

と善無畏三藏との二人があつた、善無畏三藏は陸路から支那に開元四年に着し、金剛智三藏は海路から開元八年に支那に來た、善無畏三藏の弟子には一行禪師があり、金剛智三藏の弟子には不空三藏(第六祖)があり、不空三藏の弟子に慧果阿闍梨(第七祖)があり、我國の弘法大師(第八祖)は延暦二十三年に渡唐して、翌年金剛界胎藏界の大法を慧果阿闍梨から受けられた、故に付法相承の方からは大日如來、金剛薩埵、龍猛菩薩、龍智菩薩、金剛智三藏、不空三藏、慧果阿闍梨、弘法大師を付法八祖と稱するのであるが、善無畏三藏、一行禪師も密敎を傳持せられたのであるから、傳持ノ八祖と云ふ時には、龍猛菩薩、龍智菩薩、金剛智三藏、善無畏三藏、不空三藏、一行禪師、慧果阿闍梨、弘法大師の八人を擧ぐるのである、密敎の寺で八祖樣とて像を懸け置くのは此傳持ノ八祖である

一四　金剛界系と胎藏界系

前の付法ノ八祖と傳持ノ八祖との區別は即ち金剛界の系統と胎藏界の系統との區別となるのである、此系統が日本に來ては東密と台密との異りとなつた、元來善無畏三藏は三論宗系の人で其弟子の一行禪師は天台宗系の人である、此二人に依て大日經(胎藏界本經)等は翻譯せられ注釋せられたのである、然るに金剛智三藏、不空三藏は唯識宗系の人で、此二人に依て金剛頂經(金剛界本經)は翻譯せられ解釋せられたのである、故に其間自ら二種の系統が存するのである、然るに弘法大師は此金剛智三藏等の金剛界系を表として、善無畏三藏の胎藏界系を裏として一宗を建立せられたから、金剛智三藏、不空三藏を付法の正嫡として、善無畏三藏や一行禪師を閏位にせられ、金剛界胎藏界兩部一双の血脈を相傳せられたのである、併し台密幷に東密の一部分でも善無畏三藏を正位に置く法脈では、金剛界胎藏界別傳の血脈を立つるので之を圖で示せば



となるので即ち弘法大師は金剛界は八代目、胎藏界は七代目に當るのである、此世

代か一代違ふ血脈を不等葉の血脈と稱し、弘法大師の御說の兩部一双て金胎が同世代の血脈を等葉の血脈と稱して居る

一五　等葉不等葉

等葉とは世代が等いと云ふこと、不等葉とは世代が等しからぬと云ふことてある、即ち金剛界血脈の世代と胎藏界血脈の世代が同じが等葉、一代差のあるのが不等葉てある、此一代差のあるのは

血脈
- 金剛界―大日如來……龍智菩薩―金剛智三藏―不空三藏
- 胎藏界―大日如來……龍智菩薩―不空三藏

として金剛智三藏を胎藏界の血脈から除くのてある、其理由は不空三藏は再び印度に還つて、龍智菩薩から胎藏界を直傳したからだと云ふて居る、併し此解釋は後世のことてあつて、實は金剛界と胎藏界の血脈の一代差のあるのは金胎兩部別傳の血脈(前項參照)に依るからてある、台密は此金胎兩部別傳の血脈に依つて相承して居るが、東密にても古くは仲々行はれたものてある、今日の如く根本批評の流行の時には此等葉不等葉論は實に密教發達上に重大問題てある、併し此等は專門に流るるから止めよう、此事を研究したいものは先づ杲寶の玉印鈔を見るがよい

一六　印度の密教

龍猛菩薩に依て唱ひ出されたる印度の密教は、其後は東西に流傳し南北に說述せられたるのてある、龍猛菩薩の弟子としては龍智菩薩一人が知れて居る丈てあるが、密教の本經儀軌として支那に飜譯せられたるものは、金胎兩部の大經を始め仲々少くない、孔雀經のやうな鬼神、夜叉、山川の名を列ねたものもあれば、一方には佛の功德を繰り返し卷き返し說いた、三十卷の教王經のやうなものもある、又明王や菩薩の儀軌て、甲乙が思想が隔つて居るものもある、此等から考ふると隨分廣い地方に行はれ、永い年月の間盛てあつたと云ふことが解る、又支那に來た菩提流支だとか般若三藏だのと云ふ人が、皆咒法を修したのを見ても印度には仲々密教が盛に行はれて居つたことを想像されるのてある、隨て傳道者も頗る多かつたらしと

思ふ、換言すれば百の龍智菩薩千の達磨掬多があつたらうと思ふ、併し惜いことには此等の傳道者の名は知れない、只支那の歴史を透して印度を想像する迄である

一七　支那の密教

支那の密教は、晋の吉友の孔雀經を譯した比から漸々に入り來つたのであるが、純密教の傳道者として支那に渡來したのは、善無畏三藏の開元四年の渡來が一番最初である、僅か四年を隔てゝ金剛智三藏は不空三藏を引連れて支那に到着した、時に玄宗皇帝の歸依僧たる一行禪師が、善無畏三藏の門に入つたので、大に密教の聲價を高めることとなつた、時勢の要求の結果であらうが、旭日登天の勢と云ふ語は當時の密教を形容するには最も適當な語である、一行禪師は不幸にして四十五歳の短命で開元十五年に寂せられたが、六年を隔てゝ金剛智三藏が寂し、又三年を隔てゝ善無畏三藏が寂された、此善無畏三藏の寂した開元二十三年には不空三藏はまだ三十才の少壯者であつたが、能く其後を繼ぎ代宗皇帝の無二の歸依を受け、印度に求法し前後六年留學し、歸り來つて大法輪を轉じ、善無畏三藏の胎藏界系と金剛智三藏の金剛界系とを打つて一團となし、諸經軌を翻譯し密教を興隆して支那佛教に一大變化を與へたのである、一方から見れば是が支那佛教の最後の發展で、所謂支那の十三宗も其後は何等の發展を見ないのである、不空三藏の門下には所謂慧朗慧果等の八傑があつたが、只遺法を朗にすると云ふに過ぎなかつた、慧果阿闍梨の後では青龍寺の法全か秀でゝ居る、日本の入唐者は多く法全に授法したのである、然るに有名な武宗の會昌の廢佛に會して、密教の如く帝室中心で發展した宗旨は根本的の打撃を受け殆んど絶滅したのである、善無畏三藏が開元四年に支那に來てから、此會昌五年迄百二十年で密教は葬り去られたのである、其後、宋時代となつても施護、法賢等の譯經家はないでもないが、夫は學究として翻譯した丈で密教が宗派として多く行はれた譯ではない

一八　弘法大師傳

我國で日本的宗旨の開けたのは、我眞言宗が始めてある、之を云ひ換えれば眞言宗は弘法大師に依て組織を立てられたのである、弘法大師は寶龜五年に生れられた、

今の讃岐國屏風ヶ浦善通寺は其誕生所である、十八才で京都に登りて大學に入り、二十四才で三教指歸を著し、堂々として出家の理由を告白せられて勤操大德の弟子となられた、三十一才で入唐して、在唐三年で大同元年に歸朝せられ、久しく雌伏せられたが、弘仁三年に三十九才で高雄山に結緣灌頂を開かれた時には、天台宗の開祖傳敎大師も來つて受者となられるまでに一世に尊崇せられたのである、弘仁七年には高野山を開創し、同十四年に東寺を勅賜せられ、承和二年正月、後七日御修法を宮中に修して、其年の三月二十一日に高野山に入定せられた、御年六十二である、著作の重なるものは、判敎では辯顯密二敎論、祕藏寶鑰、十住心論、論文では即身成佛義、聲字實相義、吽字義、般若心經祕鍵、大日經開題、三敎指歸等があり、歷史には付法傳、略付法傳があり、文章論には文鏡祕府論、文筆肝心鈔、高野雜筆集、詩文集には性靈集等が合計二百餘卷ある、今は是を弘法大師全集として刊行せられて居る、又委い傳記を知らんとするものは弘法大師正傳、弘法大師年譜、空海等を見るがよい

一九　世界的偉人

世界的偉人と云ふ語は頗る漠然たる概があるが、世界の三聖と仰がるゝ大聖釋尊、基督、孔子を除いて其次の偉人と云ふことになると、アリストートルも偉い、カントも偉い、ルーテルも偉い、龍猛菩薩も偉ひ、商佉羅も偉い、老子も偉いと云ふことになる、扨て此等の人が世界的偉人であるならば、弘法大師も無論世界的偉人である、アリストートルとか、ルーテルとか、龍猛菩薩とか云ふ人は早く全世界に紹介せられ多くの人が持囃すから、何だか偉いやうに思ふのであるが、弘法大師は不幸にして極東の島國に生れたので、未だ全世界に紹介せらるゝ機會が少い、だから夫ほどに思はない人もある、併し弘法大師は當時の支那日本に於る凡ての思想の潮流を統一融合して自ら一新機軸を出して居らるゝ、二千五百年前大聖釋尊は印度に出現ましまして、一切衆生救濟の法輪を轉ぜられたが、其後に印度に出てゝ大乘を興隆せられたのが、西洋では大乘の釋迦と仰ぐ所の龍猛菩薩で、釋尊を除けば印度では一番偉大なる人である、支那に佛敎が來て羅什三藏、玄弉三藏と云ふやうな偉い人も居るが、其中で佛敎を統一せられ而も發達せしめたと云ふのは智者大師の功で、支那佛敎家中の最も偉い人である、日本に佛敎が來て

各宗の祖師は競ひ起つて居るが、弘法大師が一番偉いのである、大師號を弘法大師に取られたのは事實を談つて居る、否二千五百餘年の昔、大聖釋尊が印度に出現せられて、四十九年の間哲理的基礎に立つて衆生救濟の大法を說かれたのが、三國傳來して一千五百年後に日本の弘法大師に依て發達の極點に達して居る、弘法大師の滅後茲に千年、未だ大師以上の發展を佛教の上に加へたものは無論ない、弘法大師世界の大師樣にすると否とは吾々末徒の世界に紹介すると否とにある

二〇　判教

弘法大師は書道の上から云へば日本書道の開祖である、文字の上から云へば日本文字たる「いろは」の製作者である、日本思想史の上から云へば本地垂迹說の大成者で、日本古代思想と外來の佛教思想とを調和せられたのである、其他文章の上に於ても、繪畫や彫刻の上に於ても、殖產上に於ても慥に其時代に傑出せられて居る、而して其中で最も偉大なることは、眞言宗の爲めに十住心の淺深次第判教を立てられたることである、判教とは自分の宗旨の位置を定むる爲めに各宗派との比較批評をなして其優劣を判ずることである、元來眞言宗には印度から顯教密教と云ふ二種に分つ判教があつた、密教とは自宗で顯教とは自宗以外の凡ての宗派を指すのである、此判教を委しく說かれたのが弘法大師の辯顯密二教論である、弘法大師は此丈では頗る雜博であると考られたので、自ら十住心の判教を立てられた、十住心の判教とは弘法大師が十住心論及び秘藏寶鑰に於て述べられたものである、古來幾多の宗祖・派祖があつても、皆佛教のみを批評して儒教や道教に及なかつたのに、弘法大師の十住心の判教は此等にも皆批判を下し、一面には密教より極めて劣等の教理となすと共に、一面には此等劣等の教理も皆是れ密教の眼を以て見れば密教に入る順序上存在せざるべからざるもので、恰も專門大學に入らしめんとすれば中學校も小學校も幼稚園も必用なるが如きものであると說明せられた、是が他宗の判教とは全く其趣を異にする所である

二一　十住心

十住心とは十種の住心で、換言すれば十種の思想である、是て平安朝當時に存在し

た凡ての思想は網羅せられて居る、或人の說には弘法大師の入唐留學當時、支那には耶蘇敎も回々敎あつたのだから、大師は之を研究し來り乍ら十住心の判敎に一言も此事に及ばないのは不思議であると云ふが、是は大師が我國を中心として此判敎を立てられたのであるから、今日の馱博士のやうに徒に雜然異說を列ねて博覽を衒ふやうな愚なことはなされないのである、十住心の關係を圖て示せば

第一の異生羝羊心、佛敎で云ふ地獄餓鬼畜生の三惡道の衆生に當るのである、異生とは人間と異つて生れたもの即ち畜生である、羝羊は羊のとて、其愚さ加減を羊に喩えたのである、倫常も知らぬ野蠻の宗敎、即ち動植物を崇拜して人間を犧牲に供する宗敎は此住心に攝せらるゝのである、第二愚童持齋心愚なる兒童が己の食物を他人に施すと云ふ意で、此住心は人倫の道を說く敎で、儒敎とか倫理說とか云ふのが之に當るのである、第三嬰童無畏心、嬰童とは大人、即ち大覺尊に對したるもので、無畏とは十善業を修して安心を得たるが故に名けたものである、即ち道敎の仙術を得たもの、若くは印度の梵天外道の如きものである、理論の低い神の攝理を說く耶蘇敎は此に攝せらるゝのである、第四唯蘊無我心、唯五蘊の物質の恒存を信じて主となる人我はないと說く聲聞乘の我空法有論の住心である、第五拔業因種心、十二因緣を觀じて無明の業の因種を拔く所の緣覺乘の住心である、第四第五の二の住心は小乘で、聲聞は他發的に覺る、緣覺は自發的に覺るの別がある、第六他緣大乘心「緣=法界」故他緣」とあつて、此住心から大乘だから一切衆生に同體大悲を發すのである、今日の語で云へば世界的の大慈善心を發すのである、法相宗の唯識所變の

唯心論が之に當るのてある、第七覺心不生心、唯心の理を捨てゝ無相(不生)の理を覺る住心て三論宗の萬像眞空論を指すのてある、第八一道無畏心、一實中道の無畏眞如の實相を觀ずる住心て、天台宗の非有非空中道實相の絶對無相一元論が之に當るのてある、第九極無自性心、眞如法界は自性を守らず無盡〳〵にして法界を緣起するの稱て、華嚴宗て說く事理無礙の圓融の絶對一元論て、是が密敎の初門となるのてある、第十秘密莊嚴心、五相成身、三密加持の修行に依りて自己所具の萬德を開發して無盡の莊嚴をなす即ち眞言宗てある

二二　入唐八家

弘法大師時代に支那から密敎を傳えられた人が台密に三人、東密に五人合せて八人ある、之を常に入唐八家と云ふて居る、之を表にして示さば

人名	入唐ノ時	歸朝	在唐年數
台密比叡山の傳敎大師	延曆二十三年	翌二十四年	約壹年
東密東寺の弘法大師	同	大同元年	約貳年
東密小栗栖の常曉	承和五年	承和六年	約壹年
東密靈巖寺の圓行	仝	仝	仝
台密比叡山の慈覺大師	仝	承和十四年	約九年
東密安祥寺の慧運	承和九年	仝	約五年
台密三井寺の智證大師	仁壽三年	天安二年	約五年
東密禪林寺の宗叡	貞觀四年	貞觀七年	約三年

となるのてある、故に前後から云へば、比叡山の傳敎大師が第一に我國に密敎を相傳せられたのてあるが、勿論天台宗が表て密敎は附屬てある、而して台密の方ては慈覺大師、智證大師は其敎風に變化を與へて居るが、東密の方ては小栗栖の常曉は三論宗の人て大元帥法を相傳して來て、弘法大師の創始した宮中後七日御修法に對抗しやうと企てた人だが、此人も古來東密の人と數ふることになつて居る、又最後に入唐した宗叡即ち後入唐僧正は始は比叡山の義眞幷に智證大師に學んだのてあるが、後に東寺の實惠の門に入り入唐歸朝後大にハイカラ風を吹かせたのて、遂に東密は小野流、廣澤流の分派の基をなしたのてある

二三　東密と台密

入唐八家の中て、傳敎大師慈覺大師、智證大師は天台宗の人て密敎を傳えられたのてあるから、之を台密の三家と云ひ、弘法大師、常曉、圓行、慧運、宗叡の五人は眞言宗の人て東寺を中心として密敎を宣揚せられたから之を東密と稱するのてある、東密は云ふまてもなく、弘法大師の唱道せられたる主義に依つて、金剛界、胎藏界兩部一双の血脈に依るのてあるが、台密は金剛界、胎藏界、兩部別傳の血脈に依るのてある、故に東密は金剛界と胎藏界は二にして一、一にして二と、所謂而二不二と立つるのてあるが、台密は法華經を根本として空假中の三諦を根本義とするのてあるから、金剛界と胎藏界を二となし、其外に蘇悉地の不二を立つるので、所謂三部門の建立てある、元來金剛界は華嚴宗敎系で、胎藏界は法華即ち天台宗敎系に屬するのてあるから、自然の勢、台密では胎藏界を重ずる風がある、慈覺大師は在唐前後十年て入唐八家中ては最長期の留學てあるから、支那密敎の研究も深く自ら支那密敎の俤もある、傳敎大師は禪密を兼ね傳へられた丈てあつたが、慈覺大師に至つては理同事別と判じて、眞言天台は理論は同じきも事作法は異ると、即ち天台宗よりは密敎は成佛の作法丈を餘分に說て居るとせられただから、台密ては血脈は慈覺大師を日本の初祖として居るのてある、然るに智證大師になると理同事勝と判じて、天台眞言は理論は同じきも、事作法は眞言密敎が勝れたりとせられた、故に智證大師以後の天台宗は全く密敎化して、修觀念誦を專らとし、東密と共に宮中に修法壇を運ねて大は天災地變より小は安產癒病の息災增益の祈禱をなすを唯一の業とするやうになつたので、平安朝は全く祈禱萬能の世と化した

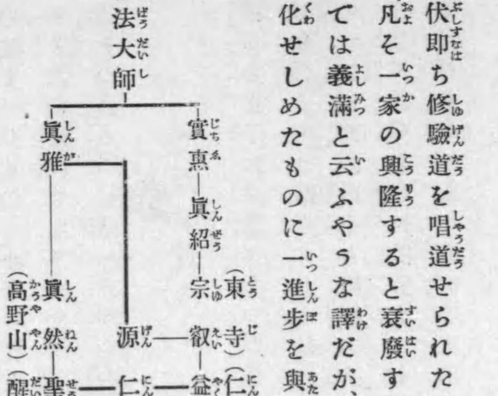
二四　大師の門下

勇將の下に弱卒なして、弘法大師の門下には高僧碩德が集つたのてあるか、大師は入滅に臨んて、實惠即ち道興大師をして根本道場の東寺を管せしめ、眞濟をして高雄山に居らしめ宮中眞言院のことを司らせ眞雅即ち法光大師をして南都南圓堂を管し、藤原氏の方面を受持せ眞然をして其廟所たる高野山を守らせたるのてある、眞濟は宮中に出入して居つたから、最も早く勢名を逞ふしたが、藤原氏の勢て八

才の幼主たる清和天皇が立つに及んで、眞雅は清和天皇の護持僧であつたから勢力が頓んと擧つて來た、而して實惠の附法嫡弟には眞紹あり眞紹の嫡弟に宗叡があつた、宗叡は東密入唐諸家の中では最も秀でたる人で大にハイカラ風を吹かしたので、御廟所を守る墓守役の眞然とは新舊思想の衝突となり、東寺中心說と高野中心說で隨分仲惡るであつた、是が聖寶即ち理源大師（小野流太祖）と益信即ち本覺大師（廣澤流太祖）との別流をなした譯である

二五　宮中佛法と平民佛法

弘法大師は宮中佛法と平民佛法とを兼ねて宣揚せられたのであるが、此弟子等は多く宮中佛法に力を致したのである、漸く密敎が盛なるに隨て宮中佛法と平民佛法とが別るゝの傾向を生じた、其傾向の代表者は本覺大師（廣澤流太祖）と理源大師（小野流太祖）とである、本覺大師は宇多法皇の傳法灌頂の大阿闍梨で、宮中佛法の代表者である、是と同時に理源大師は醍醐天皇に重ぜられたが其主とする所は平民佛法で、醍醐山を開き伽藍を起し大峰山葛城山に跋渉し、俗形の儘にて密法を修する山伏即ち修驗道を唱道せられたるのである、是が密敎の日本化した一大進步である、凡そ一家の興隆すると衰廢するとは三代目が一番肝要で、德川氏では家光、足利氏では義滿と云ふやうな譯だが、理源大師の修驗道の唱道は弘法大師の佛敎を日本化せしめたものに一進步を與へたものである



血脈の系譜から云へば理源大師も本覺大師も共に南地院の源仁僧都の下から分れたのであるが、前の新思想の宗叡と舊思想の眞然との衝突の結果と、宮中佛法と平民佛法の根抵の差が仁和寺中心と醍醐山中心とに分れ、仁和寺方は本覺大師の次に宇多法皇が仁和寺に居住せられて大阿闍梨となられたから、全く宮中佛法と

化し、其弟子寛空を經て廣澤遍照寺の寛朝に至つて大に振興した、寛朝は比叡山中興者たる良源即ち慈恵大師と宮中で肩を双べて修法した人で其門下が非常に多かつた、寛朝の滅後久しからずして小野の曼荼羅寺（今の隨心院）に仁海僧正が出て雨乞に妙を得て世に雨僧正と字せられた程に修法の霊驗が高かつた、茲に廣澤の寛朝の流を汲むものと、小野の仁海の流に依るものゝ差異を生じた、是が小野流、廣澤流の分派の原因である一たび看板が別になると同じ品物でも態々異つたやうに勿體をつけるので是から漸く密教事相の分派が生ずることになつた

二六　野澤十二流

仁海僧正の弟子に成尊があつたが、成尊の下に勸修寺範俊、醍醐山義範あり後三條天皇は範俊をして成尊の後を繼がしめられた、然るに此二人は互に仲が善くなかつたので、茲に醍醐山系と勸修寺系とか異ることとなり、醍醐山系は勝覺を經て其弟子三寶院勝覺と理性院賢覺と金剛王院聖賢との三人が各々一方に法幢を立て、勸修寺流は嚴覺を經て勸修寺寛信と安祥寺宗意と隨心院增俊との三派に分れた、

●廣澤流寛朝―濟信―性信―寛助―
- 信證（西院流）
- 聖慧（華藏院流）
- 永嚴（保壽院流）
- 寛遍（忍辱山流）
- 覺鏡（大傳法院流）
- 覺法（仁和寺流）
- 定海（三寶院流）

●小野流仁海―成尊―
- 義範―勝覺―
  - 聖賢（金剛王院流）
  - 賢覺（理性院流）
- 範俊―嚴覺―
  - 寛信（勸修寺流）
  - 增俊（隨心院流）
  - 宗意（安祥寺流）
- 明算（高野山中院流十二流外）

丁度其比に廣澤成就院に「法ノ關白」と字せられた位の大勢力があつた寛助大僧正が出て其門下には新義派の太祖興教大師始め英才雲の如くに集り、仁和寺覺法法親王と保壽院永嚴と忍辱山寛遍と華藏院聖慧法親王と西ノ院信證とが各一派と稱せられ、之を小野廣澤の根本十二流と稱するのである、此外に高野山に明算の中院流がある、何故に此の如く分派の生じたかと云ふに、平安朝の初期に傳敎大師、弘法大師の宗敎改革ありて以來茲に三百年て、良忍上人が融通念佛宗を開いた比てあるから宗敎革新の機運に動されたのである、此十二流の中て今日まて盛に繼承せられて居るのは三寶院流の末流の報恩院流て、其外の仁和寺流は御室派に、保壽院流は大覺寺派に、大傳法院流は豐山派に、三寶院流は醍醐派に、勸修寺流は山階派に、隨心院流は小野派に、中院流は高野派に相承せられて居るが、此等の各流は一般には餘り行はれない

二七　興敎大師

弘法大師が開宗せられて以來三百年漸く一宗の紀綱が弛んだ時に興敎大師は出てられた、大師は肥前の國鹿島の生れて、今の佐賀縣肥前の國藤津郡南鹿島村大字納富分小字誕生院は其遺跡である、著者は去年十月十二日に新義眞言宗豐山派宗務長として此遺跡興隆の件に關して參詣したが、東は有明海に望み南西北に山を帶ひて如何にも靈地である、大師は今を去る八百十九年前即ち嘉保二年乙亥の年六月十七日に此地に生れられたのである、幼名は彌千代丸と云ひ神童にておはせしが、或時稅吏が來て父上を呵責するを見て大に驚き阿兄に問ひて、世界中此上なき最尊最貴の位に登らんとの志を發して、京都仁和寺に入り、十六歲にして寛助大僧正を禮して得度の式を上げられた、後奈良の東大寺興福寺に遊び二十歲にして高野山に登り青蓮法師に會せられた、當時の高野山は頗る癈頽したものであつたので、大師の師範たる寛助僧正は法の關白と字せられた位の大勢力家で廣澤十二流の祖であるから、大師が宮中佛法に趣味を持つて居られたならば直に紫色の法衣を翻して宮中に出入せらるゝであらうが、左はなくて祖廟靈地の興隆を發願せられたは大に所以ありてある、二十七て仁和寺で寛助僧正から傳法灌頂を受けられたが、三十二歲の時には既に己の門下のみて根來山神宮寺落慶の式を擧られたの

てある、弘法大師が入唐して慧果阿闍梨に灌頂を受けられたのも矢張御年三十二てある、大治五年に高野山で華藏院の聖恵法親王に面會せられ其啓達に依て鳥羽上皇の信仰を得長承元年に及んて高野山に大傳法院を建立せられ大傳法會を修せられて大に新宗風を宣揚せられた、是が新義眞言の紀元とも稱すべきである、翌年東密台密の諸阿闍梨に受法して大傳法院流を大成せられ、仝三年四十歳で高野山の座主職に補せられた、所が一山の老僧連の嫉妬で遂に其職を去り修禪觀法のみに耽られたのである、併し高野山の老僧は嫉視は依然として改まらず、保延六年には一山大騒擾を極めて、大師の定軀を屠らんとしたのである、此時に大師は不動明王の三昧に入て居られたので、亂入せる俗僧等には不動明王が二像ありて大師の影は見えなかつたとのことだが、如何に其德の偉大なるかは此一事でも察せらるゝのである、依て大師は高野山を去つて根來山に引退し圓明寺の西廂で康治二年十二月十二日に唱寂せられた御年が四十九である、滅後久からずして大師號奏請のことがあつたが、五百四十八年後の元祿三年に興教大師と勅諡せられたのである、弘法大師は實に世界的偉人である此偉人の後に出でゝ其志を繼がれたのであるから、今や眞言宗は一萬一千ケ寺存在して居るが、其六分は興教大師の流を汲む新義眞言であるを見ても其偉德が仰がるゝのである、著者は興教大師と仝じく支干に生れたのであるが、大師が新義派の一新紀元を劃せられた御年にこんなつまらぬ著作をして居るかと思へば、知らず識らず冷汗を催す次第である、其著作の重なるものは五輪九字祕釋灌頂一異義淨菩提心私記等で今は興教大師全集として凡てが刊行せられて居る、傳記は結網集等に出て居る

二八　新義と古義

興教大師が高野山に大傳法院を建立せられて新主義を唱道せられたから、其主義を奉ずるものは大傳法院を中心として其下に集つたが、古法墨守の頑固連とは相合はぬので屢々爭鬪をした、偶々此大傳法院に賴瑜僧正が出た此人は博識一世を蓋ふの概があつて加持身說法の義を建立せられた、加持身說法とは密敎は自性法身の說法であるが、其自性法身を本地身と加持身とに分けて、本地身は絕對身であるから說法はしない、相對加持身の位で始て說法をするのであるとのことだ、是は

法身說法を細論したのである、併しこうなつては大傳法院に屬するものは高野山の頑固連とは敎義迄異にすることになるのだから、賴瑜は興敎大師滅後百四十五年目の正應元年に、大傳法院等の建築物を皆根來山に移し、其學徒も凡て轉住せしめたのである、足利時代には根來山は高野山に對抗する迄の勢力となつたが、豐臣秀吉に天正十三年に燒き亡されたのて學徒は四散した、德川氏は宗敎分割の政策てあつたのて當時の兩能化たる妙音院の專譽は大和國初瀨町豐山長谷寺に法幢を翻し、智積院玄宥は京都大佛の境內に智積院と云ふ一寺を建立した、玆に根來山の新義眞言は智山豐山の兩山に分れた、今ても此兩山が新義眞言宗の兩大本山て、其末寺は兩山殆んど全い勢力てある、此新義派の兩山以外の高野山を始め西京の各本山を皆古義派と稱するのて、古義派の敎相は高野山宥快東寺杲寶等の學說を奉じて居る

二九　分派の根本義

眞言宗は面授口傳て唯授一人の嫡々相承てある、然らば小野流廣澤流と分れ、又小野が六流廣澤が六流と分るゝ筈はないのてある、併し若し分派は不得止ものとせば少くとも其中何れかの一流か正嫡て、他の流派は傍傳閏流てなければならぬとの疑問が出る、玆に於て少しく分派の根本義を說て置く必用がある、密敎では金剛界と胎藏界の兩部を根本とするが、此金剛界を表するに外五股印と鑁の一字明を用ゐ、胎藏界を表するに無所不至印と五字明を用ゆるは普通となつて居る所て廣澤流ては外五股印を根本として、初地即極の意に依て前後五重の建立があつても無淺深を旨として居る、然るに小野流の方ては無所不至印を最極として、地々分證の意に依りて初重、二重、三重と有淺深を表として居るのてある、而して此外に印契に於ても尙異りがないてもないが、眞言に至つては五阿明、一阿明、五字明、鑁字一字明、五智明等の異りがあり、最極の祕事が一印て二明を唱ふるか、二印て二明を唱ふるかの差が生する、之を理論の上から云へば而二的不二を表とするか、不二的而二を表とするか單に不二を表とするか、而二を表とするか、又は絕對の大不二を表とするかの差が生ずるのてある、他語を以て云へば差別的平等か、平等的差別か、差別は平等に內在するか、平等は差別に內在するか、絕

對的平等か、絶對的差別か、此等の理論を初重、二重、三重となし、而二に入りて不二に出て、再び不二に歸するとなすもの、或は五重を立て而二に入りて不二に出て、再び而二より絶對不二に入り、更に絶對の而二に出づるもの、此等の前後甲乙にて各派の根本は分るのである、故に其流の淺深の趣はないでもないが、亦は同いものを說明するに法學博士と文學博士と工學博士とが說明を異にしたと云ふに過ぎず、其物自體には何等の關係はない、即ち傳ふる所の印契や眞言には何の變りもないのである、然るに世の所謂茶の湯事相の阿闍梨は、鈴の振り方だの花の盛り方だの香の供じ方の異りを、分派の根本義のやうに心得て居るのは僻事である、此等は所謂流例で根本問題に觸れて居らぬものが多い

三〇　流例

鈴を三つ宛振るとか二つ宛振るとか、花を五葉供するとか四葉供するとか、灑水の棒を横に振り廻すとか竪に振り廻すとか云ふ例が各流にある、之が流例と云ふものである、修法は心中に觀念することが一番大切だが、扨て人の眼に見ゆること耳に聞ゆることとてなければ、間違つても間違つて居るか何だか他人から解らぬから、理論や觀念の方よりは、此外儀流例の方が大分八ヶ間敷說かれて居る、併し此外儀の法則なるものが、其流派の根本原理と關係を有して居るものであれば、無論大切で決して改廢すべきものでないが、只其流派の先輩が此の如く行ひたりと云ふ先例、若くは彼の流が右手でやるから、此の方では左手でやれと云ふが如きものであつたならば、夫はどうでもよいのである、然るに淺行の阿闍梨は無理に一つ打つは獨一法界を表したもの、二つ供するは金胎兩部の諸尊に供するもの、三種は三部の諸尊に奉る、四つは四曼不離を顯す、五箇は五部を表したものなどゝ、數には必ず標示の敎理が附隨し居るが如く考へて、分派の根本義には着眼しないで、只流例の末のみに拘泥して居る人がある、此の如きは茶湯事相で何の價もない、事相七十二流なぞと云ふことになると、此茶の湯的の分派も少くないのである

三一　事相三十六流

加持祈禱は平安朝三百年の唯一無二の宗敎思想であつたので、大に其方法が發達

したから人と處に種々の異も生じたが、多くは尙古思想に司配されてたので、自ら別派なり異流なりと名乘りを擧ぐるものが少なかつた、然るに鎌倉時代となりて親鸞上人、日蓮上人の新宗敎が起つたので、己も我も遠慮會釋なしに、其見る所に依つて異議を唱ひ出した、固より東密の三十六流が皆其最極祕事が異ると云ふ譯ではない、或は甲に重を置くか乙に重きを置くかと云ふに過ぎないものもあり、又は只流例が違ふと云ふまでのものもある、而して廣澤流には割合に分派が少く、小野流には多いのは是は行はれた範圍が多いから自ら異流の多くなつたと云ふことも一つの理由だが、小野流は口傳爲本で廣澤流は經軌爲本であると云ふことも一理由、又廣澤流は仁和寺門跡と云ふ神聖な中心點があつた爲めに、分派が自ら少なかつたと云ふことも一の理由である

三二　修驗道

密敎が理源大師の修驗道の唱道に依つて大に上下の間に行はるゝこととなつたことは前に話したが、修驗道は其祖師を龍猛菩薩とするのである、而して龍猛菩薩から直ぐに理源大師が其祕事を相傳せられたとするので眞言宗の八祖相承とは大に其趣を異にして居る、而して又、役小角を祖師と崇むるから、理源大師は印度密敎の眞意を酌みて、弘法大師以前の我國の密敎を發展せしめたる傾がある、此修驗道なるものは平安朝に既に民間には偉大の勢力を有して居つたが、鎌倉以後は其勢力愈々增長して、德川時代になつては密敎の世俗的信仰は專ら此方面から鼓吹された、敎理は大體に於て密敎と變らないが、大峰山を根本靈山として山嶽崇拜と云ふことが一大特色である、此修驗道は大日經に密敎の修行者を出家菩薩、在家菩薩の二種に分つて居る所の在家菩薩であるから、將來まだ發展の餘地は多くあると思ふ、天台宗では鳥羽帝の頃增譽が理源大師の跡を慕て其主義を唱道せしを以て、三井寺で修驗道を統轄せしこともあつた、德川時代には天台宗聖護院門跡に屬するものを本山派と稱し眞言宗醍醐山三寶院門跡に屬するものを當山派と稱し、外に彥山派羽黑派があつたが、明治維新に及て一旦廢せられ、再興の後今は三寶院門跡に屬するものは惠印部と稱し寺院八百四ケ寺、僧侶一千五百人あり、聖護院門跡に屬するものは寺院百七十七ケ寺、僧侶は約五百人ある

三三　兩部神道

眞言宗に屬したものに兩部神道と云ふがある、傳ふる所に依れば嵯峨天皇より弘法大師が神道灌頂を相傳して興したものとすれども、此思想は奈良朝の行基菩薩の本地垂迹說に基因したもので、弘法大師に至て其說が一進歩した迄なことである、後の兩部神道なるものは俗信仰を最も司配したもので、上は朝廷の儀式より下は大工鍛冶屋の祕事口傳皆此兩部神道の說に依つたものである而して此流派に三派がある、一は仁和寺門跡に傳ふる御流神道で、弘法大師が嵯峨天皇より直傳なりとして最も神聖と稱して居る、二は神道三輪流で大和國三輪神社の別當慶圓上人が三輪明神より直傳するものと稱するもので人頭龍體の神像を以て天神七代地神五代等として居る、三は雲傳神道と稱するものにて、慈雪尊者が日本國體の本義に基きて唱道せられたるものである此流は大に見るべき所がある而して此等の三派共其儀式は多く密印を結び國歌及び密咒を唱ふるもので、其灌頂儀式は、灌頂壇上に我國の神器等を飾り天神七代地神五代等の像を懸け、大壇を咸應壇、正覺壇を宗源壇、祖師壇を降臨壇と稱し密敎灌頂を我國風に換骨脫體したものである、是も甘く發達せしむれば我國の俗信仰には最も投すべき性質のものである

三四　密敎の自然主義

兩部神道と同いやうな根本思想で、密敎を我國俗信仰に投せしめんとしたものに立川流と云ふがあつた、此流は德川時代となりては全く行はれなくなつたが、一時は變成就の法などと稱して行はれたものである、此流は後三條天皇の比、醍醐山の仁寬が伊豆に配流せられ、武藏立川の陰陽師に聞きて陰陽道と密敎と混じて金剛界とは男、胎藏界とは女、金胎不二とは陰陽合體のことなりと唱ひ出した、丁度其比大坂天王寺に眞慶あり同說を唱道した、後に後醍醐天皇の歸依僧東寺長者文觀僧正に依りて大成せられたのである、此流は差別を忘れたる平等の方面のみより說を立てたるもので、其根柢に於ては掬すべき原理の存在するが、此說が一般愚俗の間に行はるゝ至るや、金胎不二とは陰陽合體なりとの說は、一轉して陰陽合體とは男女交合のことなりと稱し、肉欲快樂を神聖視するに至つた、所謂極端の自然主義

となつて社會を毒すること多いので、之を立川邪流と稱して宥快等の先賢が大に排斥したが德川時代の初期に迄は存在した、今の天理教は此流に汲む所があるやうな歴史的關係を持て居る

三五　古代思想と密教

我國の神代の思想は、どんなものであつたかと云ふことは頗る茫漠の感があるが、神代の昔の儀式たる七五三飾とか、大嘗祭の神籠石とか、神社の鳥居とか云ふものを見ると、印度の形式と頗る能く似て居る、密教の壇を築く時に結界をなすのが神籠石で壇線を張るのか七五三飾で、鳥居は印度式の門に類して居る、此等關係があるのみならず密教は極端の包容主義であつたから、我國に來るや古神道中の山嶽崇拜(現今でも大和三輪明神信濃諏訪明神は山が神體である)の思想を受け入れて、修驗道は大峰山を神聖視して居る、古代の生殖器崇拜の思想を其儘に立川流は保存して居る、此等の研究を進めて一道の歴史的關係を發見するの材料は恐らく密教に從屬した修驗道や兩部神道や立川流に存在するのであらう

三六　所依の經典

學校では教科書が一番大切だが宗教の所依の經典は學校の教科書よりは重い、耶蘇教のバイブル、回々教のコーラン、淨土眞宗では阿彌陀經、天台宗日蓮宗の法華經と云ふが如く、眞言宗は大日經と金剛頂經とを兩部の大經と稱し、之を根本經典と稱して居る、常に五部祕經と云ふときには

大日經七卷　善無畏三藏譯
金剛頂經三卷　不空三藏譯
蘇悉地經三卷　善無畏三藏譯
瑜祇經壹卷　金剛智三藏譯
要略念誦經壹卷　同　人譯

として居る大日經と蘇悉地經要略念誦經は胎藏部で、金剛頂經と瑜祇經は金剛部である、併し台密では蘇悉地經は金胎不二の經として居る、此外に最も重要の所依の典籍は

發菩提心論壹卷	龍猛菩薩造	
釋摩訶衍論拾卷	同　人造	
大日經疏二十卷	一行禪師記	
金剛頂經義訣壹卷	不空三藏記	
十住心論拾卷	弘法大師作	
祕藏寶鑰三卷	同	
辯顯密二教論二卷	同	
即身成佛義一卷	同	
聲字實相義壹卷	同	
吽字義壹卷	同	
般若心經祕鍵壹卷	同	
祕藏記二卷	同	

である、此外に經や儀軌等が多いのであるが、研究せんとするものは縮刷大藏經の閏餘成の三帙と弘法大師全集と興教大師全集を見るがよい

三七　大日經

大日經は兩部の大經の一で胎藏界の根本大經である、具には大毘盧遮那成佛神變加持經と云ふて七卷百八十九紙ある、此經は開元十三年に善無畏三藏一行禪師と福先寺に於て譯せられたる所で、第一住心品は敎相、第二具緣品以下は事相で此住心品が眞言宗の敎相の根本である、圖で示せば

- 大日經七卷
  - 本經（前六卷）
    - 敎相
      - 第一住心品
      - 第二品より第七品迄—第一重
    - 事相
      - 第八品より第十品迄—第二重
      - 第十一品より第十四品迄—第三重
      - 第拾五品より第三十一品迄—雜說
  - 供養法（後壹卷）

となるのである、此經は佛部蓮華部金剛部の三部の建立で、竪差別の說相であるから金剛頂經より、比較的に解し易い、胎藏界は理平等の法門であるから、竪差別に寄

せて說いたのであるとのことだ、善無畏三藏此經を翻譯と仝時に講述したが夫を一行禪師が筆記して大日經疏二十卷となしたのだから經に缺けたる部分などは疏の方で補ふて居る、故に經と疏と兩者は離るべからざる關係を有して居るのである

三八　金剛頂經

大日經と共に兩部の大經の一なる金剛界の根本大經は金剛頂經である、金剛頂經は具には金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經と云ひ三卷六十一紙あり、不空三藏の譯である、同本異譯の同名二卷の經があるから之に對して三卷の金剛頂經と云ふ、金剛頂十八會の中の初會の六曼荼羅中の第一の大曼荼羅分丈を說きたるものであると稱して居る、金剛頂經の內容を圖示すれば

金剛頂經三卷
- 序文
  - 五相成身
  - 三十七尊出生
- 正宗分
  - 百八名讚
  - 大曼荼羅壇
  - 灌頂法則
- 雜說

此經は智差別の金剛部だから胎藏部の理平等に寄せて說いたもので、佛部、蓮華部金剛部、寶部、羯磨部の五部門の橫平等の說相てあるから、一卷の大部分は仝意義を繰返すが如き觀ありて初心に殆んど解し難い、此經の最も古い注解は天台の慈覺大師の撰の七卷の疏で、不空三藏の金剛頂義訣壹卷は此經に就いたものでなく略出經に附隨したものである、此邊から觀察すると支那では此經より略出經の方が重ぜられたやうにも見ゆる

三九　曼荼羅

前に金剛界胎藏界の根本大經のことを話したが、此兩部の大經の根本源意を圖樣で現したものが即ち金剛界曼荼羅胎藏界曼荼羅である、曼荼羅は梵語で舊譯には

壇と翻し、新譯には輪圓具足と譯して居る、壇とは修法壇のことで其相狀に就て譯したのであるが、新譯では其意義に依て輪圓具足と譯した、今の語で云へば、完全無缺とか云ふほどの意味である、なぜ曼荼羅は完全無缺であるかと云ふに、曼荼羅中には宇宙の一切の萬象を網羅して居るからである、此曼荼羅に四種類がある、曰く大曼荼羅佛の全像を畫くもの、曰く三昧耶曼荼羅、佛の持物等で其本誓即ち性格を現したる物體の劍だとか蓮華だとか五股杵だとかで畫いたもの、曰く法曼荼羅、種字で畫いたもの、曰く羯磨曼荼羅、佛の相好の特徴を主として畫いたもの、是は大曼荼羅に似ては居るが其主とする所が異るのである、此四種曼荼羅の理論は後に四曼相大の處で說く事にするから、其所を參照するがよい

四〇　萬像網羅

金胎の曼荼羅は元來萬像網羅主義のものであるが、胎藏界曼荼羅は金剛界曼荼羅に比しては萬像網羅主義の思想が能く顯れて居る、弘法大師は醫王の眼には路に觸れて皆藥なりと仰せられてあるが、醫者の眼から見ればモルヒネは人を殺す藥

てなく將に死せなんとするものを復活せしむる唯一の靈藥である、世界に存在する宗教の信仰なるものは淺深の差こそあれ皆或る絕對の力を信ずる者であるから、是に一道の光明を點ずれば如何に淺い信仰でも其信仰の淺いは淺い丈に効果の存するものである、此見地に立て開立せられたるが即ち密教である、故に其信仰の對象となる曼荼羅は無論絕對包容主義で出來て居るので、大日經の胎藏界曼荼羅は其當時に存在する所の凡ての信仰、換言すれば佛教諸佛菩薩は勿論のこと、波羅門教の濕婆派でも、毘紐拏派、女神派の諸天諸神も、皆網羅して居る、此の如き源意で成立したる曼荼羅であるから、支那に入るや西域支那の諸神をも皆加入した、是が大日經疏阿闍梨所傳の曼荼羅である、此譯だから日本に入るや無論日本の八百萬神を加入せねばならぬのであるが、日本に來つてから解釋を進歩せしめて圖容には八百萬神を記入せないのである

四一　佛菩薩の網羅の方法

曼荼羅には凡ての信仰の對象が皆網羅されてあるとせば、現在圖畫の曼荼羅には

日本八百萬神がないが、是は如何に解釋すべきである乎、否佛教中に存在する愛染明王でも、藥師如來でも、金羯羅童子の如きてすらないではない乎、是は御尤の質問である、元來圖畫で顯すものであるから限りある圖中に限りなき神佛を記入することが出來ない、そこでたとひ圖容にはない佛や神でも、左の理論に依りて存在すると觀ずるのである、其方法を記すれば

一、伴は主に歸して觀ず

二、三輪中何れかの尊に歸して觀ず

三、本誓同じき尊は其尊に歸して觀ず

四、垂迹の神は其本地佛に歸して觀ず

五、此外の場合は佛母院の佛母の胎中に其尊ありと觀ず

以上五種てどんな神や佛でも曼荼會中に現存することとなる、第壹の場合は眷屬は主の分德であるから、不動明王があれば其眷屬たる三十六童子は書いてなくとも自ら存在することとなる、是は君主が國家を代表し、社長が會社を代表するやうなものだ、第二は自性輪正法輪、敎令輪の三輪は人て云へば、怒つた時と笑つた時のやうな異てあるから、敎令輪の愛染明王が曼荼羅中に書がなくとも自性輪の金剛薩埵があれば、つまり愛染明王は、金剛薩埵の內に存在することとなるが如きものである、日本海戰の東郷大將はなくとも海軍司令部長の東郷大將があれば、自ら一方はあることとなると同いことてある、第三は東方阿閦如來と、東方藥師如來とは本誓同じきが故に一に他は歸することが出來る、一人の陸軍大將があれば他の大將はなくとも大將たる點は同いやうなものてある、第四垂迹の天照太神は本地は大日如來なれば其尊に歸して觀ずるのてある、是は松田正久が居れば自ら衆議院議員たる資格も、前法相の親任待遇も備つて居るやうなものてある、第五は天理敎の天理王尊でも、耶蘇敎のゴットでも、皆金剛部の佛母の體中にある尊として之を觀ずるのてある、是は諸冊二尊があれば大和民族は皆其中にありと云ふと同い論法だ、此の如くにして一切諸佛諸天諸神の本體は皆一曼荼羅中にあると解釋するのてある、こんな解釋は排斥主義の耶蘇敎や回々敎から見たら驚くだらうが清濁呑み合せるの大雅量ある人が大人物なるが如く、諸宗敎を併呑して一曼荼羅に融合した密敎が最上無上たるの所以は玆にあるのてあるまいか

四二　胎藏界の名稱

胎藏界とは金剛界に對して云ふ語で、梵語の方からは羯婆俱舎達磨である、羯婆は胎、俱舎は藏、達磨は法であるから、胎藏法と云ふべきである、胎藏とは母の胎内に兒を藏するとの意で、常に含藏の義と攝持の義とがあるとして居る、含藏とは父母和合の因緣で、賤しき女の腹にも貴き胤を宿すが加く、吾々の凡夫でも諸佛菩薩と同しき覺性を含藏して居る、所謂一切衆生悉有佛性であるとの意だ、攝持とは此貴き胤が成長せば天下の大權を握る德を保つが如く、吾々の覺性も能く培養すれば佛となりて一切衆生を教化する德を攝持して居るとのことである、蓮花が泥池の中から生ても清淨の美花を開くと同いことだ、即ち胎藏界は理平等の法門であると云ふことになるのである、故に胎藏界曼荼羅は横門流出で迷悟雜亂し十界具足して居るのである

四三　金剛界の名稱

金剛界とは梵に縛日羅駄都と云ふのである、縛日羅は金剛で、駄都は界である、金剛と云ふ名稱には古來金剛不壞の意と、利用摧破の意との二があるとして居る、堅固不壞とは其物自體の德で讀て字の如く如何なる物に遇つても自體が堅固で壞れぬとのことである、利用摧破とは其作用の德で、必ず他物に對抗すれば其物を破壞し去るとの意である、丁度世間の金剛石が此二德を具して居るから金剛石と云ふのだ、金剛界大智の德は迷中に沒しても更に其趣を損せざるのみならず能く其迷を破りて眞實の光明を發揮せしむるのである、換言すれば吾人の智識は誤謬を去りて眞理を發見するの謂である、故に金剛界は智差別の法門で、其曼荼羅は九會轉昇の堅門建立てある

四四　金剛界と胎藏界

眞言密教の教理は金剛界と胎藏界の兩部より成立して居る、金剛界は智差別の法門で、胎藏界は理平等の法門である、何物にも差別と平等と云ふことは離れぬもので柳だ櫻だ、桃だ、李だと差別の眼で見れば春の山には種々の木があるが、平等の眼

で見れば只青々したる山と云ふに過ぬ、而して此柳だ桃だと云ふ方が眞理て青い山と云ふ方が非眞理てある譯でもなく、青い山と云ふ方が眞理て柳だ桃だと云ふ方が非眞理と云ふ譯でもない、只觀察の方面を異にする丈てある、此二者の關係は二にして一、一にして二てある是を密敎では二而不二と云ふのてある、金剛界と胎藏界と云ふ二があるが故に卽ち不二てなくてはならない、二と云ふ思想は不二と云ふものに對して始て意義を明にするのてある、金剛界と胎藏界が不二平等てあるが故に二而てなくてはならない、不二と云ふことは二と云ふことありて始て存在することてある、故に金剛界と胎藏界の外に此二者を合一したる不二の思想の存在を認むるは不合理てある、而して此金剛界と胎藏界とは差別的平等と平等的差別との異に外ならぬから互に融通無礙して理論を構成して居るが今玆に而二として其詮表する所を配當すれば

而二
- 金剛界　智　差別　精神　心法　堅　識　大　大智　陽　佛　歸納法
- 胎藏界　理　平等　物質　色法　横　五大　大悲　陰　衆生　演繹法

不二

となるのてある、固より配當は一應のことてあるが、金剛界曼荼羅は心の無礙自在なるを表して五解脫輪の圓形割て、佛は月輪中に蓮華を置きて其上に坐し、胎藏界曼荼羅は物の質礙有體なるを表して十三大院方形割て佛は、蓮華の上に坐し、背に月輪を置くのてある、卽ち一は月輪の中に蓮華があり、一は蓮華の上に月輪がある の差がある

四五　金剛界曼荼羅

金剛界曼荼羅は智差別の法門てあるから上轉下轉九會轉昇の堅門の曼荼羅てある、故に根本羯磨會より下轉すれば九轉轉下して降三世三昧耶會に出て、降三世三昧耶會より上轉すれば九轉轉昇して根本羯磨會に達するのてある、此曼荼羅は四種曼荼羅の各別と融合と三輪との關係に依て建立したのて其九會曼荼羅總體の形は吾人胸中にある八瓣の肉團心を象りたるものて、胎藏界曼荼羅の中臺八葉院と其意を同ふするのて卽ち根本羯磨會の中心から八瓣が出た形てある、此等の關係を圖て示せば

會數	尊數	曼荼羅ノ位	三輪	三身	上下轉重位	迷悟關係
羯磨會	千六十一尊	大曼荼羅の位				
三昧耶會	七十三尊	三昧耶曼荼羅の位				
微細會	七十三尊	法曼荼羅の位	自性輪	自性身	上轉第三重	悟界
供養會	七十三尊	羯磨曼荼羅の位			下轉初重	
四印會	十三尊	四種曼荼羅融合の位				
一印會	一尊	四種曼荼羅歸一の位				
理趣會	十七尊	迷悟冥合の位	正法輪	受用身	上轉第二重	迷悟不二
					下轉第二重	
降三世會	七十七尊	大曼荼羅の位	教令輪	變化身	上轉初重	迷界
降三世三昧耶會	七十三尊	三昧耶曼荼羅の位			下轉第三重	

計九會　計千四百六十一尊

こんな鹽梅て中央の根本羯磨會は總會、他の八會は別會と云ふことも出來る、四種曼荼羅の關係から云へば羯磨會は尊像の位てあるから總德となり三味耶會は持

（西）

四印會 (五)	一印會 (六)	理趣會 (七)	降三世會 (八)
供養會 (四)	羯磨會 (一)	降三世會 (二)	降三世三昧耶會 (九)
微細會 (三)	三味耶會 (二)		
(6)	(9)	(3)	(2)
(7)	(8)	(4)	(5)

（北）

（東）

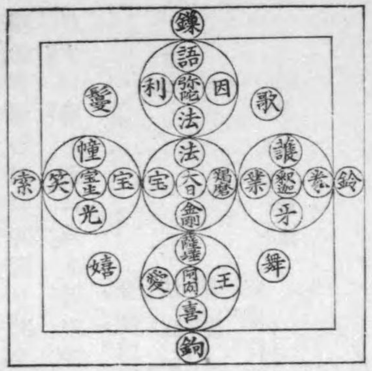
（南）

物の標示、微細會は名稱、供養會は特徴で、此四種の智德を双べ合せたるが四印會で、此四種の智德が全く融合したるが一印會てある、此の如くの順序は歸納的てあるが、之を一印會から四印會を演繹して此四印會を各別に分ちたるが羯磨會、三味耶會、微細會、供養會てあるとせば演繹的となるのてある、此六會は九會を三重に分たば第一重て佛の境界てあるから六會は皆大日如來を主尊として居るのてある、然るに理趣會は吾人凡夫の代表者たる金剛薩埵が主尊て佛と衆生と同一體たる迷悟不二の旨を顯し居る、即ち金剛薩埵は吾人が必ず持つて居る欲煩惱、觸煩惱、愛煩惱、慢煩惱を

眷屬として居るので此四煩惱を其儘に淨化したのが金剛薩埵である、此位は上轉からも下轉からも第二重で何れよりも中間に位するのである、降三世會は金剛薩埵が教令輪の忿怒身を現した忿怒明王が主尊で吾人の持つて居る迷其儘を顯した會である、此に二會あるのは降三世會は心理上の迷で、降三世三昧耶會は物理上の迷と見て差支ない、此二會は下轉第三重で全く吾人の食いたい着たい遊びたいの欲其儘の會である、別けて說けば以上の如くであるが九會は一曼荼羅の功德相であるから、本來から云へば淺深高下のある筈はない平等法界である、只水の上の波浪の起伏を種々に說明するに足ぎない

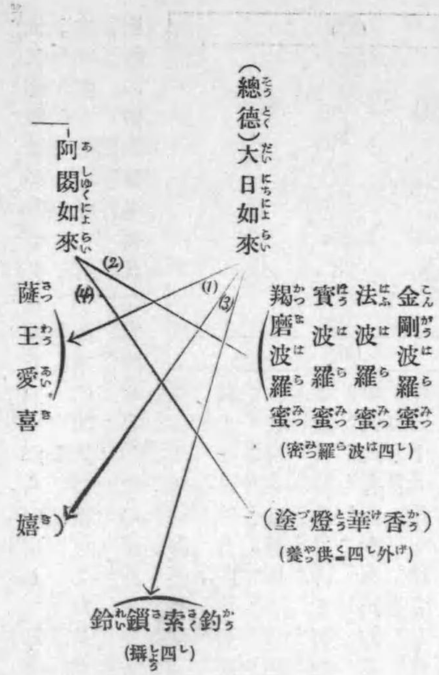
四六　金剛界三十七尊

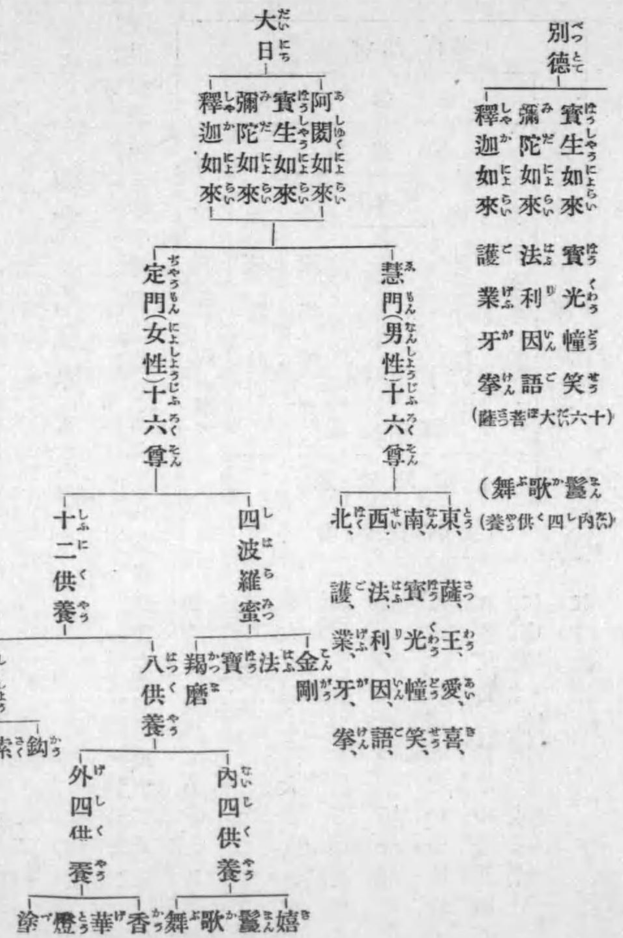
金剛界曼荼羅は九會組織である、其主尊は三十七尊である、三十七尊は互に主伴となりて平等海中に種々の神變加持をなさるゝのであるか此三十七尊と云ふ數が何故に出來たかと云へば、玆に一物體ありとせば必ず四種の觀察方法がある、此四種の觀察方法を巧に應用せるものは即ち三十七尊の建立である、云ふまでもなく



大日如來は總體で此總體を四方から觀察して、即ち東方阿閦如來、南方寶生如來、西方阿彌陀如來、北方釋迦如來の四大眷屬とした、是が總體中の別體である、而して此別體の四大眷屬に又四眷屬を附したのが即ち東方阿閦如來の眷屬たる金剛薩埵王菩薩、愛菩薩、喜菩薩、南方の寶生如來の眷屬たる寶菩薩、光菩薩、幢菩薩、笑菩薩、西方の阿彌陀如來の眷屬たる法菩薩、利菩薩、因菩薩、語菩薩、北方の釋迦如來の眷屬たる護菩薩、業菩薩、牙菩薩、拳菩薩の十六大菩薩である、此十六大菩薩を惠門即ち男形として之に對して定門女形の十六尊を建立したのである、此定門の十六尊は四佛と大日如來との相互の關係から成立するのである、开は阿閦、寶生、彌陀、釋迦の四如來が、總德の大日如來の爲めに其四親近たる金剛波羅蜜、法波羅蜜、寶波羅蜜、羯磨波羅蜜の四波羅蜜菩薩を出生したので、大日如來は四如來を供養せんが爲めに嬉戲菩薩、鬘菩薩、歌菩薩、舞菩薩の內の四供養菩薩を出生して嬉戲し、鬘を着け、歌を謠ひ、舞蹈をして大日如來を

供養するのである、四如來は此供養に答へん爲めに燒香菩薩、華菩薩、燈明菩薩、塗香菩薩の外四供養の四菩薩を出生して香を薫し、華を捧げ、燈明を點し、香水を身に塗りて大日如來に供養し奉るのである、そして大日如來は最終に鉤菩薩、索菩薩、鎖菩薩、鈴菩薩の四攝菩薩を出生して四門に配置して一切衆生を佛の境界に鉤て引入れ、索に縛し鎖に繫ぎ、鈴の妙音で呼入るるのである、之を圖で示さは





顯教の佛樣には女形はないが、密教の佛樣は男女共にある、此關係を今の世の男女同權だとやら異權とやら云ふ連中に應用して話て聞かせたいものてある

四七　胎藏界曼荼羅

胎藏界曼荼羅は理平等の法門てあるから前後四重、左右三重、十二大院に分れ、合計四百拾四尊てある、大日經疏には中臺(君主)、初重內眷屬(親王皇族)、第二重大眷屬(大臣大將)、第三重生身眷屬(萬民)と分つて居るが、要するに皆中臺八葉九尊の平等流現の色相を現じたるに過ぎない、金剛界の竪門とは別て即ち横門の曼荼羅てある、故に中臺一院即ち拾一大院てある、表にすれば

中臺八葉院九尊

中央　大日如來正法輪の德……遍知院(七尊)
中央　大日如來敎令輪の德……持明院(五尊)
北方　天鼓雷音如來の德……金剛手院(三十三尊)
東南方　普賢菩薩の德……除蓋障院(九尊)
東方　寶幢如來の德……虛空藏院(二十八尊)
西南方　文殊菩薩の德……文殊院(二十五尊)
西方　阿彌陀如來の德……觀音院(三十七尊)
西北方　觀音菩薩の德……地藏院(九尊)
南方　開敷華王如來の德……釋迦院(三十九尊)
東北方　彌勒菩薩の德……蘇悉地院(八尊)
中央　大日如來ノ等流身……外金剛部院(二百五尊)

拾壹大院

第一重

第二重

第三重

となるのてある、之を古來三部に配釋して、中臺の上下の七院は佛部、其左方の二院は金剛部、其右方の二院は蓮華部となし、外金剛部院は三部の各方面に隷屬して居

るものとして居る之を圖て示さば

中央佛部――文殊院、釋迦院、遍知院、中臺院、持明院、虛空藏院、蘇悉地院

左方金剛部――金剛手院、除蓋障院

右方蓮華部――觀音院、地藏院

となるのである、而して此の如く十二大院に分つたのは機根に約して顯したものである、常には胎藏曼荼羅は十三大院と云ふが現圖曼荼羅には四大護院がないから十二大院丈である、而して此曼荼羅には地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天(外金剛部院中に存す)、聲聞、緣覺(釋迦院等)、菩薩(第一重第二重の各院)、佛(中臺院、釋迦院)の十界を具足すと稱せらるるのである、現圖曼荼羅は昔から三變したものである、大日經に記載せられて居る曼荼羅は中臺八葉院の上方は三重て下方が二重である即ち下方の第二重の蘇悉地院はない、然るに大日經疏の阿闍梨所傳の曼荼羅は前後左右とも皆三重である、而して現圖曼荼羅は前後四重左右三重である、此の如くに變遷し來つて現圖曼荼羅の理論か發達したのである、併し大日經曼荼羅は印度の發意、阿闍梨所傳と現圖曼荼羅は支那の發達である、誰か新密教を唱道する勇氣のあるものが出て日本式の曼荼羅を建立するものはあるまいか、さもあらばあれ此曼荼羅は密教の教義上から見れば、此の如く萬像網羅主義であると同時に、世界の宗教美術から見ても此の如く偉大なる思想の發揮せられたるものはない、其點のみでも異宗教者に向つて充分誇るに足ると思ふ

四八　三部

前に胎藏曼荼羅は三部に配釋せらるゝと云ふたが、此三部は佛部(若くは如來部)、蓮華部、金剛部の三てある、此三部は堅に差別的に分類したものてある、大日經、蘇悉地經等は此分類法を用て居る、蘇悉地經は佛部は下成就法として居る、然るに大日經は此差別的見解を捨てゝ餘程平等的に傾いて居るが、大日經疏に至つては全く三部を横平等に取扱つて、金剛頂經の平等的見解の五部と殆んど同い見解を有して居る、故に三部を差別的に見るか平等的に見るかは一の問題と云はねばならない、古來此三部に種々配釋をして居るから、是を諸經諸論を解釋する道具に使ふて居る、圖にして示せば

三部	佛部	蓮花部	金剛部
部主	大日	觀音	金剛手
種子	ओ	ह्रीः	वज्र
修法	息災	增益	降伏
色	白色	黃色	黑色
形	圓	四角	三角
三心	寂靜	歡喜	威猛
三尊	如來	菩薩	世天
悉地	密嚴國土	十方淨土	諸天修羅宮

此外にも澤山の配當法がある、必要のものは祕密辭林四百二十五頁を見るがよい

四九、五部

五部とは佛部、金剛部、寶部、蓮華部、羯磨部で、横平等の分類法で、金剛頂經に說く所であるから、三部法の建立の如く金剛部か下成就で、蓮華部か上成就と云ふ譯ではない、故に胎藏界に說く處の三部と開合の不同であると、一概に解釋するのは穩當でない、金剛界曼荼羅は此五部に依て建立せられて居るから金剛部の法相今一二の配釋を連ねて置こう

五部	佛部	金剛部	寶部
五部主	大日如來	阿閦如來	寶生如來
五智	法界體性智	大圓鏡智	平等性智
方位	中央	東方	南方
三形	塔婆	五股杵	寶珠
種子	ओ	वज्र	त्राः
修法	息災	降伏	增益
五色	白	青	黃
五形	寶形	四角	圓

蓮華部	羯磨部		
彌陀如來	釋迦如來		
妙觀察智	成所作智		
西方	北方		
蓮華	羯磨		
अः	अः		
敬愛	鉤召		
赤	雜		
三角	半月		

尙斷つて置くとは種子から上には異配當はない、修法以下には異つた配當法がある、前の三部と對照して其趣を解するがよい

五〇　大日如來

金剛界曼荼羅も胎藏界曼荼羅も其主尊は大日如來である、扨て大日如來とは梵語で云へば摩訶毘盧遮那左坦他誐多で、直譯すれば摩訶は大、毘盧遮那は遍照、左坦他誐多は如來である故に、合すれば大遍照如來となる、所で遍く照すものは日である、から大日如來と義譯したのである、大日經疏には日と云ふことに就て除闇遍明と、衆務成辨と、光無生滅との三義を出して居る、除闇遍明とは闇黑を除て光明を遍ねかしむるの語、衆務成辨とは日光の力で萬物が生長すると、光無生滅とは雲に蔽はれても滅した譯でもないとのことである、大日如來は遍法界身で、即ち宇宙の總體を云ふのである、今日の語で云ふと絕對我とか普遍我とか云ふのと能く似て居るが、大日如來は橫門から云へば宇宙の全部であると同時に竪門からは宇宙發現の本體で、而も此宇宙全部を總轄する所の主體で、眞言密敎を說いた所の敎主である、故に吾人は、即ち大日如來であると同時に、大日如來は吾人の信仰の對象となり得るのである、此大日如來を理平等の方面から觀察したるが即ち胎藏界の大日如來で、智

差別の方面から觀察したるのが金剛界の大日如來である、而して大日如來の智慧を橫門に分つたのが五智で、大日如來の法身を竪門に分つたのが四種法身說である、是を體相用の三方面から見たのが六大體大、四曼相大、三密用大說である

五一　常恒說法

大日如來は朝から晩まで年ゲ年中、三世常恒に說法してござるが、人間と云ふものは淺間しいもので、此說法を聽く耳を持たないのである、丁度雷がごろ〳〵なつても聾は聞くとが出來ぬと同いとて、實に情ないとてはないか、換言すれば宇宙の凡ての原理は、宇宙の存在と共に存在するものであるのに、未開の時代には其原理を發見するとが出來ない、ニウトンがあつて、始て宇宙に引力が出來た譯でもなく、世界の存在と共に投げた石は必ず引力に依て地へ落ちて來たのである、フランクリンがあつて後に電氣が出來たのてはなく、世界の存在と共に雷はピカ〳〵光つて居るのてある、無線電信、飛行機も近頃出來たものてあるが、其原理は世界と共に存在したのてある、只其原理を發見し是を應用するとが今日に始まつたに過ぬので

ある、大日如來は常恒不變に說法し給ふてある、吾人が煩惱の爲めに覺性を發揮せぬから、悲哉常恒の說法を聞くことが出來ぬ、諺に「子を持つて知る親の恩」と云ふとがあるが、子を持つて漸く親の恩を知る頃は親は亡くなつてしまう、早く修行して大日如來の常恒の說法を聞くやうにならぬと、醉生夢死で終るととなる

五二　五智

大日如來の無量智を五に分類したものが五智である、五智とは法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の五て、祕藏記には「水性の澄寂にして一切の色相顯現するを大圓鏡智に喩へ、一切の萬像其水に顯現して無高下にて平等なるを平等性智に喩へ、其水中に一切の色相差別顯現するを妙觀察智に喩へ、其水遍せざる所なきを法界體性智に喩へ、一切の情非情の類、水に依て滋長するを成所作智に喩ふ」とある如く、宇宙が歷然として萬像を顯して居るのは、丁度大な鏡に種々の形が寫るが如きものゝだと云ふのて大圓鏡智と名けた、是が第八識を轉じて得た阿闍如來の三昧てある、宇宙の萬像が平等の性質を有して居るのが平等性智て、是が第七識を轉じて得た寶生如來の三昧てある、宇宙の萬像は甲乙彼此正邪善惡と云ふ差別がある、是が妙觀察智て第六識を轉じて得た阿彌陀如來の三昧てある、宇宙の萬像が互に顯現長養して行くものて、今日の語て云へば進化發達して行くのて、是が成所作智て、前五識を轉じて得た釋迦如來の三昧てある、此等の諸德を總轄する宇宙の本體が第九識を轉じて得る所の法界體性智て、即ち大日如來の三昧てある、此五方面即ち五智の觀察て始て宇宙萬像の眞正なる智識を得らるゝものてある

五三　四種法身

大日如來の發現關係を說くに自性法身、受用法身、變化法身、等流法身の四種がある、第一自性法身とは自體法然の故に自性と云ふと解せられて、大日如來の寂然たる總德より名けたのてある、曼荼羅に配すれば中臺の大日如來てある、第二受用法身とは、是に自受用、他受用の二種がある、自受用とは自分て說て自分て聽いて居る位て、他受用とは直接てはないが、說法すれぼ何時か他人の爲めになると云ふとてある、前者は其相自體の上から見たもの、後者は他から其相の用を觀察したのてある、

曼荼羅に配すれば四佛が其位に當るのてある、第三變化法身とは人間に生れて說法度生するもの即ち曼荼羅第三重の釋迦如來が其人てある、第四等流法身とは等同流類と云ふて、大日如來か猫にても犬にても乃至は柳や岩石にても其形を現ずる邊を云ふのてある、即ち曼荼羅の外金剛部院の餓鬼、修羅等か夫てある、例を以て云へは數純の總體は即ち自性法身てあるか、自ら樂む爲めに修法するのは自受用法身の位て、此修法が他人に利益を與へたる場合が他受用法身となるのてある、而して人に賴まれて修法すれば是れ變化身の境界てある、然るに止むを得ざる事情があつて時には演壇に立ち、時には原稿も書き、時には茶も呑めば飯も食ふ、是れが等流身てある、扨て此の如く四身の別はあるも數純たるには何の變りもない是が法身の法身たる所以てある、然るに顯敎の三身と云ふのは法身とは無色無形の眞如の位、報身とは此眞如に人格を附したる位、應身とは印度出現の釋尊と云ふのてある法身と報身とは人格の有無に依つて分つて居る、故に此宗の四種法身とは大に其趣を異にするのてある換言すれば顯敎の三身中の法身の位を密敎は四種法身と分つたのてある

顯敎の三身
- 法身
  - 自性法身
  - 受用法身
  - 變化法身
  - 等流法身
- 報身
  - 自受用報身
  - 他受用報身
- 應身

密敎の四身
- 自受用法身
- 他受用法身

五四　佛身の成立

顯敎の佛菩薩は娑婆往來八千返したり、十刧思惟したりして種々の修行して佛となるのてあるか、密敎の佛はそんな七面倒の因緣を要せぬ、茲に佛を建立せんと思はゞ第一に種字を觀し、次に三昧耶形を觀し、次に佛身を觀するのてある、是を常に種(種字)、三(三昧耶形)、尊(尊像)の轉成、又は字(種字)、印(印契即ち三昧耶形)、形(形像)の三曼荼羅とも云ふのてある、例せば茲に不動明王を建立せんとせば、先に壇上に ह字(種字)

あり變じて利劒(三昧耶形)となる、利劒變じて不動明王(尊像)となる、右の手に利劒を執り、左の手に羂索を持し、忿怒威猛の相にして大磐石の上に座し、背に大火焔を負ひ給へりと、觀ずれば足るのである、どんな佛でも明王でも此流義で觀するのであるから直に出來る、こんな鹽梅だから毘沙門天と辯才天、大黑天とを合體して觀して三體合行の大黑天とするとも出來れば、不動明王の心中に觀音菩薩をも建立することが出來るのである、是を極端に擴充すると、大日如來の心中に天照大神若くは基督も建立することが出來るのである

五五　諸佛の本誓

胎藏界曼荼羅、金剛界曼荼羅には數百の佛があるそんなに佛はなくともよさそうなものだ、密教はまだ他神教の域を脫しないなぞと非難するものがあるが、夫は大なる間違である大師は「機根萬差なれば針灸千殊なり」と仰せられたが人は千差萬別で種々のことを願ふのである、西諺に「神に似せて人を造つたのではなく、人に似せて神を造つたのである」と云ふことがある、人が千差萬別だから佛も千差萬別でなくてはならない、故に密教では阿闍梨となれば己の理想に適當なる佛を千手觀音でも六足明王でも案出すのである、唯一神教の連中でも同じいとて無限と云ふことに考ふることが出來ぬから、有限の己の思想に依て神を限定して祈るのである、口では絕對無限と云ふても實は絕對無限と云ふことは、吾人の思想上には浮べることの出來ぬものだ、然らば寧ろ汎神教的見地の下に自由に佛を觀し出す方が信仰の妙味はある　し此妙味は自ら觀想を凝したものでなければ分るものでない

五六　佛菩薩の分類

佛菩薩明王、天等を分類するに、金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅とは其趣を異にして居るが、多くは横に佛部、蓮華部、金剛部の三分法、若しくは竪の佛、菩薩明王、天の四分法てある、之を圖で示さば

三分法
- 佛部　大日如來釋迦如來、虛空藏菩薩
- 蓮華部　觀音菩薩、勢至菩薩、地藏菩薩
- 金剛部　金剛薩埵、不動明王、愛染明王、歡喜天

此場合には佛部は定德で、蓮華部は大悲門の佛、金剛部は大智門の佛と云ふことになる、故に蓮華部は攝受門の佛、金剛部は折伏門の佛とも云ふことが出來る、竪門の四分法に依れば

四分法
- 佛　釋迦如來、藥師如來
- 菩薩　觀音菩薩、金剛薩埵
- 明王　不動明王、愛染明王
- 天　歡喜天、辯才天、毘沙門天

此外に佛部、金剛部、寶部、蓮華部、羯磨部の五部分類の五分法、又は敎主(君主)內眷屬(皇族)、大眷屬(大臣知事)、外眷屬(臣民)の四分法等の分類もある、以下代表となるべき佛の五六の本誓を話さう

五七　金剛薩埵

佛の代表者は大日如來で、吾々迷人の代表者は金剛薩埵である、故に吾人行者が佛に祈らんとする時は必ず金剛薩埵の三昧に住すべきとなつて居る、金剛薩埵の性格を四分すれば欲菩薩、觸菩薩、愛菩薩、慢菩薩となる、欲とは讀んで字の如く吾々の欲てある、觸とは身の觸覺作用のこと、愛とは愛着執着のこと、慢とは高慢のことである、今日の流行語で云へば財欲と肉欲と戀愛と虛名である、是ならばお互に度に於て差こそあれ皆持つて居る處である、密敎の心では此の如きの欲や迷があつたとて此欲や迷を除き去ると云ふのでない、此欲や迷を其儘に淨化すればよいのである、山極つて水、窮すれば通ずであるから、此の如きの欲や迷も絕對的極端まで發揮し去れば差支ないのである、財を盜むものは賊、國を盜むものは王との諺もあるが、宇宙の王とならうと思ふが如きは、即ち佛とならうと思ふと同じいとてある、人世成功の人となれば、苦みに苦みたるとや、迷に迷ひたるとが、即ち其人の成功の母となり、此苦み此迷は後には人世の指導の光明となるのである、故に苦だからとて迷だからとて捨るべきものでない、吾人も金剛薩埵の境界に達すれば財欲、肉欲、戀愛、虛名も皆淨化せられて佛の功德相となるのである、澁い柿ほど干柿にすれば甘くなるのであるから澁いとて捨つべきものでない

五八　如意輪觀音

如意輪觀音とは如意寶珠の三昧に住じて大法輪を轉ずる觀音の意である、此觀音は一面六臂である、右の第一手は思惟相として頰杖を撞いて思考せらるゝ貌、右第二手は如意寶珠を載せ、右第三手は念珠を持し、左の第一手は光明山を按じ左第二手は蓮を持し左第三手は法輪を載せてござる、此六本の手は六道能化の相で、右第一思惟の手は地獄難化の衆生を救濟せんと思惟せらるゝの相、右第二寶珠の手は寶珠から萬寶を雨して餓鬼を救ふ相、右第三念珠の手は數の觀念を明々として愚痴の畜生を濟度する姿、左第一手山を按するは動かざる相を示して修羅の爭鬪動搖を戒むる相、左第二の蓮は泥中より生じても垢れざる如く、我々の煩惱中に本覺佛性あるを示し、左第三手の輪は法輪を轉じて天道の衆生に聞法得益せしむるの相である、茲には如意輪觀音に就いて說いたが、他の諸佛菩薩例せば、文殊菩薩は智慧の利劍を持ち、虛空藏菩薩は福德の如意寶珠を持し、藥師如來は藥壺を持つ等、皆其本願本誓を顯して居るのである、故に一の持物一本の指の屈げ方でも徒になされて

居るのではない、然るに俗人共は此等のことは知らないから、其淺い智慧に任せて隨分滑稽の解釋をするものである、序に一つ話さう、東京音羽護國寺の觀音堂は（德川綱吉將軍の建立て本尊は如意輪觀音である、近年護國寺で緣日を始めたのだが參詣の人が至つて乏い、所で近隣の人の解釋が頗る振つて居る、其語に曰くだ、護國寺の觀音樣は頰杖を撞いて居眠をしてござる、然るに參詣の人あつて祈願をして金を下さいの、病氣を癒して下さいと、種々に騷がれては自分の居眠の妨げになる、夫で觀音樣は參詣人を御嫌になるのだと、こんな例を擧ぐれば愛染明王が染物屋に信仰せられ、馬頭觀音が馬喰連に信仰せらるゝ等中々少くない

五九　不動明王

折伏門の忿怒明王として、最も世に崇拜せらるゝと云ふよりも、阿彌陀如來を除かば其崇拜の第一位を占むるものは不動明王である、密敎の祈禱と云へば直に護摩を連想する、護摩を連想すると同時に不動明王を想ひ出すのである、不動明王の本誓は奴僕三昧であつて祈願する人の奴僕となつて、必ず其祈願を成就せしめんと

日本式

西藏式

の本願であるから、他の諸佛菩薩とは全く其趣を異にして居るのである、愛染明王と不動明王を本尊の兩脇立にして居る所があるが、愛染明王は王者の三昧で、不動明王とは正反對である、不動明王は右手には降魔の利劍を持し、左手には大悲方便の羂索を持し衆生を大悲の繩で縛して引入るるも、若し强剛難化であれば右手の利劍で殺害し去るとは誰も云ふことであるが、頂上に蓮華あり、髮が七結して左耳の邊に垂れて居ることは氣附くまい、此髮を結ふことは印度の奴僕の狀であって此を七結したのは七代の主人に忠僕たりしの相を表すものである、又頂上に蓮華のあるのは此蓮華座上に信仰者を人が賴んでも賴みやうが惡ければやらぬといふのが人情であるのに、自ら奴僕となつて人を救ふと云ふ其大慈大悲の深いことは實に驚かざるを得ない、佛や菩薩や明王や多しと雖、此の如くに深重の大慈悲は稀である、不動明王か諸尊中特に流行する所以は此處に存するのである、成田山一山の收入てすら、一ヶ年に拾萬圓以上であるのを見ても、如何に不動明王の信仰が盛なるかは知れるであらう

載せて菩提の彼岸に運ぶのである、

六〇　聖天

祈れば七代の寶を一代に集むると云ふ信仰のある位で、如何なる無理の願でも必ず成就せしむると信じて、慾張に盛に崇拜せらるるのは聖天である、此尊は歡喜天とも單に天尊樣とも云ふて居る、其形が男女二體抱合ふて居るので著名である、元來歡喜天は梵語で毘那夜迦と云ひ即ち善法を破壞する所の障碍神である、此障礙惡神が佛法守護神となつたのであるから、生れ付いた性質は雀百まで踊を忘れずの寸法で、御利益も現當なる代りに、冥罰も現當だと信ぜられて居る、此二天に就て二權、二實、權實の三種類がある、二權とは男女二天共に佛の化身とするもの、二實と

は男女二天共に實在の下劣の神、權實の天とは男天は實在の神、女天は十一面觀音の化身とするのである而して多くの場合は、此權實の天が祭られてある、箇樣な譯であるが其供養法が頗る他と趣を異にして、浴油供とて尊像を油で煮たり、酒を浴せたり甚しきに至つては、尊像を逆に吊して御利益を强請するのである、密敎諸天中で此天と、陀枳尼天が最も下劣である、此天は多く象形人身であるが、權類の天は佛の相好を具して居るものもある

六一　仁王尊

俗人原が俺面眞赤ニフンバッタヤ沙賀と云ふ眞言だなどと噺し立つるほどに、各寺院の門に立ち給ふ仁王尊のとは、的確の說明をしたものがないから序に話して置かう、元來仁王尊とは二王尊で、此尊は胎藏界曼荼羅などにあゑ不可越守護と相向守護の二守護であつて、二人の門番である、故に二王尊と云ふのだ、此二尊は强剛難化の衆生が釋尊に敵對をするので、門に居つて釋尊を守護したが抑もの始である、右は阿と口を開き理德即ち陰を表し、左は吽と口を閉ぢて智德即ち陽を表すとして居る、此二尊を常には密跡金剛と云ふて居る、是は夜叉の發達した名である、多くの人が密跡金剛の一尊を門番とするに就て、特に二尊と分ちたるが如く說くのは、研究の足らぬので、印度から既に堂々たる二人の門番である

六二　十三佛

今一つ俗間に最も行はれて居るのは、十三佛の曼荼羅である、此十三佛は婆有緣の佛を一曼荼羅に盡したものである、此曼荼羅は立川流の大成者として有名なる文觀僧正の作であるとのことだ、最も通俗的のやうであるが、其實は密敎の根本原理を應用したものである、抑も十三と云ふ數は、胎藏界曼荼羅の十三大院に象つたものである、故に胎藏界曼荼羅の敎令輪たる不動明王を第一に置きたるものである、是は金剛界九會曼荼羅の上轉第一會か其敎令輪たる降三世明王の三昧耶會があると思ひ合はすべきである、第二に釋迦如來、第三文殊菩薩、第四普賢菩薩で是は釋迦如來の三尊帳である、第五地藏菩薩、第六彌勒菩薩、第七藥師如來で第八觀音菩薩、第九勢至菩薩、第十阿彌陀如來、此三尊がまた阿彌陀如來の三尊帳である、第十

一阿閦如來、是は菩提心の即ち因の總德の尊、第十二大日如來は果の總德の尊、最後に密教最極の如意寶珠の三昧たる虛空藏菩薩を置いたのである、虛空藏菩薩とは大日如來を絶對に福德化したる尊、換言すれば人が最も好む所の佛と、大日如來を化したるは虛空藏菩薩である、佛の胎藏曼荼羅は横門の曼荼羅であるから、西門の入口から程遠からぬ所、即ち一番最初衆生に緣を結ぶが虛空藏菩薩である、而して此菩薩がまた最極深秘の佛である、是を圖て示さば

- 第一　不動明王
- 第二　釋迦如來
- 第三　文殊菩薩
- 第四　普賢菩薩
- 第五　地藏菩薩西
- 第六　彌勒菩薩北
- 第七　藥師如來東
- 第八　觀音菩薩

釋迦三尊帳（北）

三方別德

- 教令輪　第一重
- 正法輪　第二重
- 修行
- 發心

- 第九　勢至菩薩
- 第十　阿彌陀如來
- 第十一　阿閦如來
- 第十二　大日如來
- 第十三　虛空藏菩薩

彌陀三尊帳（西）

（東）（中央）（南）

- 自性輪　第三重
- 因果
- 如意寶珠
- 最極
- 不二
- 涅槃

となる、佛樣の話をして居れば盡くる時はないから此邊で切上げて是から教理の方を少しく話さう

六三　體相用三大

密教では根本原理として六大體大、四曼相大、三密用大の説を立てゝ居る、凡そ一物が存在すれば必ず體あり、體あれば必ず相狀あり、相狀あるものは作用を具すると云ふまでもないが、密教では此體を物心二元の關係で六種に分類し、之を六大體大と名け、其相狀を四種に分ち是を四曼相大と呼び作用を三樣に分ち之を三密用大として居る（用大新義派ではようだいゆうだいと發音して居る）此の

體相用三大の關係を說ひたのは弘法大師著の即身成佛義の

六大無礙常瑜伽(體大)

四種曼荼各不離相大)

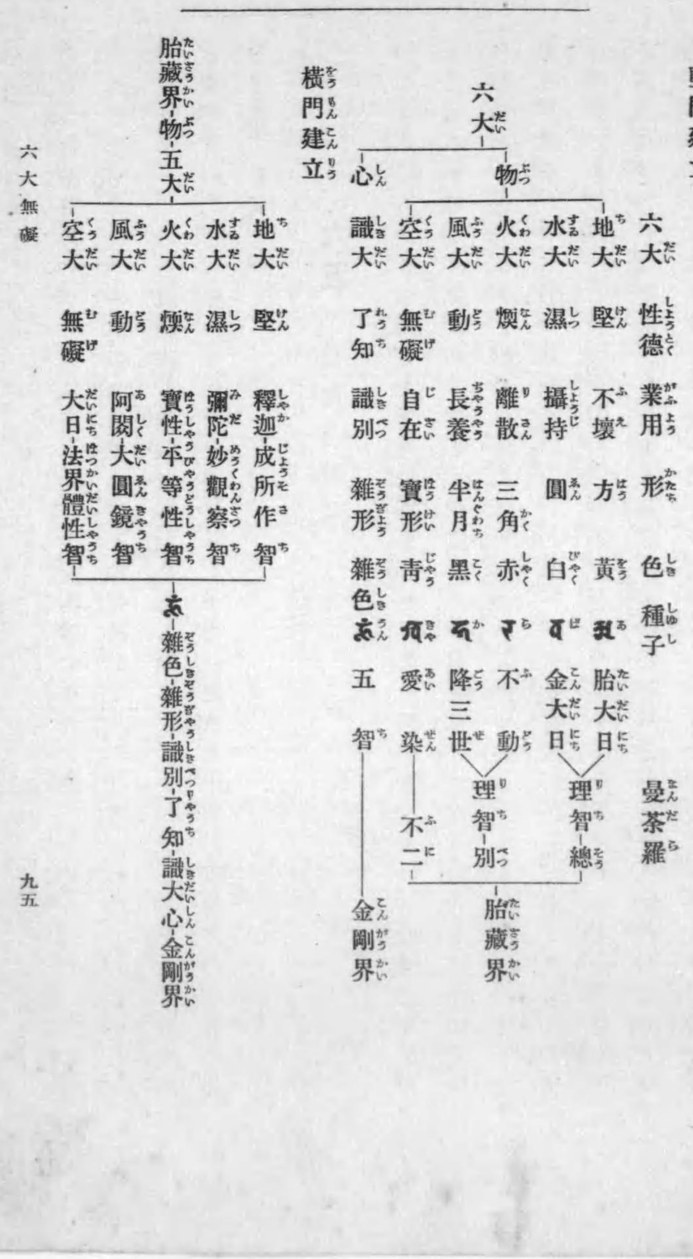
三密加持速疾顯(用大)

の偈であるが、此偈は弘法大師の作でなく、其師匠たる唐の慧果阿闍梨より傳承せられたのであるとの說もある、併し吾人の考ふる所に依れば、釋摩訶衍論と云ふ起信論を解釋した書は、唐では華嚴宗の書籍として取扱つて居るのに、弘法大師は此書を密敎の書籍として、龍猛菩薩の作だと尊崇せられて居る、然らば體相用三大說も弘法大師から密敎に唱道せられたので、其根據は矢張釋摩訶衍論に發したのであらうが、固より其說明法は弘法大師に依りて全く一進化したのである

六四　六大無礙

顯敎では眞如の理を、萬像の本體とするのであるが、密敎は是と全く其趣を異にして地、水、火、風、空、識の六大を萬法の本源とするのである、宙宙を物の方面より見れは萬像皆物ならざるなく、所謂唯物論であるが、是と同時に心の方面より見れば法界の諸物皆心ならざるはなく、所謂唯心論である、此二者は一の絕對を兩方から觀察したに過ぎぬのである、扨て密敎の敎理から云へば、物は差別を表となし、心は平等を表とするのであるから、此六大も物に就ては地、水、火、風、空と五大に分ち、心には只一の識大のみ立つるのである、地大とは萬物に存する所の堅い性質即ち千古不壞の力、勢力恒存のこと、水大とは濕す性質で今日の語で云へば凝集力とでも云ふべきもの、火大とは煖い性質、即ち熱で萬力の膨長力を云ふので、風大とは動く性質即ち活動力空大とは無礙の性質即ち融合力である、以上の五つは物であつて、第六の識大は心である、此六大は互に融通無礙して離合集散の數量と形式に依て、萬物は皆其形を異にして存在するのである、故に一切萬物は此六大の外に出てぬので、而して此六大なるものは、如何なる微細の分子まで分類するも、必ず存するものである、是を身體に就て云はゞ骨だとか肉だとか云ふ堅い處は地大で、水氣のある爲めに離れ離れにならない處が水大、熱のあるのが火大、五臟、六腑等の活動が風大、身體中に空處の存する爲めに血も巡り、食物も通じ、聲も發するとが出來るのが空大精

神作用が識大である、人間の如く、石でも木でも假令塵一本でも皆此六大を必ず具して居ると云ふが、即ち六大無礙と云ふとてある、顯教の經文中に五大と云ふとかあるのを、之に識大を加て物心両面の六大を萬物の體性としたのは、密教の大特色てある、是と同時に前五大に就ても顯教が五大を地、水、火、風、空を獨斷的に只五元素の意味として居るのを、密教は推理を一歩進めて、左の如く説明して居る、元來金剛界胎藏界を物心二元に分つ時は、物質は胎藏界に當るのてあるが、是を緣起の法門より説かば地大、水大は本體の理智の二大にして、火大、風大は變體の理智の二大、空大は變體の理智不二の一大なり、故に地大は胎藏界曼荼羅なる故に、其本形たる四角の全形、其色は胎藏界の本有色たる黄色を用ゆるのてある、水大は金剛界の曼荼羅なる故に其本形たる圓形の全形、其色は金剛界本有色たる白色を用ゆるのてある、是が總體の理智てある、次の火大は胎藏界の本形四角の半形たる三角て、此形は胎藏界教令輪身たる不動明王の曼荼羅の形て、其色は赤色てある、風大は金剛界教令輪身たる降三世明王の曼荼羅形たる圓形の半形たる半圓形て、此形は金剛界教令輪身たる降三世明王の曼荼羅の形て、其色は黑色てある、故に此二大は別德即ち變體の理智となるのてある、最終



の空大は胎藏界の形たる四角の半形と、金剛界の形たる圓の半形と和合したる寶珠形で、此形は金胎不二の如法愛染明王の曼荼羅で、其色は青であるとして居る、此處はヘーゲルの三段論法と、稍似たる點のあるのは注意すべきことと思ふ、是を竪門と横門との二種に分つて、圖を前頁に示して置いた第九十項の五輪塔の組織の條を參照するがよい

六五　識大の周遍

石でも草でも山でも川でも皆識大即ち心を具して居ると云ふは、一寸通じないやうであるが、是が密教が特に他の顯教よりも、百尺竿頭一歩を進めた所である、人間に心のあると云ふことが出來れば、萬物皆心がある譯である、抑も人間が心の働をなすことが出來るのは、何の爲めであるかと云へば、食物を食ふからである、然らば其食物は何であるかと云へば、魚類肉類もあるが、米や麥や芋や大根である、大根や米に心があればこそ之を食ふて生命を繋ぎ心を働かせることが出來るが、若し米や大根に心が無かつたならば、是を食つてどうして生命を得て、心を働かせることが出來やう加之ならず、草木は自然の肥料のある方に根を張り、日光の當る方に葉を茂らして行く、是は心のある證據で、土は岩と化し岩は石と化するのも皆心の存するからである、只心のある程度の多少が問題である、赤兒の心は大人の心とは雲泥月鼈であると同い理法に過ぎない、草木國土悉皆成佛と云ふ語があるが、識大の周遍を說く密教でなければ、其眞意義を發揮することは出來ない

六六　四曼相大

宇宙は六大から成立して居るが、其六大で出來た宇宙現象の相は如何之を四種に分類したのが四曼相大の說である、四曼とは四種曼荼羅の略語で、前に說いた大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅のことである、前に說た時は、佛の相好のみに就て云ふたのであるが、之を宇宙現象の形相の分類とする時は大曼荼羅とは其總體の形相を指し、三昧耶曼荼羅とは三昧耶とは本誓を譯し、其本來の性質其特質を顯す所の形相を云ふのである、即ち兵士ならば劒銃を持つが、商人ならば算盤を持つと云ふやうに、其特質が自ら事相に顯はるゝ所を云ふのである、法曼荼羅とは法

は軌生物解て、此に依て何事かを知ることが出來る、即ち名稱である、兵士ならば大將軍曹と云ふが如きものである、羯磨曼荼羅とは羯磨とは事業と譯し形相の活動を云ふので、兵士ならば活潑病人ならば憂鬱と云ふが如きものである、玆に繪畫に就て云へば繪畫其物の全相は大曼荼羅で、其繪畫が山水であるとか、花鳥であるとかは三昧耶曼荼羅で、天保山の圖だとか、唐子遊びだとか云ふが法曼荼羅で、其畫か清新とか、閑佳とか、優麗とかの趣があるが羯磨曼荼羅である、一冊の書物に就て云へば書物全體は大曼荼羅、洋製和製と云ふが三昧耶曼荼羅、秘密百話とか、秘密辭林とか云ふ名が法曼荼羅で、美麗とか、堅牢とか云ふ所が、羯磨曼荼羅に當るのである、苟も一物ある以上は其總相と、特質と、名稱と、作業とがある、是が四曼相大である

六七　三密用大

宇宙に體あり相ある以上は必ず作用がある、是を三密用大と云ふのである、三密とは身密、語密、意密で、身の作用と、語の作用と、意の作用との三種である、斯く云ば唯人體に就て云ふが如き感あるも、密教は宇宙を人格化して大日如來として居る故に身語意ある人の作用の語を用ゐて、直に宇宙の作用を顯す語として居る、即ち身密の働きを云ふに、一切萬象の物質的活動を皆凝めてあるのである、意密の働きに一切萬象の精神的活動を網羅して居るのである、語密の働に一切の音聲を攝するのである、此の音聲とは單なる文字通の音聲でなく、即ち物心不二の働きを指して居るのである、特に密と云ふのは、此身語意の三作用の働きが微妙不可思議で說き盡すことが出來ぬから名けたものだ、是を吾人が修禪觀法する時のときに就て云へば、身密とは手に印契を結ぶことで、語密とは口に眞言陀羅尼を唱ふると、意密とは心を寂靜に住せしむることである、人は元來此身語意の三密を平等ならしむるやうに出來て居るものである、此三密を平等ならしめざるものは、眞理に背く人、即ち惡人となるのである、佛とは三密平等の人で、吾人凡夫とは三密不平等の佛を云ふのである、佛と吾人と三密を平等一致せしむるか、修禪觀法で即ち三密加持である

六八　三密加持

三密加持の普通に現れたのが加持祈禱である、此加持祈禱は密教の最も特徵とす

る所である、加とは他の力が來て己に加はることで、持とは他から來た力を己の力と同化して離さないことである、即身義には佛と衆生との加持の關係を說て、加持とは如來の大悲と、衆生の信心とを表す、佛日の影、衆生の心水に現ずるを加と曰ひ、行者の心水能く佛日を感ずるを持と名く」とある、月が水の中に影を宿すのは、月が水の中に落ちて來た譯でもなく、水が飛上あつて月を捉た譯でもない、月と水は二つ乍ら其儘であつて而も感應道交彼此一體となるのである、三密加持とは吾人が佛の結び給ふ身密の印相を結び、佛の誦し給ふ語密の眞言陀羅尼を誦じ、佛の念じ給ふ意密の觀念を凝せば、吾人の三密は佛の三密と加持感應するのである、吾人の三密が佛の三密と加持感應する境界、換言すれば吾人が或る無限絕對の力を感じたる時は、實に吾人の微少なる有限の力は一變して、無限の大威力を發することが出來る、茲に加持祈禱の効果が顯るゝのである

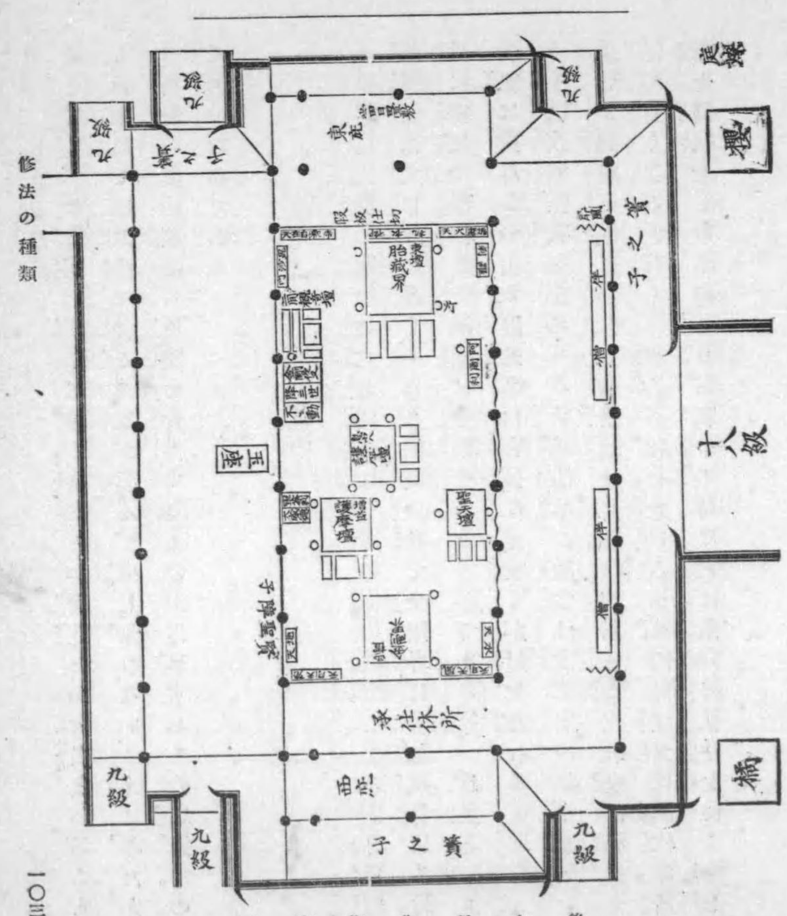
六九　即身成佛

顯敎では凡夫と佛の關係は、丁度澁柿と甘干柿のやうなものだ、凡夫は澁柿で佛は

甘干柿である、澁柿を離れて甘柿はなく、甘干柿を離れて澁柿はないとして居る、勿論吾人凡夫と佛とは、同一物たることは異論はないが、澁柿が甘干柿となる迄には、日光の力を借りて日數を要しなければならない、そんな廻り遠い事では、即身成佛即ち其身其儘が佛だとは云へない、密敎の即身成佛とは自分が我は佛なりと自覺さへすれば其でよいのである、丁度事情の爲めに父を知らぬ子が、幸にして其父に相會して互に名乘れば、夫て直に親子となるが如きもので、吾人は自ら凡夫だ衆生だ迷子だと思ふから即ち凡夫であるが、我は佛なりと自覺さへすれば、夫て佛である、故に文殊五字陀羅尼頌には「若し我一念を起して凡夫なりと云はゞ、三世の諸佛を謗するに同じ、法に於て重罪を結す」とある、自分が凡夫だ迷子だと云ふのは自暴自棄で、自己の良心を侮辱するものだとの意である、夫は丁度日本國民が我國は貧弱國なり、劣等國なりと稱するは全く自己侮辱で、而して其言が即ち國家に不忠となると同樣である、故に發菩提心論には、「若し人佛慧を求めて菩提心に通達すれば父母所生の身速に大覺の位を證す」と說いてある、吾人は我即ち佛なりとの自覺さへ得れば、光明赫灼たる佛である

七〇　修法の種類

密教は加持祈禱宗であるから、修法の種類は仲々多い、故に息災、増益、敬愛、調伏の四種法の外、内容から祕法と普通法と分け、或は十八道立、十七尊立とか分けたり、又は形から大法、中法、小法と分け、或は一壇法、兩壇法、五壇法、百壇法等と分けて居る、祕法とは特に祕密の存する法で、後七日御修法は各流共祕法とする所であるが、其他のものは各派に依て祕法の種類は自ら異るのである、例へば廣澤流では孔雀經法を最極の祕法として居るのに、小野流では請雨經法を祕法となし、別に如法愛染法をも傳ふるのである、十八道立とは十八契印を以て組織する法、十七尊立とは本尊の眷屬が十七尊であるから名けたもの、同じ種類で三十七尊立もある、一壇法とは修法する時に、一壇場を莊嚴する許りであるが、兩壇、五壇甚しきに至つては百壇も莊嚴して修したことがある、百壇法を修するとになれば、阿闍梨丈で壹百人で、是に伴僧も附き、承仕、驅使、見丁、召仕も加つて、千人も集つてチリン〳〵と鈴を振出したら驚くべき音響であらう、こんなのは特例だが普通に大法と云へば、阿闍梨の外に伴僧十四人以上二十人以下、中法は伴僧八人以上十二人小法は伴僧六人以下である、無論之に驅使、見丁等は附隨するのであるから、古への修法の「支度書」と云ふものを見


修法の種類
九級
十八級
九級
九級
子之資
子之資
子之資

ると驚くべき費用を要して居る、皇室とか貴族とか大名とか云ふものであれば兎も角、平民では大法は仲々費用が嵩んで修し切れない、こんな譯だから民間の方には、密敎の微妙莊嚴の眞髓を會得するものが出來ずして、修驗道的の祈禱で滿足して居つたのである

七・一　四種法

胎藏界は三部の竪の建立、金剛界は五部の横の建立であるが、息災、增益、敬愛、調伏の四種法は大日經に說く所の修法の分類で、金剛界にも胎藏界にも通ずるのである、故に密敎の修法は、此四種に分類せらるゝのである、第一息災と云ふのは今日でも手紙に、御息災の由大慶此事に存候、など書くが災を息むると即ち大は天災地變より、小は疾病怪我を止息する祈禱法、第二增益は讀て字の如く、繁榮を祈る法、五穀成就とか、福祿圓滿とか云ふ、御祈禱は其種類である、第三敬愛は相愛を祈る法で、夫婦仲の能くなると、若くは甲乙不和を止むる法、第四降伏又は調伏は所謂怨敵退散で、敵を降伏せしむるので、日露戰爭の時などは敵國降伏法を能く修したものである、

而して此等の修法は、其壇場莊嚴が自ら異るのである、其一二を列すれば

種類	息災	增益	敬愛	調伏	
梵名	センチキヤ	ホシユチキヤ	バシキヤロダ	アビシヤロキヤ	
壇形	圓	方	蓮花	三角	
色	白	黃	赤	黑	
心	憺泊	悅樂	喜悅	忿怒	
眼	慈悲	金剛	明目	瞋怒	
座法	薩埵伽	蓮座	賢座	丁字立	
念誦	默	不出聲	出聲	大聲	
起首	初夜	初日	後夜	日中又は夜半	
方角	北	東	西	南	

七・二　修法の組織

修法の組織は大寶を襲するの式であるが、印度の修法の組織は大體に於ては大寶

を饗するの式であつても、其間に頗る不自然な形式も雜つて居たのである、支那から後は、此形式が餘程發達して、日本の修法は頗る條理整然として來た、先づ大體から云へば修法は前供養、瑜伽、後供養の三段に分類することが出來る

第一　前供養十八契印
　一　客を招く順序
　二　前饗應

第二　瑜伽正しく用辨

第三　後供養
　一　後饗應
　二　歸宅

而して初の前供養たる、十八契印の順序を記すれば

（一）護身法五
　（一）淨三業
　　總じて三業を淨む
　（二）佛部三昧耶
　　身業を淨む
　（三）蓮華部三昧耶
　　語業を淨む
　（四）金剛部三昧耶
　　意業を淨む
　（五）被甲護身
　　甲冑を着す
　　客を招くに付、主人が自分の身仕度をなすなり

（二）前結界二
　（六）地結
　　地堅を行ふ
　（七）四方結
　　四方に柵を結ぶ

（三）道場莊嚴二
　（八）道場觀
　　座敷の莊飾
　（九）虛空藏
　　趣味の調和
　　客座敷の建設

（四）勸請三
　（十）送車輅
　　車を送りて客を迎ふ
　（十一）請車輅
　　車を牽き來たる
　（十二）迎請
　　室内に請じ入る
　　客を迎ふ

（五）後結界三
　（十三）部主結界
　　門番を附す
　（十四）虛空網
　　空に網を張る
　（十五）火炎
　　周圍に火を燒く
　　警護を附す

（六）供養三
　（十六）普供養
　　客を饗應す
　（十七）華座
　　客を沐浴せしむ
　（十八）閼伽
　　美しき座に坐せしむ
　　種々馳走を饗す

是が常に云ふ所の十八契印で、此十八種の順序で賓客を饗應することが出來るが、

此第十八目の普供養と云ふのを細別すれば

(十八)普供養
- 振鈴　音樂を奏す
- 塗香　身に香水を塗る
- 華鬘　華環を身に着せしむ
- 燒香　名香を薫ず
- 飯食　山海の珍味を饗す
- 燈明　華燭を燃す
- 讃　讃美歌を謠ふ
- 普供養　趣味の調和

となる、此の如く御饗應申すも何の爲めなりやと云ふに、是れ己と佛と一致して覺悟を開く爲めなれば、正しく其趣を行ふ、瑜伽法に三種の別がある

第二瑜伽三
- 入我々入　客と身業を融合せしむ
- 字輪觀　客と意業を融合せしむ
- 正念誦　客と語業を融合せし

此の如くにして、客即ち如來を招きたる用件は濟みたるのである、依て再び前の如く馳走をなす、之を後供養と云ふ、即ち左の各種である

第三後供養
- 一塗香　身に香水を塗る
- 二華鬘　華環を身に着せしむ
- 三燒香　名香を薫ず
- 四飯食　山海の珍味を饗す
- 五燈明　華燭を燃す
- 六閼伽　食後の口を漱く
- 七讃　讃美歌
- 八振鈴　奉送音樂
- 九撥遣　歸路

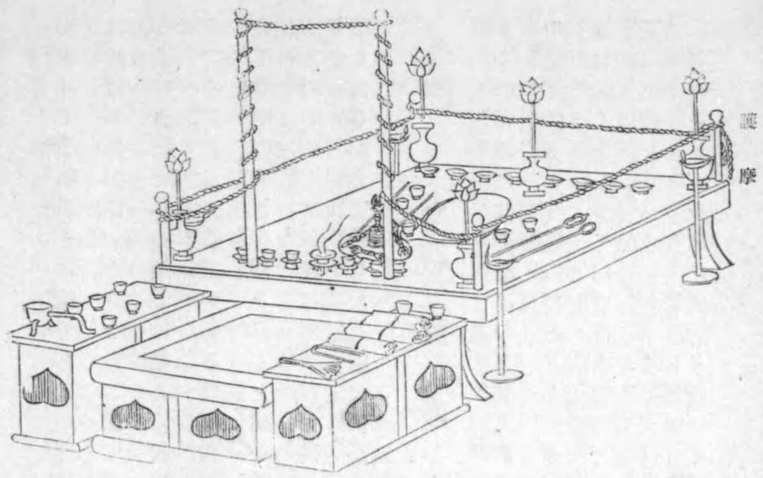
七三　修法の効果

修法は何の爲めに修するかと云ふに是に二種の別がある、即ち自己の修養の爲め

に修するものと、他の爲めに祈禱するものとてある、自己の修養の爲めに修することは、其効果の有無と云ふことに、議論のあらう筈がないが、他の願望の爲めに祈禱するのが、果して効果ありや否やと疑ふ人があらう、密教の教理から見るとこうなる、元來物質と精神と云ふ二者は其本體は一てある、是を密教の語では金剛界、胎藏界の不二と稱するのてある、故に他人が頼んだにせよ其頼んだ人の精神と、頼まれて祈禱する人の精神とが、一致して其事を成就せしむる丈の材料に依て祈禱さへすれば、必ず効果が精神的にも物質的にも顯れなくてはならない、「至誠天地を動す」とは玆處だ、併し是は程度問題て、病が八の力あるものに、祈禱の力か八丈あれば癒るが、若し祈禱の力が五丈しかなければ、癒らぬと云ふ結果になる、所が病の力は八てあるか、六てあるか、三てあるかそこは吾々の有限の力では更に解らぬことてあるから、頗る困ることとなる、故に此處になると、全く信仰の活眼を開ひて見るの外はないのてある、或人が跛になつたので、之が癒るやうに不動尊に祈つて居ると聾になつた、益々祈禱して居ると今度は盲になつた、愈々精力の有らん限りを盡して、祈禱した所が驚くべし、此度は癲病に罹つた、信心者も玆處まて來ては、祈禱する力も拔けて、不動明王に餘りと云へば情けないと不滿を訴えた、所が不動明王の仰には汝は罪障が深いから、今世は跛て、來世は聾て、其次の世が盲て、其次の世が癲病となるべき筈である、然るに信心の功德に依りて四世に受くべき罰を一世に受けさせたのだと云ふ昔話がある、是は火事見舞狀に「御全燒の趣なれども御怪我も無き由不幸中の幸と存候」と書くと同い流義の諦め方て、取るに足らぬことだ、祈禱と云ふものは、こんな馬鹿げた遁辭て、滿足の出來る筈のものてない、宗教の根本義は實驗てあるから、實驗した其處に價があるのてある

七四　護摩

多くの祈禱には護摩はつき物てある、然るに此護摩に就て或人はあれは波羅門教の法てあるから、迷信だなどと云ふが、護摩は梵語て此に譯せば焚燒てあるから、護摩を燒くと云ふては實は重複語てある、元來護摩は事火波羅門教の法て、彼等は梵天に供物を奉らんとしても、梵天は天上にあるから、地上に備へたものは其口に達しない、そこて此等の供物を燒いて煙となし、天上に達せしめて、梵天の口に入れや



護摩壇の圖

うとして行ふた法である、密教は其儘此作法を襲ふて其理論を改め、焚燒とは煩惱妄想を燒き滅すの意て、火を燒く爐の口と、歸依する本尊の口と、修法する行者の口とを三平等と觀ずるのである、此事を忘れて只火を燒く丈ては事火波羅門の法と何の異ることがない、故に太日經には「眞言行者但世諦の護摩を作して、此中の密意を解せざれば則ち韋陀の火祀と豈に相濫せざらんや」と誡めてある、夫を只儀式作法が同いからとて、迷信呼りをするのは間違だ、高麗燒は今は抹茶茶碗として賞翫されて居るが、作つた高麗人は飯碗に使用したものだ、護摩は波羅門の法だと云ふ連中は、高麗燒は高麗人が飯碗に作つたと云ふ事丈を知つて、今は抹茶の碗として、賞翫せられて居ると云ふことを、知らぬ連中である

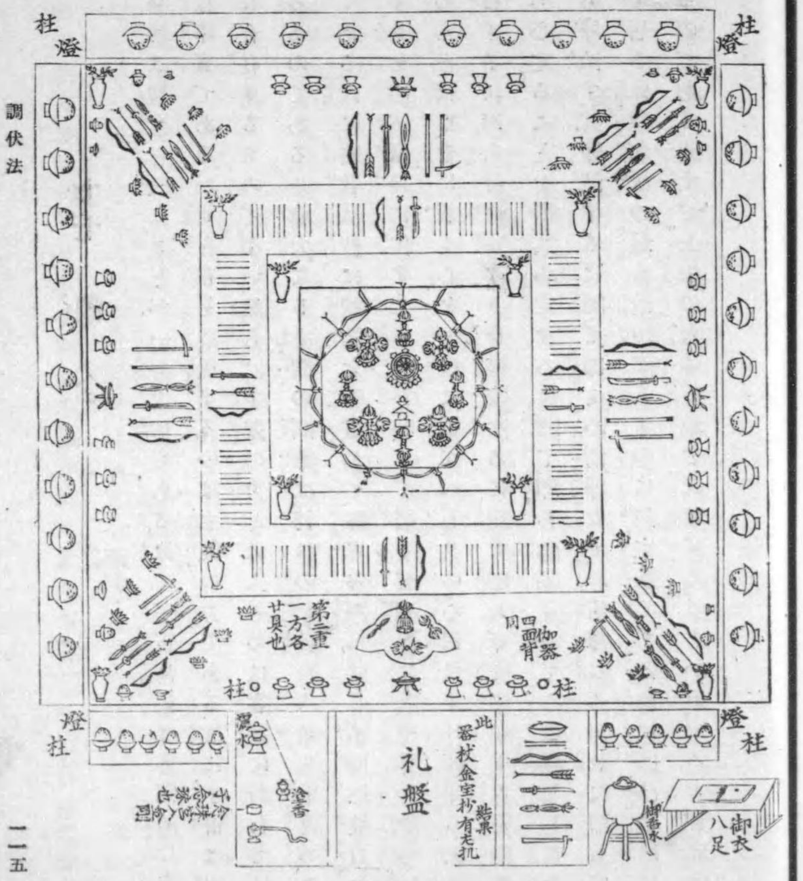
七五　諸尊法

弘法大師の語に「機根萬差なれば針灸千殊あり」とあるが、人は面の異るか如く心も異つて居るから、之を救はんとする佛や菩薩、扨ては明王、天部、其數が無數あるべき筈である、根本から云へば、宗教は箇人性のものだから、世界に十五億の人口がある事とせば、十五億の神や佛がなくては、各人の滿足は出來ぬ譯だ、密教は此理に依て居るから、胎藏界曼荼羅の佛や、明王等の數許りても四百餘尊あるが、此外にも感得の尊像まて加ると、五百尊位はある、信ずる人の心に依りて佛や菩薩を案出するのであるから、年と共に其數は增す譯合てある、此處が他の宗教と其根底を異にする所である或人の說に、密教は佛や明王の數を整理したら、初入の人の信仰が一定してよからうとの事であつたが、是は丸て其譯を知らぬものである、現在我國には清涼藥として仁丹、ゼム、清快丸、清涼丸、カオール等幾種かの種類がある、一寸似たやうなものであるから、一種にしたらよからうと云ふたとて人は千差萬別て、買手があ

る以上は、之を整理して一種にすると云ふことは不可能であると、同いことてある

七六　調伏法

調伏の御祈禱と云ふことは、人を祈り殺す法であると信ぜられて居るが、調伏と云ふことは、惡心を調御して善心に飜させる意て、一名降伏とも云ふのてある、金剛頂經義決には、此法の存する理由を說て、諸佛菩薩此法を說くことは知者の爲めに說く、愚人の爲めにせず、然る所以は佛滅度の後、多く惡人ありて大勢力を恃んて邪道に順して正法を信ぜず、三寶住持の相を破し、諸の衆生をして涅槃の眼を失はしむ、悲哉愍むべし、此法を以て菩薩の心を治せよ、此法を行することは利益(一切衆生を)の爲めなるが故に、大功德あり、審に觀すべし、利なくして惡心を起し、衆生を損害すれば大重罪を犯べし、佛之を制したまう所なり、輙く作さしめす、」とあるので、明かてある、人を殺すと云ふことは惡事には相違ないが、國家としては死刑をも執行しなければならない、調伏法は俗に云ふ小の虫を殺して、大の虫を生すのてある、換言すれば自利の爲めに祈る法てなく、利他の爲めに修する祈禱てある法は隨分猛烈のとをやるので普通の人から見れば驚くのてある大體に就いては、こんな所て止めて、是から內容の部分々々に就て話さう



調伏法境圖

七七　觀念

修法は觀念と云ふことが一番大切である、扨て宇宙萬象は客觀的に存在することは事實であるが、此存在を認識するのは主觀の力である、故に宇宙は絶對に客觀的に存在するものでない、然らば主觀の力と云ふものは客觀に對しては實に偉大なるものである、此偉大なる主觀の訓練は、何れの宗教にも最も重要のこととせられてある、故に密教は特に觀念を尊重して、靜思の間に成る不可思議力を養ふのである、是を心三摩地に住する境界と呼んで居る、祕藏記に其境界を說て「行者悉地を求めんと欲は、當に須く心を一境に攝すべし、其の心調伏すれば即ち歡喜を生す、其歡喜するに即ち身輕安なり、身輕安なるに隨て即ち身安樂なり、心安樂なるに隨て即ち心定ることを得、其心定まるに隨て即ち念誦に於て心に疑なし、其念誦に隨て即ち罪滅す、其罪滅するに隨て即ち心清淨なり、心清淨なるが故に即ち成就を得」と說て居る、此觀念法の最も簡短なるものは阿字觀である、此法は己の前に阿字を觀ずるのである、此丈て上根の人は悉地を成就することが出來る、大日經疏に「最初の阿字は即ち是れ菩提心なり、此字を觀じて而も與に相應すれば即ち是れ毗盧遮那法身の體に同じき也」とあるは此意である、吾人が一だび觀念世界の人となれば、實に無礙自在の力を得るので、兩三年に流行した千里眼と云ふやうなことは勿論のこと、火も燒くこと能はず、水も溺すこと能はざる底の人となるのみならず、水輪觀をなせば一室皆水となり、月輪觀をなせば壁上に皎月は出づのである、與教大師の觀念を凝した時、室內に水が漾ふたとあるが、左もあるべきことである、甲斐慧林寺の和尙が、猛火焰々たる中に安坐して安禪必しも山水を須ゐず、心頭を滅却すれば火も又涼しと喝破したも此處である、而して此觀念法は五相成身觀、入我我入觀、正念誦、字輪觀、布字觀等であるから、以下兩三を紹介しよう

七八　入我々入

本尊は我身に入り、我本尊の身に入り、一體無二無別なりと觀ずるが故に、入我々入觀と名くるのである、此觀念法は本尊の身體と我身體との、彼此涉入關係から成立つものである、而して其方法は我胸中に阿字あり、變じて月輪となる、月輪の上の鑁

字あり、變じて法界塔婆となる、法界塔婆變じて大日如來となる、身相白色にして萬德莊嚴し、如來の頂上より光明を放つて十方世界を照破すと、觀して自身を以て先づ佛なりとの自覺を得せしめ、尋て壇上にも阿字あり變じて月輪となる……身相白色にして萬德莊嚴し、如來の頂上より光明を放つて十方世界を照破すと觀じて、自己と壇上の本尊と、無二無別の境界に入るのである、自己と壇上の本尊許りか佛ではない、一切衆生もまた佛たらしめねばならない、依て一切衆生の胸中にも阿字あり變じて月輪となる……身相白色にして萬德莊嚴し如來の頂上より光明を放つて十方世界を照破す、一切衆生は此理を知らずと雖、我が功德力と本尊の加持力と及び法界の增上力とに依て、一切衆生も成佛することを得て、我身と本尊と衆生との三は平等々々で、丁度明鏡の互に相映じ互に影を宿すが如くである、と觀想を疑するのである、世人は人格の尊嚴主張するが、自己か佛であると自覺し、更に進んで世界の人類が皆佛なりと達觀するの境界は實に愉絕快絕で、是ほど人格の尊嚴なる位はあるまい、此境界に遊ひ得るまで修行すれば、他人を猜忌嫉妬するなどと云ふこともなく、又惡人視するともない、淸淨に莊嚴せられて、佛菩薩に圍繞せられたる神聖の道場中に、我一人て此觀念を凝す時、若し己に微塵程の罪惡があつたならば、夫は五寸釘を腦天から打込まるるやうに感ずるものである、密敎家中に人格の高潔な人が出來るのは、抑も此等の觀念に依つて得たる賜である

七九　正念誦

語密を本尊と一致せしむるのか念誦である、念誦には種々あるが、己が眞心の聲で佛を贊嘆すれば、佛も微妙の法音で我を贊嘆し給ふのである、此功德に依て衆生も又佛の稱贊に預り、玆に於て我と佛と衆生との三平等に成達するのである、秘藏記に「將に念誦に就かんとする時は、三平等を觀す、」とは此事である、而して正念誦が修法中の最祕觀である、其法は數珠を兩手に懸けて胸の邊に當て、本尊の眞言を誦し、本尊の心月輪の上に眞言の字あり、右に旋て列り住す、我心月輪の上に眞言の字あり、亦復かくの如し、本尊の誦し給ふ眞言の字、本尊の御口より出て、我頂より入て心月輪の上に右に旋て列り住す、我誦する眞言の字、本尊の臍より入て心月輪の上に至て亦復此の如し、本尊と我と無二無別なり、我と本尊と共に誦する眞言の功德に

依りて、一切衆生の語業皆清淨々々にして無二一體なりと觀ずるのである、こんなやうに觀ずると自ら唱ふる眞言が自分許りで唱ふるが如き心地はしないで、百千萬人で、諸聲に眞言を誦するが如き偉觀を呈するので、自ら己が世界の主人公たるやうな感が生じ來るのである、古來の宗敎家が他の英雄豪傑よりは何となく偉大であるのは、此の如き觀念に養はれた結果であらう

八〇　字輪觀

本尊と身密(入我々入)語密(正念誦)の一致を觀ずる方法があれば、自ら意密の無二一體を觀ずるの方法がなくてはならぬ、此意密の一致を觀ずるを、字輪觀と云ふのである、字輪とは文字を心月輪心の上に布列するの意である、先づ我心中の月輪上に圖の如く𑖀𑖁𑖂𑖃𑖄の五字あり、𑖀字諸法本不生不可得なるが故に𑖁字自性言說不可得なるが故に𑖂字塵垢不可得なり、𑖃字塵垢不可得なるが故に、𑖄字因業不可得なるが故に、𑖀字等虛空不可得なるが故に、𑖁字因業不可得なり等と今度は逆に阿字本不生不可得まで觀じ、次にまた本尊の心月輪中に同じ文字ありと觀じ、而して本尊と行者と彼此渉入を觀ずるのである、此觀は諸法の實相を觀する意の鍛練であるから、仲々六ケ敷のである、心月輪の上に布字して觀想を凝すのが字輪觀と呼はるゝが、身體の全體に布字して其意

字輪觀の圖

義を觀ずる場合は、布字觀と呼はるゝのである

八一　五相成身觀

入我々入ても、正念誦ても、字輪觀ても、我と本尊と横平等に無二無別を觀ずるのであるが、此五相成身觀は堅差別の見地から、佛と無二無別を觀ずるのである、慈覺大師が顯敎に成佛と云ふことはあるが、成佛の規則作法は說かない、成佛の作法の完全なるものは、密敎の五相成身觀であると仰せられた、五相とは初に通達菩提心第二修菩提心第三成金剛心、此中に廣金剛と斂金剛とある、第四證金剛身、第五佛身圓滿である、通達菩提心とは自己の本性即ち菩提心を理論の上から覺る位であるが、

此自覺を事實上に證得するが、第二の修菩提心の位である、此二相は種子三形尊像佛身の成立から見れば、種子の位に當るのである、第三成金剛心、第四證金剛身は、本尊の三昧耶形の位で、三昧耶形か五股杵とすれば此五股杵が舒びて、大千世界を覆ふに至り、鬼畜人天草木國土も一物として其中に包まれざるなき境界を、廣金剛觀と稱し、此大千世界を覆ふた五股杵が漸く斂り來り少となりて、自身の量となるが斂金剛觀である、此兩觀に依りて自身が諸佛と融通無礙を證得するが即ち第四の證金剛身である、即ち我は佛なりとの自覺をして、宇宙大に遍滿せしめて是を再び自身と等しき量に復歸して、宇宙の諸物と我と一致し去るが此二相である、此の如くにして我と佛と一致せしめたる處が、即ち第五佛身圓滿である、之を人世に應用して說けば、人格の完成は、自覺と經驗に依るのであるが、自覺は先づ一般理法を了解(第一相に當る)して、次に眞の自己を覺る(第二相に當る)のである、此自覺に立ちて廣い經驗を積み(第三相に當る)其廣い經驗を我物とする(第四相に當る)に至つて、始て圓滿なる人(第五相に當る)となるのである

五相成身　種三尊　人格

一通達菩提心　我本性を觀る
二修菩提心　我本性を證す　種字の位…自覺
三成金剛心　本尊の三形を觀す
(い)廣金剛　宇宙大ならしむ
(ろ)斂金剛　我身の量に斂む　三形の位…經驗
四證金剛身　本尊を我身に入る
五佛身圓滿　佛の全身を圓滿す　尊像の位…人格完成

八二　六種供養

修法中に佛に供する品が普通の場合には六種ある、即ち閼伽、塗香、華鬘、燒香、飯食、燈明である、閼伽とは梵語で水のことにて佛を供養する時に、前には身を洗ふに用ひ後には食後の口を漱ぐに用ふ、塗香とは馥郁たる香水を身に塗ること、華鬘とは美麗の花環を首に懸くること、燒香とは名香を燒くこと、飯食とは山海の珍味を饗應すること、燈明とは華々敷燈を燃すことである、客を招いて湯殿には香湯を沸し、床

には名香を燒き、築山の彼方には燈籠を點じ以て山海の珍味を饗應すれば至れり盡せりと我國ではなすが、印度では香水を身に塗らしめ、首には香の好き花環を懸けしむると云へば、西洋人が夜會に一輪の薔薇花をボッケットに挿すなぞよりは、餘程發達したものである、事物の方から云へば此の樣であるが、密敎で此の如く六種を供するのは、即ち六波羅蜜の標示であるとして居る、闍伽は水で之を檀波羅蜜に配するのである、水の恩惠で萬物は生長すると云ふ邊の意を約したものだ、塗香は戒波羅蜜に配する、香を身に塗りて清涼を覺ゆるは、丁度戒を持つて清淨となるが如きものである、華鬘を忍辱波羅蜜に配するは、花は柔軟のものであるからである、燒香を精進波羅蜜に配するは、薪に火を點ずれば盡るまでは燃て息まざるに喩へたのである、飯食を禪定波羅蜜とするのは、法華經に法喜禪悅食とあつて、禪定は身を長養するから、飯食に當て欽めたのである、座禪すれば肥滿すると云ふも、此に能く當つて居る、燈明を般若波羅蜜に配するは、智慧の光明と云ふからである、故に事物から云へば六種を佛に供するのであるが、此六種供養が即ち六度萬行となるのである、六種供養を六度萬行と觀ずるは、第二重の分齊で、此六種供養は即ち六大の所成なれば、是を法身大日如來の色相と觀ずるは、第三重の分齊である、故に此一華一香の外に遍法界の花あるにあらず、一花一香の供養は即ち遍法界の供養なりと觀ぜば、是れ第四重の最極の秘觀となるのである、此の如く四重に秘觀すれば一遍の六種供養は、遍法界の大供養となりて、大悉地を成就するのである

八三　種字

密敎には佛樣の成立するに第一種字があつて、此種字が變じて三昧耶形となり、三昧耶形變じて尊像となるとして居る種字とか三昧耶形とか印契とか云ふことは、他の宗敎に例のないことである、以下少し此方面に就て話さう

種字は經軌の中には種子と書いてある、萬法を出生する種子の字だから、後には種字と書くことになつた、佛菩薩明王天等には一尊毎に必ず種字と云ふものがある、之に通別の差があつて、別なる時は不動明王は𑖀、大日如來は𑖨、阿彌陀如來は𑖮と云ふが如きものであるが、通種字は佛部が𑖨字蓮華部が𑖮字金剛部が𑖀字である、此外にも諸天の通種字は𑖨字、諸明王の通種字は𑖀字等のとがある、此種字は其佛

の本誓に依て定めたのもあれば、名稱の頭字を、以て宛てたのもある、我國て云へば、房太郎を單に房と云ふが如きものてある、單に房と云へば僅に一字に過ぎないが、此房なる一字を廣義に解すれば、房太郎の身體、性格、其所有財產の全部が含まれて居る國と云ふ字には國王、國民、國土、國史の全部が含まれて居るから、之を細則すれば幾萬億の物件となるのてある、**𑖀**字が大日如來の種字て、法界の體性と云ふも同い理論に過ぎぬのてある

八四　眞言

密教の佛菩薩等には必ず眞言がある、眞言は陀羅尼又は密咒或は單に咒とも云ふのてある、眞言は其佛、菩薩乃至明王、天等の本誓本願を梵語て顯すのが普通てあるが、其外に結界、加持等の意を梵語て顯したものもある、而して眞言の一句の意味をなして居るのを句輪の眞言と云へ、一字づゝて意味をなして居るのを、字輪の眞言と云ふて居る、胎藏界大日如來の阿(地)尾(水)羅(火)吽(風)欠(空)は字輪の眞言て、金剛界大日如來の縛日羅(金剛)駄都(界)鑁(種子)は句輪の眞言てある、又此眞言の中て諸佛菩薩等は其佛の本誓或は種字、又は名號等を眞言としたものは、其意味が明瞭せられて居るが加持に用ゆる眞言て一寸とも意味の解らぬものもある、是は吠陀時代の遺物てあらう、東京の小兒等が風を招くに「風吹けと吹なトウトの山て云云」と騷ぐのてあるが、其意味が殆んど解らないと同いことてある、併し解かる解らぬに拘らず、此眞言は即ち咒文てあるから、一種不可思議の靈力を有するものとして取扱はれて居る、故に諸經の中に一遍唱ふれば其身を守り、二遍唱ふれば其眷族を守り、三遍唱ふれば、其國土を守る等の語は山ほど繰返されて居る

八五　印契

印契を結ぶと云ふことは密教の特色てあつて、顯教には全くないことてあるが、今ては日蓮宗は申すに及ばず、淨土宗も結べば、禪宗も少しは結ぶやうてある、元來印契を結ぶは、恰も證文を書いて印形を押すと同いことて、印を結ぶのて始め其意義が確となるのてある故に兩掌十指は實に小なるものと雖も此十指にて無量無邊の意義を顯し、之を大宇宙と觀ずるのてある、即ち十本の指の屈伸て、大は地震洪水

等の天變地異より、小は人事の禮節送迎の境界を結び顯して、自身は其境界中の人と化し去るのである、換言すれば大海の印を結べば、渺々たる海中の人となり、火炎の印を結べば焰々たる火中に包まるゝと觀ずるのである、顯教でも芥子中に須彌山を入ると云ふことを說くが、此概念を實際に自得することは出來ない、然るに密教では之を指頭に顯し來つて觀ずるから、其概念は直に獲得することが出來る、十本の指は五寸に滿たなくつても之を大宇宙と觀じ、無量無邊の神變自在を顯す境界は、到底修せざる人には想像の出來るものでない、小なる我が變じて宇宙大の我となるの境界は「天と地を團子に丸めて手に載せて、ぐつと呑めども喉に障らず」と云ふやうな趣がある、而して此印契の觀念に就て、自分が自身のことを觀ずる場合もあれば、又は他人のことを觀ずる場合もある、斯く云へば或は自分のことを觀ずる場合は、自分の觀念を凝す一種の手段として用ふるからよいが、他人のことを觀ずる時に此の如きことをしたとて、客觀的には何等の効果があるまいとの說もあらう、併し、夫は程度の問題であるので、必しも客觀的に効果がないとは云はれない、茲に一の例を擧げて見よう、我國の元勳であつた伊藤公爵は不幸にして「ハルビン

て安重根のピストルに打たれて薨ぜられた、伊藤公の死と云ふことは、日本の政府に大變動を起した許りでなく、世界の東洋外交上に變動を起して居る、此日本政府、世界外交界の變動と云ふことは、直に世界の貿易とか軍事とか云ふ客觀的事實の上に、或る程度の變化を來して居る、實に伊藤公の死は世界の變動に或る程度の關係を有つて居る、此世界的變動の源因は如何、即ちピストルの一丸に過ぎぬのである、其ピストルの一丸は如何して出てたかと云へば、安重根の人指指の五分屈るか屈らぬかの問題に歸着するのである、安重根の人指指の五分の屈伸が、世界的問題である、此理で考て見れば吾々の十本の指の屈伸が、事情に依りでは必しも世界的變動に關係ないとは云へまい、密教が印契を結ぶ指の屈伸を非常に八ケ間敷云ふのも、源は此處に存するのである

八六　理印と形印、

印契を結ぶ理論に就て二種ある、一は形の上から見るので、一つは理の上から說くのである、茲に三股杵の印がある、此印は三本の指が三股杵の形をなして居るから

三股印と名けたのてある、然るに無所不至印などは中指以下の六本組合せたは六大體大て、大指と食指と四本合せた所が四曼相大て前の處に穴が三つとなる所が三密用大てある、即ち此一印に體相用の三大を結び顯すのてある、體相用の三大は宇宙萬象に皆具足して居るのてあるから、此印は一切處に遍する、即ち至らざる所が無いから、無所不至印と名けたのてある、是は即ち理印てある、此等の理を說明する爲めに、古來兩手及指に種々の配當をして居るが、其一二を記すれば

大虛空藏印

無至不至印

無所不至印

三股印

五股印

輪印

右	慧、佛界金剛界修生	大指	空　禪　大日如來
		頭指	風　進　阿閦如來
		中指	火　忍　寶生如來
		無明指	水　戒　彌陀如來
左	定　衆生界胎藏界本有	小指	地　慧　釋迦如來
		無名指	水　方　彌陀如來
		中指	火　願　寶生如來
		頭指	風　力　阿閦如來
		大指	空　智　大日如來
		小指	地　禪　釋迦如來

こんな譯だから小指一本を屈すれば、大地震が搖ることともなれば、中指一本振つた爲めに世界が丸燒になるかも知れない

八七　密教より見たる各宗の合掌

密教の眼から各宗の合掌を見ると、頗る興味ある問題てある、眞言宗の合掌は金剛合掌てある、金剛合掌は左右兩指頭が互に交叉して居る、是は右の佛界の手と左の衆生界の手が互に因となり果となる形て、衆生と佛と不二一體の形てある、然るに天台宗は蓮花合掌

金剛合掌

てある、蓮花合掌と金剛合掌とを比較すれば、金剛合掌は、金剛界で、蓮華合掌は胎藏界であるから、眞言宗は金剛界系で台密は胎藏界系と云ふことになる、然して禪宗の合掌は堅實心合掌である、堅實心とは掌と掌とを堅く合せることで、此掌と掌とを堅く合せる所が、即ち內觀に全勢力を注ぐ直指人心見性成佛の禪宗の敎に尤も能く契ふて居る、淨土門は合掌は一定しないが淨土宗では、大指は金剛合掌で頭指以下四指を虛心合掌をするとがある、元來金剛合掌と虛心合掌とを双へて配當すれば、金剛合掌は金剛界の智で、虛心合掌は胎藏界の理である、虛心とは堅實心の反對で掌の中を空虛にするの意である、此空虛中に萬法を藏する形で、衆生が佛性を藏する形ともなる、堅實心が衆生と佛の間に一髮を入れぬ程に堅く合せるのに、虛心は佛と衆生とは其間に階段があるとの意である、阿彌陀如來の大悲の力で吾々は救はるゝのである、淨土敎は虛心合掌でなくてはならない淨土眞宗は唯一の虛心合掌である、阿彌陀如來の蓮華三昧の合掌である、日蓮宗は蓮華合掌である、日蓮上人は天台宗其儘を繼がれた、天台と同じく法華

堅實心合掌

虛心合掌

淨土宗合掌

經を根本とするからである、日蓮上人は申すまでもなく源空上人でも親鸞上人、道元禪師でも皆比叡山で台密を學んだものである合掌の理論位は心得て居らるゝ筈であるから此等のことを研究したら興味があらう

八八　淨土宗の彌陀と眞宗の彌陀

淨土宗の本尊阿彌陀如來は、多く定印を結んで居らるゝに、眞宗で本尊とする阿彌陀如來は、定印を引離して說法印を結んで居らるゝ、或る滑稽人は彌陀の光も金次第と云ふから、眞宗の阿彌陀如來は錢から光を放つて居る印を結んで居らるゝと云ふたが、あの大指と頭指を圓形にするのは、錢の形ではなく輪の形である、輪は印度國王の最尊の寶器で、日本で云へば三種の神器のやうなものであるから、國王の德を輪に喩て國王を別つに、金輪王、銀輪王、鐵輪王、銅輪王などと云ふて居る、輪は物を摧く物であるから、如來の說法が衆生の迷暗を破るに喩て、如來の說法を法輪を轉ずると云ふのである、阿彌陀如來の定印は、兩手各一輪印を造りて之を膝上に重ね

たるものである、是は阿彌陀如來が法身の德に位したる相である、然るに此法身の阿彌陀如來が、報身の化導門に下つて活動を起さるゝときは、此定印を引離して二の輪印となし、左の衆生界の手は上求菩提の相を顯して、指頭を上に向け、右の佛界の手は、下化衆生の相を表して、指頭を下に向けらるゝのである、之を常には彌陀如來の轉法輪相、若くは說法の相と稱して居る、密敎の眼から見れば、淨土宗の法身の阿彌陀如來を本尊とし、淨土眞宗が報身の阿彌陀如來を本尊としたは、深き趣のあるやうに思ふ

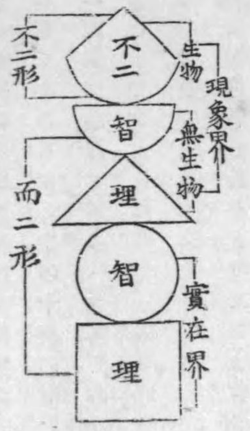
八九　三昧耶形

三昧耶は梵語で之を本誓と譯するのである、三昧耶形とは諸佛菩薩か其本誓を形の上に顯したるもので、大日如來は五輪塔、不動明王は降魔の劍、地藏菩薩は寶を雨らす寶珠、辯才天は妙音を發する琵琶と云ふが如きものである、此理を擴めて行けば、農夫の三昧耶形は鍬、文士は筆、藝者は三味線と云ふことになる、此三昧耶形にも通別の二種があつて、佛部は塔、蓮華部は蓮華、金剛部は金剛杵、寶部は寶珠、羯磨部は羯磨と云ふことになつて居る、是から此等の三昧耶形の象徵主義を少し御紹介に及ばう

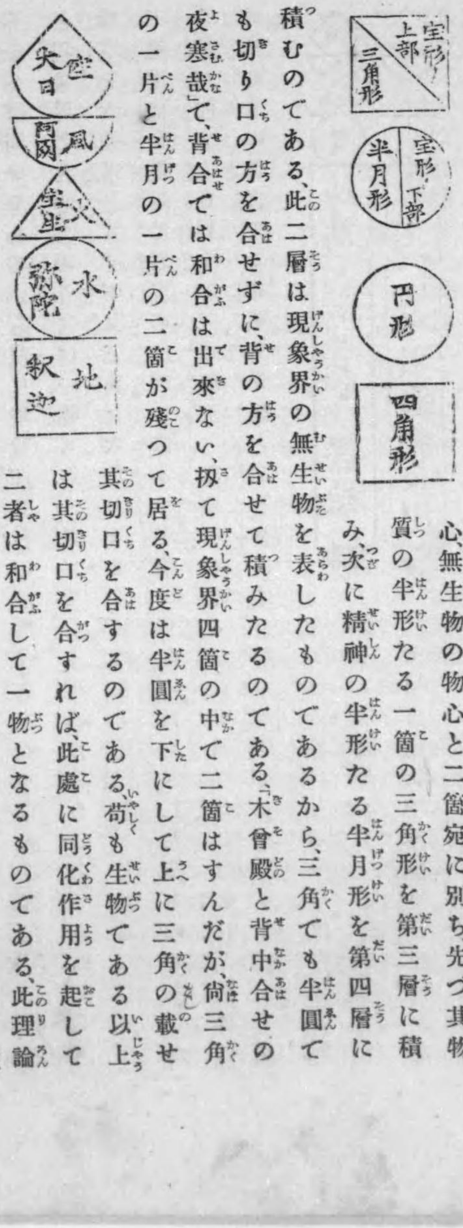
九〇　五輪塔の組織

大日如來の三昧耶形は五輪塔である、五輪塔とは即ち塔婆の頭に附けてある五箇の形である、日本各宗の十萬の僧侶は、塔婆て飯を食ふて居るのであるから、此五輪の理論は心得て居るべき筈であるのに、とんと心得て居らぬが不思議だ、いや不思議ではない大日如來の三昧耶形の理論は、秘密敎の最極深秘の一で矢張說くべきものでない、閑話休題五輪塔とは、最上層は寶珠形、次は半圓形、次は三角形、次は圓形、次は四角形である、下の二つは本體即ち實在界の形上の三つは變體即ち現象界の形である、抑も我密敎では前から幾度も繰返したが、金剛界と胎藏界の兩界を立つるので、此兩界を物心二元に配するときは金剛界は精神、胎藏界は物質に當て嵌るのである、そこで物と云ふものは質礙有體と云ふて凝のあるものであるから、之を形に顯すときは最も回轉し難い、四角形を最も適當とするのである、心と云は和語

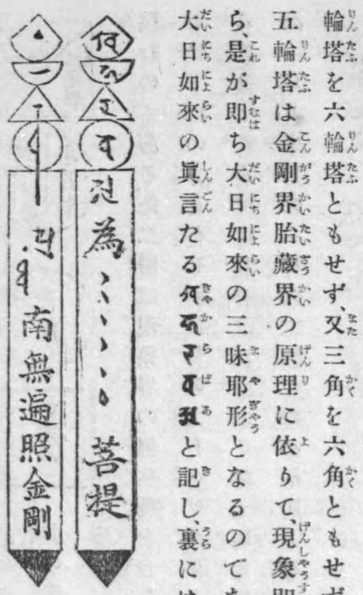
てはころ〳〵の約まりたるものだとの說もある位で、最も變化に富んだものであるから、四角の正反對のころ〳〵と轉ふ圓形とするのである、胎藏界曼荼羅の十三大院が四角に區劃されて居るに、金剛界曼荼羅の五解脫輪は、圓形なるも此意に外ならぬのである、而して金剛界は天曼荼羅で胎藏界は地曼荼羅である故に、五輪塔を組立るには、先づ地曼荼羅の胎藏界の本形即ち物質の形たる四角形を最下層に置きて、其上に天曼荼羅なる金剛界の本形即ち精神の形たる圓形を第二層に積むのである、此二は實在界即ち悟界の形である、然るに現象界即ち迷界と云ふものは實在界其儘の發現ではあるが、現象界は實在界の常住不變に比すれば變幻窮りなきもので、月滿つれば缺け、花咲けば散るのである、故に起信論などでは之を生滅門と稱して居る、而して吾人の智識と云ふものは有限のもので、實在界其儘を認識することは出來ず、絕對の實在界を相對界に落在せしめて始めて認識し得るものである、故に實在界の形を變化せしめ



たものが、現象界の形となるのである、茲を以て現象界の形を表する時は、實在界の本形たる四角形は、角から角に切りて二箇の三角形となし、圓形は折半して二箇の半圓形となし、本形の二箇を變形の四箇とするのである、而して此四箇を生物の物心無生物の物心と二箇宛に別ち、先づ其物質の半形たる一箇の三角形を第三層に積み、次に精神の半形たる半月形を第四層に積むのである、此二層は現象界の無生物を表したものであるから、三角でも半圓でも切り口の方を合せずに、背の方を合せて積みたるのである、「木曾殿と背中合せの夜寒哉」で、背合では和合は出來ない、扨て現象界四箇の中で二箇はすんだが、尙三角の一片と半月の一片の二箇が殘つて居る、今度は半圓を下にして上に三角の載せ其切口を合するのである、苟も生物である以上は其切口を合すれば、此處に同化作用を起して二者は和合して一物となるものである、此理論を應用して三角と半月とを合せて一形となし、是を最上層に載せたるのである、故



に下層の二箇の形と上層の三箇の形とは形の上に於ては異つて居るが、其分量から云へば同いてあるから、茲に現象即實在の理は成立するのである、實在界の物心と現象界の物心との外には一物もなく、是にて全く理論は盡きるのであるから、五輪塔を六輪塔ともせず、寶珠形を楕圓ともせざるのである、五輪塔は金剛界胎藏界の原理に依りて、現象即實在の旨を顯したるものであるから、是が即ち大日如來の三昧耶形となるのである、故に此五輪塔には表に胎藏界の大日如來の眞言たる𑖀𑖽𑖨𑖿𑖮𑖿𑖟𑖽𑖨𑖿と記し、裏には金剛界大日如來の眞言の𑖀の一字を五輪全體に互るやうに書きて、金胎不二の趣を示すのである、尚此外にも塔婆に就いて種々の説明がある然るに密教以外の各宗では此理論を知らぬものだから、塔婆の五輪に日蓮宗では南無妙法蓮華經と書き、禪宗では大圓鏡智なぞと書き、淨土宗では阿彌陀如來だのと書く、五輪塔に若し心があつたならば嘸々泣くてあらう



九一　五輪塔と三大

くどいやうだが此五輪塔に就て、六大體大、四曼相大、三密用大に就て少しく話して置く必要がある、五輪塔は前に云ふた如く五箇であるから、是が即ち空、風、火、水、地の五大である、此五大は物質である、而して識大は精神で此五大に遍滿して居るものであるから別に識大の形と云ふものゝ必用はない、なぜ空大は寶珠形で水大が圓形であるかと云ふことは、六大體大の所で説いて置いた、次に四曼相大に當欲れば原形から云へば四角一、圓形一、三角二、半圓二で其相狀が四種に過ぎぬ、是が四曼相大に配せらるゝのである、次に三密用大とに分たば、四角と三角は物であるから身密の作用、圓形と半圓は心であるから、意密の作用寶珠形は物心和合形であるから非物非心の語密に當るとして居る、此等に就て細論すると面白いこともあるが餘り管々敷から省いて置く

九二　身體上の五輪

昔の小説には「五輪五體の具足した此身」と云ふやうな語があるが、此五輪と云ふこ

とは、前に說いた五輪塔の五輪である、密敎では吾人の身體は、大日如來の五輪塔と同い形であるとして居る、其說に依ると、吾人が趺座すれば腰から下が四角形、腹が圓形、胸が三角形、面が半圓形、頂が寶形である、即ち之を足輪、腹輪、胸輪、面輪、頂輪の五輪と云ふのである、密敎では之を支分上の曼荼羅と云ふて、之に細い深祕の理論を附して、實に大切のこととして居る、併し茲ではそんなことまで說く必要はない、人間の面輪と頂輪は、他の三輪に比すれば頗る少いのであるから、五輪塔の上の二層の小いのは、之を支分上形（人間に當嵌めたる形）と云ふて居る、石塔は人間に象つて立てるものであるから、此支分上形の五輪塔を立つるのが多い、西洋では人間の頂の最中が窿起して居る、所謂銀杏形を以て腦髓の構造の形の最も良好なるものとして居るが、支分上の五輪から見れば、頭の頂天が尖つて居るのが、能く理論に契ふて居る、密敎でも仲々心理狀態に就ては、微細のことまで研究したものである

九三　如意寶珠

風のまに〳〵枝が動くとか、波のまに〳〵船が搖るとか云ふ語があるが此まにには梵語の摩尼で譯すれば、如意寶珠と云ふことになる、風の意のまゝに枝が動き波の意の如く、船が搖ぐを意味するのである、如意寶珠とは前に說いた、五輪塔の最上層にある寶珠形のことである、元來寶珠と云ふものは、萬寶を雨らすものとして信ぜられて居る、意の欲するが如く寶を雨すから、之を如意寶珠と云ふのであるか、何故に四角や圓形か萬寶を雨らさずして、寶珠形が萬寶を雨すかと云ふに、寶珠形は前に云ふた如く、金剛界の半形と胎藏界の半形との和合形である、密敎は此和合を種種に配釋して理論を組立てゝ居る、兎に角和合の上から出來るものは無盡藏である、天地和合して草木茂り、男女和合して子孫繁榮するのである、鐘と撞木と合へば鳴る鐘の音は何萬返撞きたりとて盡きるものでない、百年も千年も同い音がする、聖武天皇の時に鑄造した大佛の洪鐘は、今も尙巨聲を發して居る、併し蓄音機に吹き込たる聲は長くても二十五年すら繼かない、一は鐘と撞木との和合から出る聲

てあるのに、一は聲を蓄て置くに過ぎぬからである、如意寶珠は金剛界と胎藏界の和合形であるから、之を拜み其理論を體得すれば萬寶立どころに生ずる譯である、密敎の最極深祕の大法と云ふのは此如意寶珠和合の意に依りて修するのである、お互が御寶を得んと思はゞ和合するのが肝心である

九四　金剛杵

金剛杵と稱する中には一股なるを獨股杵と稱し三股なるを三股杵と稱し、寶珠形なるを寶杵と稱するが如く、五股杵九股杵、二股杵、四股杵、蓮華杵、塔杵、羯磨杵も皆其獨股杵の如きは明に印度の武器である、併し此武器が密敎中に取入れられて以來、其形も大に變化し來つたと同時に其使用する意味は大に高尚に進んで、三股杵は前に說いた佛部蓮華部金剛部の三部又は自身と佛と衆生との三

獨股

形に依つて名けたものである、金剛杵とは自體堅固にして、他を摧破する用あるもので、三股杵

三股西藏式

平等を標示したもの、五股杵は佛部、金剛部、蓮華部、寶部、羯磨部の五部又は五智を標示したものとして、神聖物として取扱はれて居る、故に此金剛杵に有ゆる理論を附して居るが、其一例を擧ぐれば、乳味鈔に「夫れ五股とは即ち兩部理智の功德を表す、謂く上方は金剛界修生出纒の三十七智、中央四佛智を表す、四方四股の上に各々爪あり、四股の股は法界體性智なり、四方の四股は四佛(四佛)不離の義を顯示せしめんが爲めに、四股波羅蜜菩薩を表す、定(四波羅蜜菩薩)慧、四佛(横に之を鐫む)是れ內外の八供養を表す、四の正方に於て各々一の竪筋あり、四攝の菩薩を表す、其把る所に於て上下八葉の蓮花、二八十六葉を成す是れ十六天菩薩を表す、是れを出纒の三十七尊と爲す、此三十七智に塵數微塵數の尊を攝す、是即ち金剛界修生の曼荼羅なり、(已上上方)(下方は則ち胎藏界の三十七智なり、此れに又十九執金剛乃至微塵數の諸尊を攝す、之を胎藏理界の曼荼羅と言ふなり、若し此理を覺知せざれば輒ち有れども亡きが如し、何ぞ常流の凡夫に異ならん」とあり、弘法大師が五股杵を握り居るも、灌頂の時受者に

五股杵

祕密物として是を授くるも、皆此の如くの教理があるからである

九五　蓮華

日本の理想花は櫻で、西洋の理想花は薔薇花で、支那は牡丹、印度は蓮花である、印度人が蓮花を尊重することは驚くべき程であるが、密教では此蓮華には清淨、莊嚴、能藏の三德あるとして居る清淨とは蓮が汚泥の中より出て丶、無垢の花を開くこと、莊嚴とは此花は萬花の王なれば、萬德莊嚴の花なるが故、能藏とは蓮花は諸德を含藏するを云ふ、而して大日經疏には、此花に胎藏界曼荼羅を具有すとの說がある、其說には華臺は大日如來にして、華實は四佛、四菩薩に當り、鬚蘂は執金剛即ち第一重の內眷屬、花瓣は即ち觀音菩薩、文殊菩薩等の第二重の大眷屬にして、蕚莖は諸天諸神の第三重の外眷屬としてある、即ち蓮華の一に胎藏界四重曼荼羅が輪圓具足して居るとの說てある、是を常に蓮華一本の曼荼羅と稱して深祕曼荼羅の一として居る、こんな風に配釋して觀念すれば、一本の蓮華でも其功德は實に廣大なるものとなる

九六　機根

先生は如何に大博士であつても、生徒が小學校生徒なれば小學校生徒丈の話をせぬと解らぬと同じやうに、宗教を說くにも其聞き手を第一調査せねばならぬ、是を佛教では機根調べと云ふて八ヶ間敷いのである、密教の機根は最上乘者則ち最も高尙な智識を有つたものを、正しき相手とするのである、併しそれでは所謂馬鹿八分の世の中の衆生を救ふことが出來ぬから、密教に緣を結ぶ丈の結緣機も矢張密教の機根とするのである、古來の分類法に依らば

一　迂回機―顯教の機

二　漸次機―顯教より密教に入りたる機なれども、密教の修行に堪えざるもの

三　直往機―結緣機―未來に成佛する機

直往機―正機―漸機　修行して漸次に進む機

直往機―正機―超機・階級を超越して進む機

直往機―正機―頓機　發心すると同時に覺を開く機

として居る、迂回漸次の二機は密教の機根でないから、今の問題でないが、直往機中の結縁機が、密教の結縁灌頂を受くる機根で、漸機超機が受明灌頂を受けて修行する機、頓機は即ち傳法灌頂を受けて、大阿闍梨となる機根である

九七　修行

覺を開う、佛に成らうとの志を發すのが即ち發心である、顯教の方では發心してから五十二位の階級を、次第昇進に修行することになつて居るが、密教は發心すれば直に佛になる機根を以て相手とするのだから、修行の位を立つるも、自ら別で、三句五轉と云ふも、平等海中の差別に過ぎぬのである、三句とは菩提心爲因、大悲爲根、方便爲究竟で、菩提心を發し、大悲の萬行を修行して究竟の大覺位に登るのである、五轉とは發心、修行、菩提、涅槃、方便、究竟で、發心とは佛に成らうとの意を發すこと、修行とは三密瑜伽の修行を修すると、菩提とは修行に依て果位を得る位、涅槃とは其果位の眞實體を知る位、究竟とは此等の諸位圓滿せる位を云ふ、されど此處は無淺深の上の淺深なれば此五轉は即ち如來の功德に過ぎざるのである、故に此五轉は即

ち五佛の內證三昧とするので、之を圖て示さば

三句　五轉　五佛

菩提心爲因—發心—東方阿閦如來
　　修行—南方寶生如來
大悲爲根—菩提—西方阿彌陀如來
　　涅槃—北方釋迦如來
方便爲究竟—究竟—中央大日如來

併し是は東因發心と云ふて、發心して後に修行する機根に就て云ふたのであるが發心したと同時に佛となる人に就て云へば、中因發心とて中央大日如來の位で發心するのである、而して實際修行の階級は、五種三昧耶とて五段に分つて居る、五種三昧耶とは第一は初見三昧耶で、遙に曼荼羅を見る位、即ち單に佛菩薩を歸依し、禮拜供養する位である、第二は入覲三昧耶で、秘密壇場の中に入つて佛と結縁する位で、今の結縁灌頂と稱するは、此位に當るのである、第三は具壇三昧耶で、佛の印や眞言を授かり得る位で、今の受明灌頂は之に當るのである、第四は傳敎三昧耶で、此が

修行成滿の位で、今の傳法灌頂か之に當るのである、第五は秘密三昧耶で、以心傳心に正法を持續する位で、此位になると全く大阿闍梨となるから、人の師となるは勿論萬事に自在を得て、新教新說を唱道し得るのである、藝術家が古人の型々と、型に囚はる中は眞の藝術は出來ない、自在に腕を振ふて、而して夫が自然に型に契ふやうになつて、始めて藝術の眞意義が發見せらるゝのである

九八　灌頂

灌頂とは讀んで字の如く、頂に水を灌ぐことである、頂に水を灌ぐ丈では、耶蘇教の洗禮と大差はないこととなるが、其意味は大に異るのである、密教は屢々云ふ如く、世間相常住であつて、世間で行ふ俗法を直に己の藥籠中のものとして取扱ふのである、元來灌頂の作法は印度國王の即位式の法で、大日經疏の說に依ると、印度國王即位式には、四大海の水を汲んで四寶の瓶に入れ、象牙より太子の頂に灌いだとのことである、密教は五智の瓶水を大阿闍梨が、其弟子の頂に灌ぎて、密法を相續せしむるのである、皇太子即位の式を行へば、即日政令を天下に施くことが出來ると同じく、密教で傳法灌頂を受くれば、直に佛と同位置に登るのである、而して此灌頂に數種あるが、常には結緣灌頂、受明灌頂、傳法灌頂の三種と分つて居る、結緣灌頂とは單に佛と緣を結ぶのみで、世間に云ふたならば勳六等以上の資格があつたので、即位式に列したと云ふ位なものである、受明灌頂となると一尊法を受くることが出來るのであるから、部分の代理權を得るので、丁度大臣とか大將とかに任ぜられたやうなものである、傳法灌頂となると、先に法を授けた大阿闍梨が、受者を佛と同等に扱ふて、受者に供養を捧ぐるのであるから、皇太子が即位式を行ふと同一である

九九　五戒十善戒

密教も各宗と同いことに、戒法は持つべきである、他の佛教では五戒と云へば不殺生戒、不偷盜戒、不邪婬戒、不妄語戒、不飲酒戒であるが、密教では此不飯酒戒の代りに、不邪見戒を加えて居る、是が大に他宗と見地の異る所である、此五戒を開いたのが十善戒で、其關係を圖表すれば

三業　五戒　十善戒

- 身業
  - 不殺生戒—不殺生戒
  - 不偷盗戒—不偷盗戒
  - 不邪婬戒—不邪婬戒
- 口業—不妄語戒
  - 不妄語戒
  - 不綺語戒
  - 不惡口戒
  - 不兩舌戒
- 意業—不邪見戒
  - 不慳貪戒
  - 不瞋恚戒
  - 不邪見戒

と不殺生戒とは慈悲の心に住して、他の生命を奪はぬことて、此心を擴むれば孔子様が「斧鉞時を以て山林に入らず」と仰せられたやうに、萬物に同情心が出來るのてある、近頃の動物愛護會など云ふものも、此不殺生戒の精神の發動てある、不偷盗戒とは他の所有を奪はぬことて、竊盗强盗は其大なるものてあるが、「朝顔に釣瓶採られて貰ひ水」と云ふ床しい心も此戒の他の所有を奪はぬと云ふ心から出るのてある、不邪婬戒とは夫婦間の正しき交の外濫り間敷ことをせぬことて苟も夫婦の愛を妨ぐるやうなことは禁物てある、不妄語戒とは嘘を吐かぬことて、不綺語戒とは物を仰々敷云はぬことて、お世辭も度を過くれば即ち綺語となるのてある、不惡口戒は人を罵詈せぬことて、不兩舌戒とは二枚舌を使はぬことてある、不慳貪戒とは己のものは慳みて與えず、人のものは貪り取らんとする欲を發さぬこと、不瞋恚戒とは憤怒せぬことて、怒ると云ふは修養の足らぬ證據てある、不邪見戒とは間違つた考をせぬこと、即ち時代精神に背反する信仰の如きも、此邪見の一種てある、此三戒は意の上のことて、貪瞋痴三毒の煩惱てある

一〇〇　三密雙修

吾人の身體の作用は、三つに分類することが出來る、即ち身體の作用、言語の作用、意の作用て、之を密教ては三密と云ふて居る、此三の作用は自然の約束て、互に相反せざらしむるべき筈のものてある、水を呑まんとする時に、人に水を命ぜぬか、若くは手が口に水を運ばないかすれば、如何に意ては水を呑みたくても、水を呑むことが出來ない、即ち此三者は自然の約束上、必ず一致調和せしむべきものてある、世の中の善惡の標準は、此三作用を相和合せしむるか若くは反對せしむるかて分るゝのてある、嘘を吐くと云ふことは言語と意志と相反した時に起る事て、惡事を働くと云ふことは、意にもないことを行ふに相違ない、若し惡事を働き乍ら此人は意て是

は善行と信して居つたならば、是は狂者てあるから罪を問ふことは出來ない、身體の作用と意の作用と背く場合に、茲に惡事は成立するのである、故に密敎を信ずるものは此身語意の三者を、一致和合せしめなければならぬ、此三者の一致が絶對完全に行はるるものが、即ち佛と云ふのてある、而て自らが一致せしめたならば、他人も又一致せしめねばならぬ、自分の三密も他人の三密と一致して、平等々々となつたならば、我も他も佛と同いことになるから、此所を指して心佛衆生是三無差別の境界と稱するのてある、是が眞言行者の第一に勤むべき務てある、百話を讀んだ諸君、觀念修法の暇はないにせよ、此日常の三密雙修は人の人たる道てあるから、忘れぬやうに願いたい

祕密百話

終

祕密辭林批評集

東京朝日新聞（八千九百七號）

『祕密辭林』は最近加持世界社より發行せられたり、大日本地名辭書を編纂せし吉田博士ほどの苦心はなしとするも、編者富田敬純師が以往四年半の研鑽の功は、また決して生やさしきことにあらず、抑佛敎には顯密二敎ありて、眞言宗は其の密敎なること位は、青表紙の一冊も手にする程のものならんには、誰れしも知れることなるべし、既に密敎なり、其の祕密にして口傳相承の外は、一切之を示さずといふ部分あり、之を事相と名く、而して之を以て其の宗の誇りとすることは、何事にも研究の鍵を以て進む文明の今日の世の中には、頗る考へものなり、此時に當り、一千年來祕密として、全く開かざりし寶庫を、幾多の毀譽褒貶に頓着せず、決然として展開し之を天下に公にせし富田師は勇者なり、吾人は書を開く前先づ此の勇を多とす。

今や世界の思潮は漸く唯心主義に傾き來り隨つて眞言祕密敎に指を染めんとするもの、東西漸く多からんとす、此時に際して此編著あり蓋し這箇思潮を照す一個の燈臺たるを疑はず、其の燭光の及ぶ所遠きや近きやは別問題として、全く暗黑なる極東祕密海に、遽然として現れたる照暗臺は、學びの人の誰か喜んて之を迎べざるものぞ。

茲に女去の字ありとせん、是を阿闍梨に問へば如法の略字なりといふ、如法を問へば如寶の假字なりといふ、如寶を問へば如意寶珠なりとこたふ、凡ての祕密事相の相承は此の如く迂回せる道程を辿らざれば、一印一明と雖も知る能はざるなり、吾人宗敎の徒すら時に其の迂回の甚だしきに驚くことあり、況や門外漢をや、とは編者が序中に言ふ所なり、此は是れ簡單なる一例に過ぎず、編者が此の辭林を造り上ぐる迄に費せし勞力の如何を

察せざれば、餘りに學問上の同情に薄き譏あらん、而して新思想なる編者が此破天荒の事業を企てながら、密教古來の相傳を一絲亂さず、其儘に說明せるは、如何にも學問に忠實にして、亦後學を誤らざらんとする親切も見えて甚だ奥床し、卷中數多の挿圖を入れ、且西藏に行はるる佛像等をも載せたるは、此種の辭書として脫すべからざる事ならん、各語の說明は詳密といふにはあらざれど、簡明にして要を得たり、專門家には勿論物足らぬ節もあるならんが、此辭林の目的が、元と未だ祕密佛教の何たるを窺はざるもの及び其の初心の輩にせるものなれば、先づ此位の處が適切なるべきか、各語には一々古來慣用し來れる發音を附し、亦其下に附せる梵語は慈雲尊者の研究に據れりといふ。

元來佛教の術語は普通の知識にては解釋せられず、本式にすれば一個の佛教術語學をも形成すべし、其中にて祕密佛教の術語は難中の難なり、此辭林にて其の難は一通り會通せらるべく尙眞言密教獨特の祈禱や儀式や佛畫佛像等の事も亦以て知了するを得べし。

世は開けたり、而して其開けたる風は、吹かぬといつても矢張り少しは高野の嶺や根來の谷にも及べり、千古未發の祕密藏を一青年僧の手に委して、其の開藏を恣にせしめたる同宗の寬容は、此珍らしき辭林と共に亦傳ふるに足るべし。

大阪朝日新聞（一万五百二十三號）

佛教に關する辭典には曩に眞宗一派の佛教辭典あるのみなりしが今回更に眞言宗の富田敦純大僧都は獨力にて祕密辭林を大成したり、密教の內容は古來局外學者の指を染むるを許されずして全く祕密の裡に埋沒せられ居りしが、此辭林は一方同宗派の學者の研究に資すると共に、局外學者の爲に古來の祕庫を開いて之を大方に向つて開放せんとするものなり、同宗をして傳來の祕密境に閉籠むる能はざらしめ、廣く學界に向つて研究の對象たらんとするに至りしは時勢の然らしむる所なるべきが、古來口授直傳を以て師弟間に傳承し來りし教義を全般に亘りて叙說解釋するは容易の事業にあらず、況んや更に之を最新科學的研究に依つて解析するをや、本辭林は其の一着手ともいふべきものにして、先づ密教の相傳を其儘に記述し、一切の新研究とは沒交涉のまゝを存せり、之基礎事業としては然るべき次第にして內部學者の順序として先づ試むべきものなり、敦純師は十有餘年間東奔西走し或は古刹に密書を探り、或は大智識に親炙して口授を傳習し、具に研鑽を重ねて本書を成せりといふ、其宗界を益し後學を助くる効計るべからざるものあらん、說明は眞言密教により天台密教を參照し、五十音順に配し術語、論題、名數、流派、修法、印明、經軌、書名、如來、佛頂、菩薩、明王、金剛、寺名、堂塔、人名、地名、役位、裝束、儀式、聲明、法器、物名、雜語の各門に分ちて記述し、挿圖亦精巧にして善美、唯發音は古來慣用に從ひしは可なるも、他に索引の詳なるものなきは局外研究家の爲不便を脫れず、改版の際追加せらるゝならば妙ならん、更に印度西藏方面の研究を以て其解說を補ふが如きは、後日の事業として學者に期待せられざるべからず、兎に角吾人は宗教界近來の好著として此書を推薦せざる能はず。

時事新報（九千九百三十九號）

由來密教の研究は難事業の一つとされてゐた。如何となれば、東密台密源流必ずしも一つならず、遠く婆羅門教にも系統を有すれば、喇嘛教にも起源を持し、異同端倪す可らざるものがある。而かも此研究たるや佛教梵語學といはず、佛教藝術といはず、佛教戒律といはず、佛教觀法といはず、各其史事を詳にせんには、密教に俟たざるを得ない。本書は乃ち其研究に資する所多からんを期し、苟も筆に傳ふべき限りは、從來口傳すべきものと雖もこれを叙ぶるに吝ならず、能く曲折迂回せる祕密事相の相承を明示してをる、殊に人名は多く諱に從ひ、皇紀によつて生年寂年を註し、各語

下の梵語は慈雲尊者の研究に基づき、兼ぬて羅馬字發音はウイリアムの音符によつたなぞて編者が世の所謂倫理道德を目して精神上の滋養物となし、一般宗教は又これが藥物で、更に密教は其劇藥なりといふ見解を持し、以て此書を公刊した如き、大に評者の意を得たるものである。

讀賣新聞（一万二千二百二十五號）

本書は密教に關する語を集めて明說を下したる書なり。術語、論題、名數、流派、修法、印明、經軌、書名、如來、佛頂、菩薩、明王、天等、金剛、寺名、堂塔、人名、地名、役位、儀式、裝束、聲明、法器、物名、雜語等一切を網羅せり。著者富田大僧都は斯界少壯の學者、其の博識と勤勉とを以てして尙滿五箇年の日月を此の書の爲めに要したりと云へば著者の勞大なりしを推察するに足る。元來密教に關する辭詞の如きは其の意義極めて幽玄にして且つ故らに祕密に附したるを以て、一辭一語と雖も門外漢の窺ひ知る所にあらず、而も門內漢と雖も尙種々複雜なる手段を經ざれば傳授を得難かりしかば、今斯くの如き辭林の出るは其の敎義に觸れんと欲する者の指針たるべきは論なく、好參考たるべきを疑はず、思ふに密敎の傳來は最も古くして本邦の文明發達には頗る關係深く、本邦古來の歷史文學中には必ず密敎に關する語辭の續出する有樣なれば、此の辭林は是等の學者にも良師友たるべし。現時思想界の動搖著しく社會は何等かの歸着點を發見せんことに苦悶せる狀態なり、密敎の研究をして容易ならしめ以て思想界動搖救助の一材料たらしむるも亦無用の事に非るべしと信ず。

やまと新聞（八千二十五號）

密敎は深遠なる哲學的基礎の上に敎理を組織すると同時に、加持祈禱、偶像崇拜、庶物崇拜など許多の迷信を包含して、我國平安朝三百年の文明に拔くべからざる印象を殘せり、今日古美術研究の起るに伴ふて、密敎研究も亦漸く盛ならんとす、本書の編纂法は術語、修法、流派、人名、寺名、儀式など廿五門に分たれ、コロタイプ刷、色刷の曼陀羅、結界圖など挿繪四百餘、尊數一千百餘尊、語數八千餘言に及ぶ、殊に主要なる語にはサンスクリットの原音と羅馬綴とを註し、用意の頗る周到なるものあり加持世界社の十周年紀念出版としては實に立派なる大著にして、著者十三年の苦心亦空しからず必ず、學界の歡迎を受くるを信ず。

國民新聞（六千九百三十九號）

近來辭書の出版甚だ多しと雖も學海の祕密を破り、出版界を驚かしたるものは此の祕密辭林に如くはなし、由來眞言は密敎なるが故にその門內に入りたる輩にあらざれば之れを窺ふことを許さず、今や本書出でてその祕密を開放されたり、著者は新義派に篤學の令譽ある大僧都富田古堂師にして術語、論題、流派、修法、經軌、人名、儀式等二十五門より成立ち、傍ら台密の新說をも加へ、精巧なる圖像を示して說明したるが今更に同師の博學と精力に驚かざるを得ず、權田大僧正本書を推奬して曰く、祕密敎に關して事相に敎相に世諦に眞諦に細大網羅して遺漏あるなし、此道の研究者は一本を座右に置いて依止の阿闍梨とせよ、と、本書の眞價は卽ち知るべし。

哲學雜誌（四十四年六月號）

佛敎を研究せんとするものゝ常に困難を感ずるは、密敎の研究なり。佛敎中の研究に於て、至難とするは、密敎なるべし蓋し密敎は印度、西藏、日本の三個の中心點を有し、互に共通せる所あり、或は各自獨特の容を有するあり、更に波羅門敎系を引くもの、喇嘛敎に起原を有するもの、印度敎に材料を取るもの、道敎の所說と混ずるもの等ありて、其所說互に矛盾ありて、異同の識別だに難事業とする所なり。我國の密敎は、弘法大師の密敎大成に基し、東台兩傳の發達あり、進て敎相事相の相承を重じ、殊に事相は全く祕密に附し、如法の阿闍梨を訪ふて複雜なる儀式の下に相傳し來

り、其の片影だに世人に示さず。且つ史傳に徵するなく、口傳の外に、筆によりて研究せらるべき道なし。蠡て他方を見るに密教の研究は、其物自らに巨大の價値あるは論なく、進て是が研究と相待ちて、佛教の研究に補益する所多く、我國の佛教各派を研究せんには、密教よりせざれば、其根本を窺ふに困難なることは、世人の認むる所にして、是等の問題は密教の研究より得るべき結果なり。進て佛教史、梵語學史、佛教藝術史、戒律史、觀法史、等の完成も亦密教の研究によりて始めて全し、佛教の發達中特に重要なる自他力の發達史も、亦密教を離れて攻究し得べきものにあらず、のみならず我國の歴史、文學を研究せんには、密教を知らざれば、之を行ふこと能はず。平安朝以來吾國の文化は密教に負ふ所多くして、常に是等の研究者は、密教の用語に遇ふ毎に、其意を知るの方便なきに苦みつゝある所なり而も密教は口傳を重じ、此密教の寶庫を開くを許さず、遂に研究者をして、長大息するの止むなきを、よざなくせしめたり。然るに密教研究者の一人として、深く有德の阿闍梨に就き、其所傳を相承し多年研究の結果、其教示し得べきを示し口傳を筆にかへ、以て密教の研究をして易からしめんとしたるは、眞言の人富田敦純氏にして、其公にする所の祕密辭林は、則之れなり。該書は五十音順により各語を配列し、各語の下に、術語、論題名數等約廿有五門の細目を附し、各用語には漢字及び梵字或はサンスクリット語を附し、之れが說明を加へ其出所典故を明かにせり。殊に本書は殆ど凡ての教に關する名辭を網羅し。而も密教古來の相傳を其儘に採用し、著者が新研究による凡ての意見を交へずして、相傳口傳の儘に記述せるを特色とせり。著者自ら曰く『寧ろ間々新研究を挿みて、學者をして新古を謬らしむるに勝るを信ず』と。此點は吾人の多とする所にして、本書を繙かば、親しく阿闍梨の口傳を受くるの感あり。以て其用語の如何なる意味にて所傳せられたるかを知り、進て新研究に入る階級を索め得べし。若し該書に對して一二の要求を言はしめば、其說明の漢文直譯體にして、難解の節あることは其一なり。然れども此の缺點は蠡て該書の長所にして、口傳相傳を主とし、著者意見を交へず、且つ其說明も出所典故を明かにせん爲め主として經疏、儀軌及論藏より引用せる文章多きが爲めに、研究上の指針を與ふると同時に、難解に陷りたるは止むを得ざる所ならん。次に名辭の發音は慣用に從ひたれば、所謂讀癖を知らざるものには、辭林の活用を十分ならしめ得ざることなり。されど著者は近々索引を大成し、第一版購讀者に頒布するの準備中なりと聞くが故に、其缺點を補はるゝを得ん。要之、辭林としては多少の缺陷あらんも、口傳以外に一歩も出づること能はざりし密教、堅く祕密の庫底に鎖されたる眞言教に對し、如此大膽なる開放主義の著述を見たるは、寧ろ破天荒のことゝ云はざるべからず。吾人は暗黑裏に葬り去られつゝありし密教に對して之れ以上の開放を希望し說明を望むは、却て愚なるを知る。著者の本書を草するに當り星霜十餘年を閲す。而かも内には權田雷斧氏を始め密教の諸大阿闍梨の或は校閲し或は指導せる所あり、外には佛教學者の助くるあり、以て本書を大成せりと聞く。吾人はその價値あるを認むるに吝かならざるものなり。蓋し佛教を知らんとするものゝみならず、我國の歴史文學美術、風俗を研究するの徒は、必ず座右に具ふべき好著述たることを承認せざるものなからん。

新公論

（第二十六年の卷第七號）

是迄單に佛教研究者といはず、深く我が國史を究め、東洋の藝術史を檢覈せんとする人々が、共に摸索するの手段を得ずして、空しく不可解の浩嘆を發したものは卽ち密教である、我國の密教は弘法大師の大成に基き、以來東寺叡山兩傳の發達あるが、何れも嚴重なる儀式の下に師資口傳する外、寸毫も之を外間に示す事を許さぬが故に、史傳の以て徵すべきものがない、隨て密教に負ふ所尠からざる平安朝以後の文化を研究しようとする史家

が、常に密教の用語に遇ふて殆ど茫然自失、推理判斷の休止を餘儀なくされた有樣は傍の見る目にも如何にも氣の毒な次第であつた、爰に十餘年刻苦經營の結果として本書の出でたるは、此等研究者に取つては誠に闇夜に灯炬を得たにも增す事と想ふ、千百餘頁の大冊一時に徹頭徹尾目を通す譯に行かぬ、細評の如きは他日に讓るが、全體の體裁通常辭書の編纂法によりて、五十音順に各語を配列し、その下に術語、雜語、印明、修法等二十五門の目を立てゝ各用語には梵字漢字或はサンスクリット語を加へ、且つ出所典據を明してある、特に著者は古來の相傳口傳の儘に記述して、妄りに新意見を加へて、學者をして新古を謬らしむるを避けたといふ、兎にも角にも時代の然らしむる所とはいへ、堅く祕密庫底に鎖された眞言教に對し斯く大膽なる開放主義の著述を見るに至りたるは、著者富田大僧都を始め、之を補助誘掖せる僧都の先輩知友諸氏に謝意を表せずには居られぬ、爲めに我が國史、文學、美術、風俗を研究せんとする者等に與ふる利益のみにても、どうして〳〵測るべからざるものである、併し差當り一の不足をいふ事を許して貰いたいのは、インデックスのない事である、訂正再版の際是非入れて頂きたい。

早稻田文學　（四十四年八月の巻）

眞言宗の人富田敬純氏の『祕密辭林』と題する書を貰つたので手當り次第にさま〳〵な佛教の象徴に關する説明を拾ひ讀して、非常な興味を感じた。『祕密辭林』は名の示す如く一種の辭書である數年に亙る不斷の努力によつて、編まれた千數百頁の大きな書物で、云はゞ祕密教の百科辭典のやうなものである。術語、論題、名數、流派、修法等二十五門に亙つて、祕密佛教の所謂祕密を開放し説明したものである。一見狹い範圍の專門書のやうであるが、併し見方を變へて祕密佛教の奥龕を民衆の前に開放したと云ふ點を考へると、餘程廣い範圍の面白味がある。

かのフランスのユイスマンズが、始め極端なる肉欲描寫から出發して、最後は醜惡なる現實の世相から脱離し、ノートルダーム・ド・シャルトルの大寺院に入つて中世紀の遺物であるキリスト教の象徴の研究に一身を委ね、その神祕微妙なる象徴のうちに靈肉二元の融會境を求めたと云ふ經路に、深い意味を認める者は、佛教象徴の研究の必ずしも現代の吾々と無交渉でない事を思ふてあらう。現實に絶望したるものゝ探り行く神祕の世界は、今後のわが文壇にも時を追うて其の閃めきを見せるであらう。ユイスマンズが『僧』『途上』『大寺院』の三部作によつて、フランス近代の小説界にいみじき象徴の世界を提供したやうに、わが國祕密佛教のうす暗い神祕の奥から、何等かの新らしい生命の泉を汲み來る作家の或は將來に出るかも知れぬ。佛教象徴の研究――その奥には慥かに何等かの新らしい力が動いて居る。

何を求めても充ち足らぬ最近の私の心は、はしなくも此の緣遠い書物に、一味の波動を感じた。無論此の『祕密辭林』一冊によつて、どうのかうの云ふのではないが、少くとも今迄はたゞ自分とは緣遠い暗い世界のやうにばかり思つて居た密教の神祕界に、何かしら物あつて動けるを見るやうになつた。此の書を手引として一歩その世界の空氣に觸れて見るのも面白いやうな氣がし出した。必ずしも其れによつて我が生の充足を得やうとするのではない。たゞばら〳〵に壞れ散つたわが心の斷片の一つだに、せめて其うちに求め得ればと思ふ、みすぼらしき欲求である。みすぼらしきにせよ最近の自分には珍らしい欲求である。此欲求は一つは他の一身上の動機と合して、疲れた私の心の歩みを、時あつてかの薄暗い象徴の世界に誘ふ。私は少なくとも『祕密辭林』の著者に感謝しなければならぬ。

東亞の光　（四十五年二月號）

昨年の春に刊行せられたる書を今に於て批評するは時機を失へるの觀あれど、頃日に至りて初めて

やゝ精細に翻讀せるが故に敢て一言を費さんとす。但し本書の如く永遠の價値を有せる書に對しては、批評の時期を云々するの要なしとも考へらるゝなり。世に其の形式の實質より勝れる書あり。其の實質の形式に勝れる書あり。本書の如きは確に後者に屬す。沾らんが爲に作らるゝ書の多き世に此の如く眞面目なる著述を見るはいかにも心强く感ぜらるゝことなり。著者は『一日一頁を記さば三年にして一千頁の辭書を得ん』との意氣込にて明治三十九年の十月より之に着手せしが、研究上の困難非常にして五個年を經過せる後初めて之を大成せりといふ。元來佛教のテクニックを今日の用語にて說明せんとするは容易の業にあらず、殊に其の組織の複雜にして意義の深奥なる密教の語に在りては蓋し幾層の困難あるべし。況んや該教に於ては祕密相傳といふ如き關門の久しく鎖され居たるをや。吾人は著者が五個年にして斯る大著を完成せる精力に寧ろ驚歎せざるを得ざるなり。

本書は凡て一千一百三十四頁の大冊なり。吾人は全く密教には門外漢なれど、今まで聞き覺えたる若干の語を索むるに、いづれも明曉なる解釋を得たり。いづれの頁を開きても編者が勞苦の跡を認め得ざる無し。但し本書は其の質、文に勝てるものにして其の體裁よりいへば極めて拙なり。一面に五號活字にて印刷して餘白少く、挿畫の如きも概して鮮麗ならず、其の實質以外に讀者の心を惹くべき所更に無し。吾人は編者及び發行者の人と爲りを想見して、此の無機用なる所に却て或る奥床しさを感ず。されど讀者として要望したき一二の點をいへば、第一に索引若くは詳細なる目次を附せられんことなり。又吾人の如き門外漢には密教家常用の音訓に通じ難き所少からず、漢字劃別の索引あらば殊に便多かるべし。(辭書の用は勿論門外漢に於てことに多ければ、此の希望も無理にはあるまじと思ふ)。第二に、人名の下に各生卒の年代を皇朝紀元によりて記されしは極めて有益なるが、なほ進みて重なる寺院の草創につきても同

樣の面倒を惜まれずば更に益多かりしならん。例へば和銅二年の建立とある下に紀元何年と記入ありたきなり。こは吾人が實驗上より出たる希望なり、敢て難題を提出して著者を苦むるにあらず。第三、各寺院の通信を其儘に採錄せられしは難少きに似たれど、多少の取捨も必要ならずや。隨分いかゞはしき通信も見當らざるにあらず。以上はたゞ心附ける一二を附記せるのみ。

密教に關する智識が密教そのものゝ發展上必要なるのみならず、佛教々理史、佛教藝術史等の多くの研究に必要なること高楠博士の序文にいへるが如し。吾人は頃日本邦中古以來の思想發達史ともいふべき方面に一二の研究を試みんとして、密教が本邦の人情風俗習慣儀式等の上に及ぼせる影響の偉大なりしに今更ながら驚歎せり。隨てまた文學美術等に及ぼせる其の直接間接の影響は非常のものなるべし。故に密教につきて全く無學なるものは、中古以來の日本人につきて正しき觀念を得る能はずとも言はるべきなり。本書の價値以て知るべし。さるにても祕密主義を取り超然主義を守り、其の不可知的なる所に特別の貴さを認め居たる密教の人々が自ら門戸を開放して、吾人門外漢に其の祕寶の光を惜氣もなく投與へんとするに至れるを以て、時勢の赴く所を推すべきにあらずや。偉大なるは時の力なるかな。

國華（第二十二編第二百五十四號）

○上代の美術を理解せんと欲するには佛教の智識を必要とするは云ふ迄もないが、特に密教に關するものに至ては、其事相何れも口傳相承を尙びて門外漢は容易に知るを得ざるものがある、佛像圖彙の如きは固より詳精なる述作と稱すべきものではないが、從來は他に適當の書なきが故に時には甚だ必要視せられたるものである、然るに此頃眞言宗中尤も摯實の學者として聞えたる富田斐純氏が著せる『祕密辭林』は佛教美術の解釋に於ても造詣甚だ深く彼の佛像圖彙とは雲泥の差ありて頗る東洋美術研究の學徒を益するものと云はざるを得

ない

○秘密とは之を傳ふることの眞實に難きが故に起るものか、將た之を公にすることが所謂教權の維持に害あるが故に起るもの歟、世の中の秘密は全く後者の動機に依て起るものが多數に居る、這種の秘密は宗教の上にも又學問の上にも屢々行はれて居る、茶人者流がその藏品を秘して容易に人に示さゞるが如きも亦之れである、凡そ茶人者流は自己の物を秘藏しつゝ他の物を見れば強ひて之を誹らんとするの風があつて、其陋劣なる事驚かざるを得ない、然るに美術の事は其者流と關係すること多い、從つて其研究の如きも困難を感ずるものが種々である、只之を研究する學者が材料の所有者たる茶人者流にかふれずして公明の態度を取りて誠實に事に從ふが何より大切である、富田氏の秘密辭林が密教の秘密藏を如何なる程度まで開披したるやは知らざれど、ともあれ其發行は宗教界に於ける破天荒の事業であつて、且つ幾多世の陋劣者に對して大なる刺激となるであらう。

萬朝報（六千三百九十八號）

○本來不可說を標榜せるものこれを密教とす、密教の辭林を編むとの困難なる推して知るべく、今日まで人のこれが編纂を企圖せざりしも所以あるを思ふ也、富田氏の此編著眞面目にして、博引旁索、よく斯界に炬を投じたるを見る、その說明は旨と密教相傳のもの也、若夫そのひとり眞言密教の說によりて天台密教との對比を示すと少かりしは、九仞なほ一簣を缺くの憾なきにあらずと雖も、今日よくこれをなし得る學者ありや疑はし、各語の下に術語、論題、名數、流派等廿五門の分類によれる符號を附したるは甚だ便也、なほ慾をいはゞ寺塔、法器等のカットをも入れてほしかりしと（佛像は大抵入りたり）更に一層門外漢の閱讀に重きを置かれたきと等あるべし、遮莫これまた大に歡迎すべき辭書界の珍客也。

秘密辭林批評集　終

大正二年三月廿四日印刷
大正二年三月廿七日發行

編輯兼發行人　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　富田敦純

印刷人　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　伊豆宥法

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍工場

發行所　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　加持世界社　電話番町三七二四　振替東京三〇九五

324
341

前遞信大臣 林董伯序
東北大學長 澤柳政太郎君序
東洋大學長 前田慧雲君序
東京帝國大學教授 高楠順次郎君序
豐山派前管長 權田雷斧僧正閲
仁和寺門跡 土宜法龍僧正題
天台宗座主 山岡觀澄僧正題字
高野派管長 密門宥範僧正序
豐山派宗務長 富田斐純著

秘密語林

定價 五圓
郵稅 十六錢
隅皮頗美本
菊判一千二百頁

新時代の要求に應じて秘密の開放ぜられたるもの
只此一冊あるのみ

發行所 東京市小石川區大塚坂下町十七番地
加持世界社

324
341

終